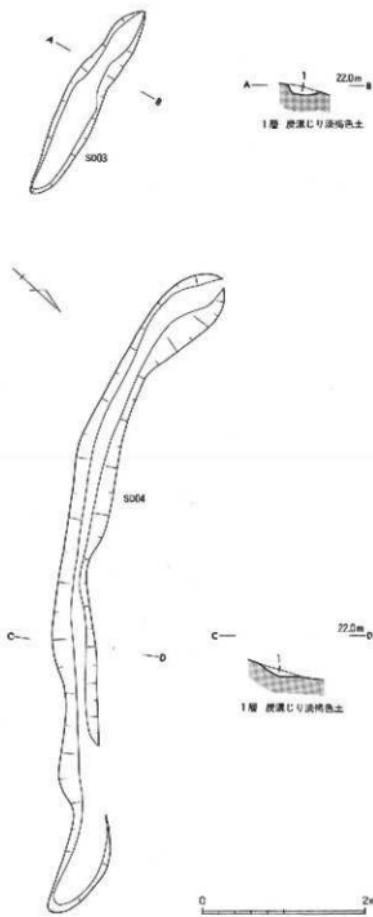


は1mm程の長石や石英などを含む。334はやや厚めの複合口縁がほぼ真っ直ぐに聞くもので、端部は明瞭な面を持ってつまみ出されている。淡茶褐色のやや縮まった胎土には1mm以下の長石や石英などを含んでいる。外面にはススが付着している。335は甌もしくは壺の底部と思われ、5cm程の平底を呈す。暗橙褐色～暗茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。おそらく後世の流れ込みと思われる。336はやや長めの複合口縁が真っ直ぐ外に聞くもので、その端部は明瞭な面を持って強くつまみ出されている。複合部はナデによりくびれており、その稜は水平<sup>2</sup>を意識して突出している。明橙褐色の胎土上には1mm程の長石、石英、赤色土粒等を含む。壺337は垂直に立ち上がる複合口縁を持ち、その端部は軽く面を持って外側につまみ出されている。複合口縁部の稜は水平に突出している。黄褐色の胎土には2mm以下の中石、石英などを含む。338は壺の腹部で、淡茶色の胎土には乳白色の粘土が混じっており、1mm程の長石や石英などを含む。339は直立する単純口縁を持った壺であるが、その口縁の形態は単純ではなく、壺の頸部を強くナデて稜を持たせ、口縁にナデ調整を施して端部を若干つまみ出すことにより、あたかも複合口縁の様に見せようとする意匠を感じさせるものである。淡橙褐色の胎土には長石や石英等を含んでいる。高杯の脚部340は端部が聞いており、おそらくは円盤光境による接合法を探っていると思われる。外面は細く鋭い工具によって縱方向のハケメが施され、内面は長い工具で横方向にケズられている。淡茶褐色の胎土には長石、石英などを含む。高杯の脚341は先細りの端部を持っており、おそらく脚差込による接合法を探っていると思われる。色調は淡黄白色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英などを含んでいる。小型の高杯342は脚部を接合した後に脚底中央に径3mmの軸穴が穿孔貫通しており、杯側から粘土で埋められているものである。淡茶褐色の胎土に1mm程の長石や石英などを含む。343は壺部の広がらない低脚杯の脚部で底部裏側には幅5mmのヘラ状工具による左回りのケズり後、ナデが施されている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。344は平たい脚部を持った低脚杯で、脚は杯部に張り付けた後に脚の内側を粘土で埋めている。暗茶褐色の胎土に1mm程の長石や石英などを含んでいる。345は高い脚部を持った低脚杯で、明黄褐色の胎土には、1mm程の長石、石英などを含む。346は鼓形器台の受部で、その稜はよく発達している。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英、金雲母、黒色砂粒などを含む。鼓形器台347は厚い端部を1cm程外側に強く折り曲げている。乳灰色の胎土に1mm程の長石、石英などを含む。348は鼓形器台の脚部と思われ、その端部は強く外反しており、外側に明確な面を持ち、先端は上に向かってつまみ出されている。橙褐色の胎土には1mm程の長石が目立つ。鼓形器台350はかなり縮約した筒部を持つが、内側には面が残っている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石や石英、金雲母等の砂粒を含んでいる。コシキ形土器351はS106中央ピットの中に突帯側の口縁を上にして潰れた状態で出土した。口径は9.5cm、器高は31cm以上あり、口縁の作りが器壁に比して厚いのは、指揮さえにより形成したためと思われるが理由は不明である。口縁の内側は端部のみナデ調整が施されている。口縁に近いところに1対の取っ手が付くが、対角線上にはない。取っ手のすぐ上部に幅1cm高さ1cm程の台形をした突帯がたれ気味に巡っているが、取っ手の穴に対応させないように一部突帯を潰している。これはコシキ形土器を使用する際に取っ手に何かを通すことにより、突帯がじゃまになるために執られた措置と思われ、逆にそうまでして突帯を巡らすというのは突帯に何らかの実用的な役割があるので、想起せるものである。淡茶褐色の胎土には2mm程の長石、石英などが含まれる。352はコシキ形土器である。口径11.5cmで、突帯と取っ手はバランスよく配置されている。突帯張り付け時の指頭土痕が見られる。淡黄褐色の胎土には1mm程の長



第101図 竹ヶ崎遺跡 S D03・S D04実測図 S = 1/60

石、石英などを含む。

S D03・04 (第101図)

S D03 長さ2.6m、幅50cm、深さ10cm程の溝状造構で東西に軸を取っており、2m程北側に離れて伸びているS D04とは軸を等しくしている。S D03からの出土遺物は甕又は壺の胴部のみであったが、残念ながら図化には至らなかった。遺物の時期は弥生時代後期後半頃と思われる。

S D04 長さ4m、幅10cmのごく浅い溝状造構で、ややカーブしながら東西に軸を取って伸びており、加工段07及びS 105の外周溝、S D03等と軸を等しくする。出土遺物として、弥生時代後期末の甕、鼓形器台等がある。

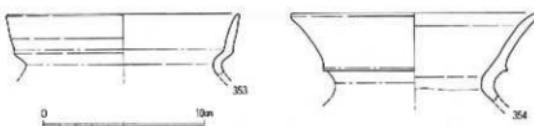
S D04出土遺物(第102図) 甕353は直立気味に立ち上がる複合口縁の端部が細くなるものである。鼓形器台354は短めの受部が一樣な幅で伸びており、稜は鋭く水平に突出している。色調はそれぞれ茶褐色を呈し、1mm以下の長石、石英などを含む。出土遺物を見ると塙津5期に中たるが、正確な時期は不明である。

S 107・08 (第103図)

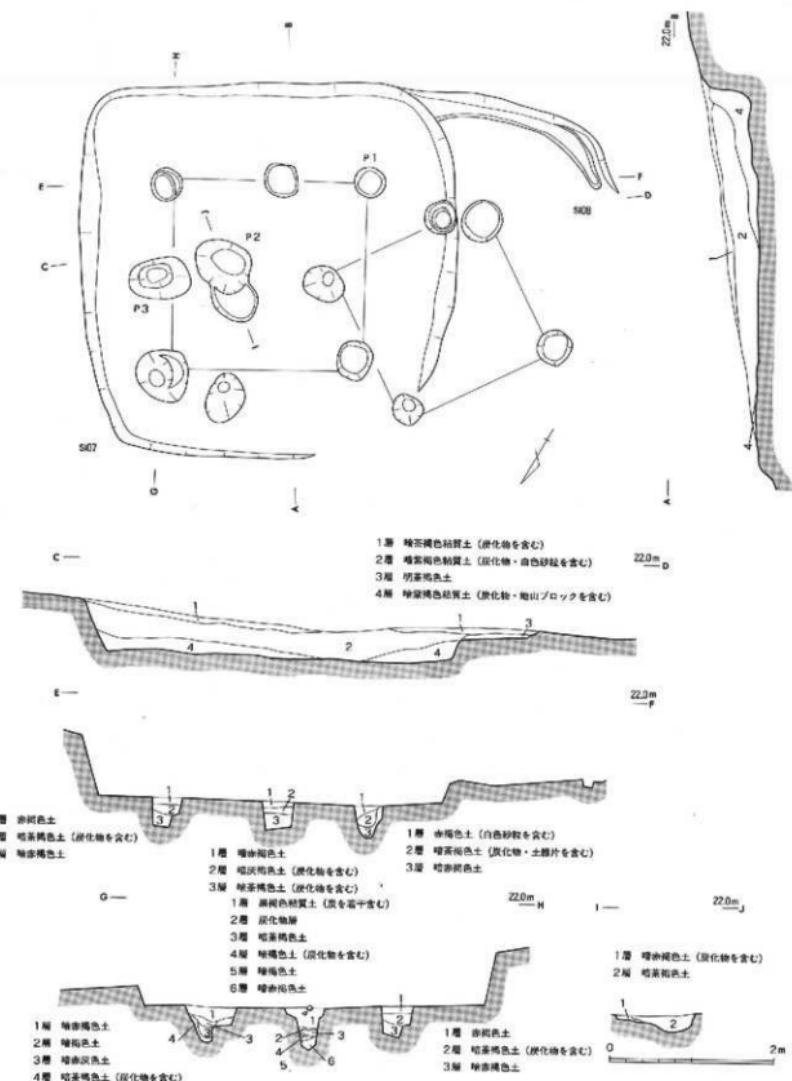
東側調査区下段において、最東端に位置する当遺構は切り合い関係にある2棟の竪穴住居跡からなり、周りには他の遺構が見あたらない。

S 107 4.5m四方の隅丸方形を呈す竪穴住居跡で、整体溝は検出できなかった。

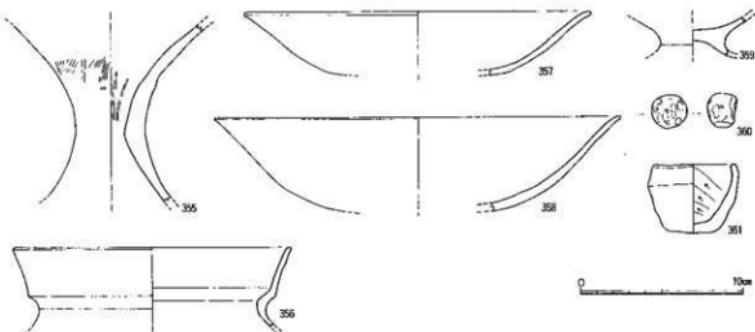
主柱穴と思われるビットは壁際から1m程内側に寄ったところに深さ50cm程掘り込まれており、柱間距離は2.3m~2.5mある。中央ビットは(P 2)もしくは(P 3)と考え



第102図 竹ヶ崎遺跡 S D04出土遺物実測図 S = 1/3



第103図 竹ヶ崎遺跡 S I 07・S I 08実測図 S = 1 / 60

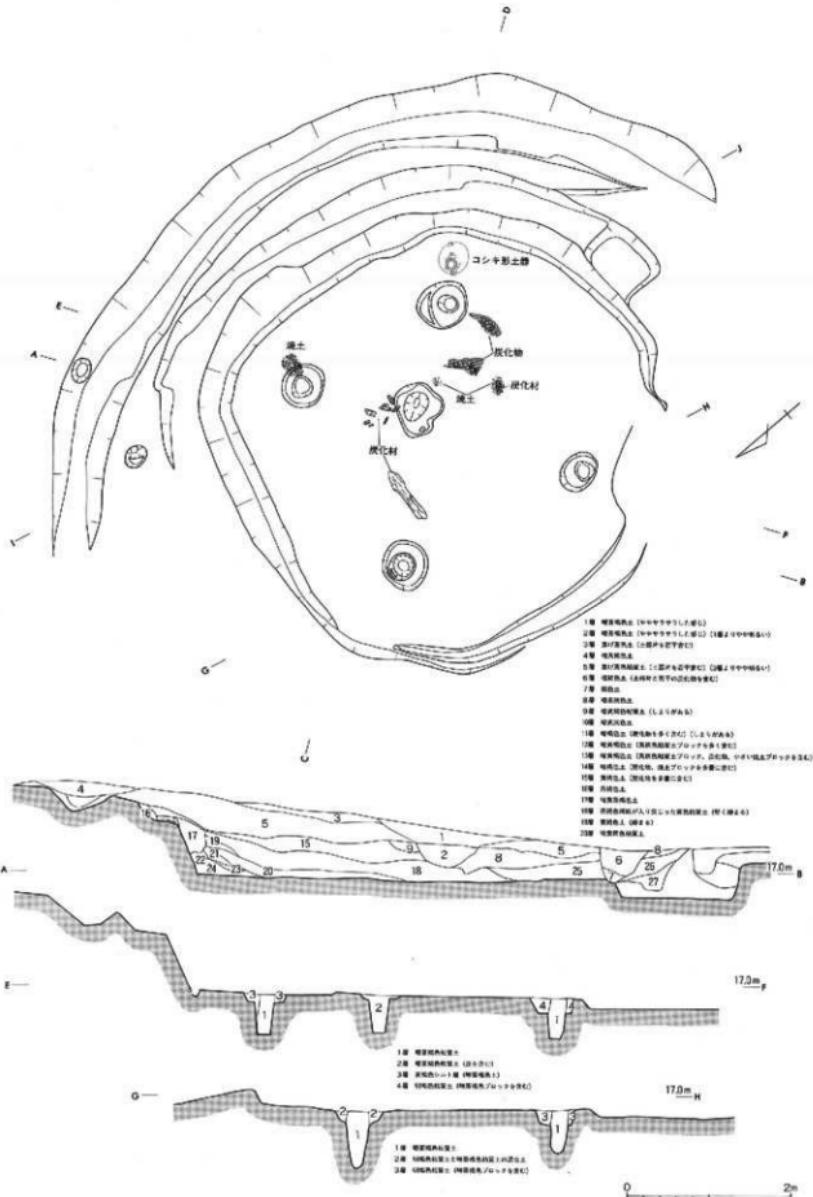


第104図 竹ヶ崎遺跡 S I 07～S I 08 (361) 出土遺物実測図 S = 1/3

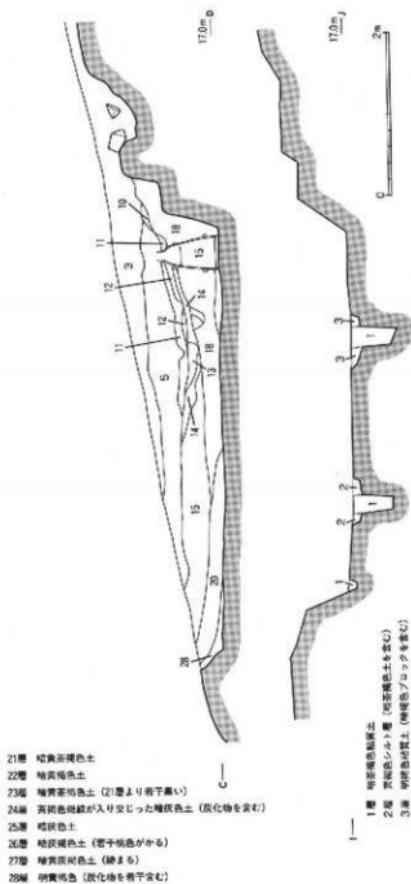
られるが、(P 3) は楕円形の2段階になっており、炭層を含むこと等から、こちらが中央ピットになる可能性が高い。すると、S I 07はかなり東に寄った中央ピットを持つことになる。土層図(C-D)より、S I 07がS I 08を切っていることが分かる。建物の軸はS I 08より45度振っている。S I 08 壁際から1m程内側に寄った所に主柱穴が掘り込まれており、柱間距離は2m程と、S I 07より1周り小さな造りをしている。壁際には20cm幅の壁体溝が巡る。

S I 07・08出土遺物(第104図) 鼓形器台355は発達した長い筒部を持つ。外面にハケメが施され、内面にはシボリがはいる。淡橙褐色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。時期は塩津1期に中たり、後世の流れ込みと考えられる。357・358は高杯の杯部で段を成さずに緩やかに外反する。炭茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。359は低脚杯の脚部で、長石、石英などを含む。360は手捏ねの土器玉で、直徑は2cmである。淡茶色の胎土には、余り砂粒を含まない。361は手捏ねの小鉢で、口縁端部は軽く内湾して丸く収まる。内面は指によってナデ上げられている。淡黄色の胎土には2mm程の長石、石英などを含む。號356は真っ直ぐ伸びた複合口縁がやや直立気味に立ち上がりつており、その端部は先細りして若干の面を持つ。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。

遺物を見るとS I 07から高杯、低脚杯が出土しており、それより前に塩津5期の甕を持つS I 08が在ったことによりS I 07・08の廃絶時期は塩津5期の内と思われる。  
(梅木茂雄)



第105図 竹ヶ崎 S109実測図 S = 1/60



第106図 竹ヶ崎遺跡 S 109土層断面図  $S = 1/60$

穴が配されている。支柱穴は、それぞれ、上段の径が40cm~60cm、下第106図 竹ヶ崎遺跡 S 109土層断面図  $S = 1/60$  段の径が10cm~20cmを測る。深さは、それぞれ50cm~70cmを測る。

住居跡の中央やや南西よりには山陰地方独特の中央ビットが存在している。2段堀になっており、上段のプランは、北、東、西では、辺を成すが、南側ではやや乱れている。北の一辺では、60cm、東の一辺では、30cm、西の一辺では、40cmを測る。下段は、ほぼ円形で上縁での径30cm、深さ40cmを測る。

床面の壁際には、南北側では一部後世の擾乱により失われているものの、幅10cm~20cm、深さ5cm~10cmの壁体溝が巡らされている。

この竪穴住居跡の壁高は、最も保存状態が良かった東側では、床面から前述した平坦面まで70cm、外周溝の内側上縁まで121cmに達する。これは、かなりの深さと言わざるを得ず、後世の土地利用によって削平されたであろう竹ヶ崎遺跡の他の竪穴住居跡の本来の深さを、想像させる資料と言うこ

### S 109 (第105図~第107図)

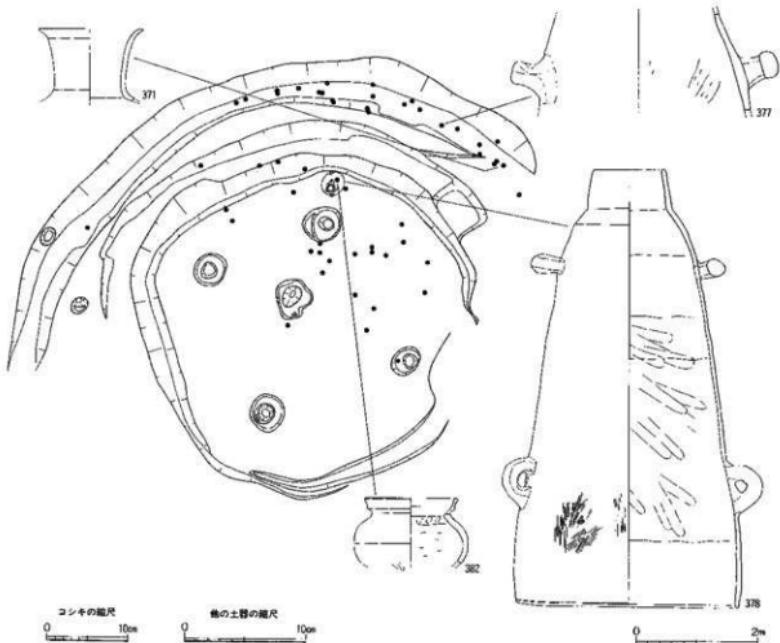
調査区東側の下段に位置する竪穴住居跡である。北に開く小谷の東の肩部に立地している。このため竪穴住居跡の東南部では残りが良いが、南西部では流出によって壁体部を殆ど残していない。僅かに壁体溝を残すのみとなっている。竪穴住居跡の検出面の標高は、南東部が17.2m、北西部では、17.6mである。

また、床面での標高は、概ね16.9mである。

全体の構造 S 109は、斜面上方側に竪穴住居跡本体を取り囲むように平坦面と外周溝を備えている。平坦面は、斜面上方側を一段削って造られており、幅30cmを測る。また、外周溝は、上縁部で幅10~40cm、溝底では、20~40cmを測る。

こうした施設の位置づけについては、斜面故の構造であるのか、あるいは住居の特殊性にあるのか、今後の研究にまたねばならない。ただ、竪穴住居跡本体と平坦面、外周溝の位置関係からは、平坦面が屋根の外側にあったとは考え難い。そうすると、外周溝は、屋根の下端部が位置していたのかも知れない。従来の竪穴住居跡の構造そのもの再検討も必要になろう。

**竪穴住居跡本体の構造** S 109本体の平面プランは、斜面下側にあたる南西側が流失しているが、一応隅丸方形を成している。北側の一辺は、床面で3.5m、東側の一辺は、床面で3.5mを測る。南側の一辺は、やや内湾する。それぞれの、コーナーの内側には、主軸をほぼ南北にとる2段堀の支柱



第107図 竹ヶ崎遺跡 S I 09遺物出土状況 S = 1 / 80

とが出来るであろう。

**住居跡の特徴** S I 09で知り得た2、3の点について述べておきたい。

S I 09の覆土の堆積状況(第105図、第106図)は、この住居跡が廃絶された後、周囲から土砂が堆積してきていることを示している。このことは、前述したこの住居跡の壁高が、東側だけ高かったと言うことを否定している。つまり、多少の高低差はあったかも知れないが竪穴住居跡の掘り込み面がほぼ同一レベルにあったという事を暗示しているのである。C-Dの土層断面図を見れば、中央部よりやや東側でレンズ状の堆積を示す部分が存在しており、一時期この辺りに窪みが出来ていたことを示していることも、こうした事を裏付けている。

この住居跡の覆土の下部から床面にかけては、所々において炭化材が認められた。また、覆土の11層から15層にかけては炭化物や焼土が認められ、とりわけ14層、15層では非常に多く認められた。床面や壁面の焼けている所は取り立てては多くなかったが、こうした炭化材、炭化物、焼土の存在は、S I 09が焼失家屋であったことを示しているといえよう。

次に、この住居跡で大形のコシキ形土器が床面に直立して出土して注目された。大形のコシキ形土器は、東南の支柱穴とコーナーの壁との間から(第106図、第107図)出土した。従来、この類のコシキ形土器については、その使用方法などについて種々の説があるが、今回の出土の状況は、柱と壁の間に置かれていたのであり、見方によれば、あまり邪魔にならないところに安置してあった

というのが適当であろう。つまり、當時は利用されなかった、必要に応じて利用された土器であったと言うことが出来よう。

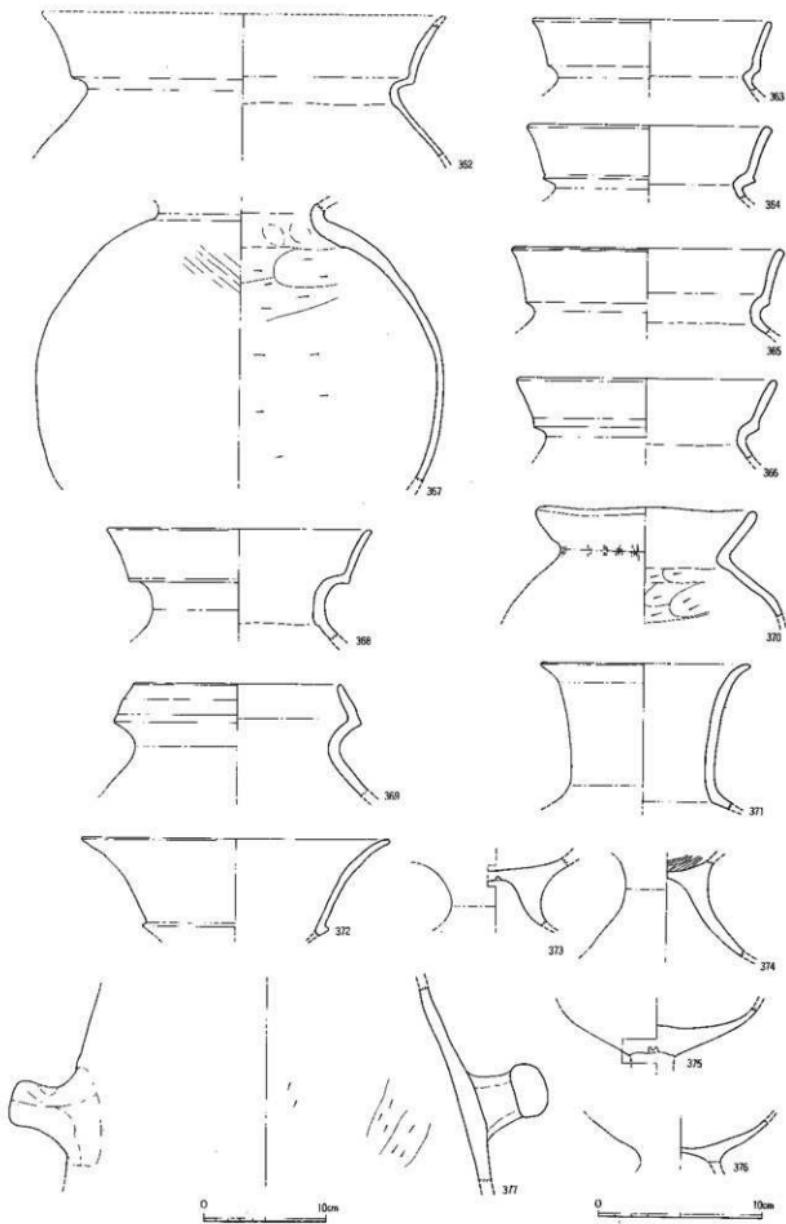
また、この土器の使用時の上下については、必ずしも出土状況が反映されているものではない可能性もあることを述べておきたい。それは、立てて置く場合口径の大きい方を下にする方が安定がよいからである。従来のこの類の完形品の出土状況は、横転して出土する例が多いことも参考としたい。

何れにせよ、まだこの様な大形のコシキ形土器の用途、使用方法について決定的な解決をみていない事は確かであり、今後の研究に期待するところが大きい。

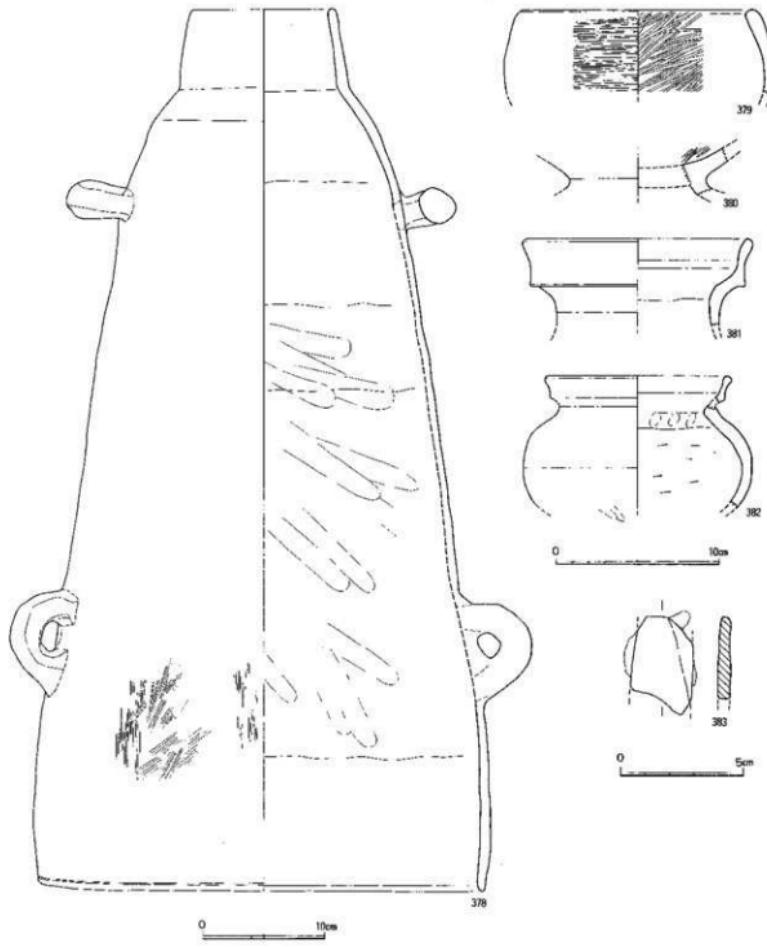
#### 出土遺物（第108図、109図）

362～367、370、382は、變形土器である。362は、復元口径24.7cm、残存高8.5cmを測る。やや外側に開く複合口縁を持つ。淡黃白色を呈し、胎土はやや粗い。焼成は良好である。刺落が著しく器面の調整は、不明である。363は、復元口径14.4cm、残存高4.5cmを測る複合口縁の口縁部である。口縁は、やや外側に開く。口縁端部は、丸く仕上げる。淡黃褐色で胎土は、やや粗い。焼成は良好である。刺落が著しく器面の調整は、不明である。364は、復元口径14.5cm、残存高4.3cmを測る複合口縁の口縁部である。口縁はやや外側に開く。口縁端部には、平坦面をつくる。口縁の立ち上がり部には、アクセントがつき、稜を成す。淡黃褐色を呈し、胎土はやや粗い。焼成は良好である。調整は、外面がヨコナデ、内面は風化のため不明である。365は、復元口径16.3cm、残存高4.9cmを測る複合口縁の口縁部である。口縁はやや外側に開く。口縁端部には平坦面を持つ。淡黃褐色を呈し、胎土はやや粗い。焼成は、良好である。調整は、内外面ともヨコナデで仕上げている。366は、復元口径15.7cm、残存高5.0cmを測る複合口縁の口縁部である。口縁は、やや外側に開く。淡黃褐色で胎土はやや粗い。調整は、内外面ともヨコナデで仕上げている。367は、残存高17.0cm、胴部最大径25.0cm胴部である。胴部は、ほぼ球形を成すものと考えられる。淡茶褐色で胎土はやや粗い。頸部外面には強いナデが施されている。肩部上方外面にはヨコナデが、その下方には粗い斜めのハケメが認められる。頸部内面には、指頭による押圧が、胴部内面には横方向のヘラケズリが施されている。370は、口径13.2cm、残存高6.5cmを測る、「く」の字口縁を持つ土器である。淡茶褐色を呈し、胎土はやや粗い。頸部外面にはハケメの痕跡が残る。胴部の内面にはヘラケズリを施している。382は、口径11.4cm、残存高8.2cm、胴部最大径14.0cmを測る、短く立ち上がる複合口縁を持つ小形の土器である。口縁端部は丸く仕上げている。口縁の立ち上がりも丸く造っている。床面直上から出土した。胴部下半部外面には、斜め方向のヘラミガキが認められる。頸部内面には指頭による押圧が、胴部内面にはヘラケズリが施されている。暗黃褐色で、胎土はやや粗い。

368、369、371、381は、壺形土器である。368は、口径15.9cm、残存高6.9cmを測る。口縁部は、やや外に開き複合口縁をなす。胴部内面は、ヘラケズリが施されているが、その他は器面の風化が著しく調整は不明である。胎土はやや粗く、淡黃褐色を呈している。369は、口径12.5cm、残存高6.9cmを測る。複合口縁を有し口縁部は内傾する。胎土は、やや粗く、淡黃褐色を呈す。頸部には、黒斑が認められる。器面の風化が著しいため、調整は不明である。371は、直口の壺である。口縁部は、その端部付近でやや外反する。口径12.6cm、残存高9.0cm、頸部径9.0cmを測る。胎土は、やや粗く淡黃褐色を呈す。風化のため調整は、不明である。381は、口径14.2cm、残存高5.3cmを測る。口縁部は、ほぼ直立し複合口縁をなす。稜は、斜め下方に垂れ下がっている。



第108図 竹ヶ崎遺跡 S 109出土遺物実測図 (1) S = 1 / 3



第109図 竹ヶ崎遺跡 S 109遺物実測図(2) S = 1/3 (378は S = 1/4 鉄器383は S = 1/2)

頸部内面は、ヘラケズリが施されているが、その他は器面の風化が著しく調整は不明である。胎土はやや粗く、暗褐褐色を呈している。

372、374、375、は、高坏である。372は、口径18.7cm、残存高6.0cmを測る。受け部と口縁部の境には、稜が付く。口縁部はやや外反しながら外側に大きく開く。口縁部の器厚は4mmと薄く端部は丸く納めている。胎土はやや粗く、淡黄白色を呈す。器面の風化のため調整は、不明である。374は、受け部と脚部の一部を残す破片である。脚部と受け部の境の径5.1cm、残存高6.5cmを測る。受け部の見込みにはヘラミガキが認められるがその他は、器面の風化のため調整は不明である。胎土は、やや粗く、淡赤褐色を呈す。375は、受け部の破片で、残存高3.4cmを測る。脚部との接合部の内面

には、「勝」が認められることから、受け部の見込みに円盤を充填して成形したものと考えられる。受け部の見込みの器厚は、2.7cmと厚い。胎土はやや粗く、淡黄褐色を呈す。

373、376、380は、低脚杯である。いずれも受け部と脚部の接合部の破片である。373は、脚くびれ部の径5.5cm、残存高3.9cmを測る。胎土は粗く、淡黄褐色を呈す。調整は器面の風化のため不明である。376は、脚くびれ部の径4.9cm、残存高2.2cmを測る。受け部内面にはヘラミガキが施されている。胎土は、やや粗く、淡黄白色を呈す。380は、受け部、脚部とも器厚が1.0cmと厚い。受け部内面には、ヘラミガキと朱塗りが施されている。胎土はやや粗く、淡赤褐色を呈す。

379は、鉢形上器である。口径13.9cm、残存高5.1cmを測る。体部は、口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。口縁端部は、肥厚しながら丸く収まる。調整は、内外面ともヘラミガキである。

377、378は、コシキ形土器である。377は、口縁部、下端部とも欠失しており、上部の把手部分の破片である。外周溝からの出上である。把手間の幅32.0cmを測る。把手は横方向に取り付けられている。内面にはヘラケズリが認められる。胎土は粗く、淡黄褐色を呈す。378は、完形品である。床面に直立して出土した。口径11.6cm、下端部径36.4cm、器高72.2cmを測る。把手が上下2段に配置されており、上部の把手は、横方向に、下部の把手は、縦方向に取り付けられている。器形は釣り鐘状を成すが、上部の把手付近からやや内湾を深める。口縁部は、角度を変えやや内傾しながら直立する。把手は、内面に貫通して取り付けられている。下端部付近の外面には、一条の浅い沈線が施されている。調整は、下部の把手付近の外面にハケメが認められる他、内面には、ヘラケズリが施されている。胎土は、やや粗く、淡黄褐色を呈している。一部に墨班が認められる。把手は、内面に貫通して取り付けられている。

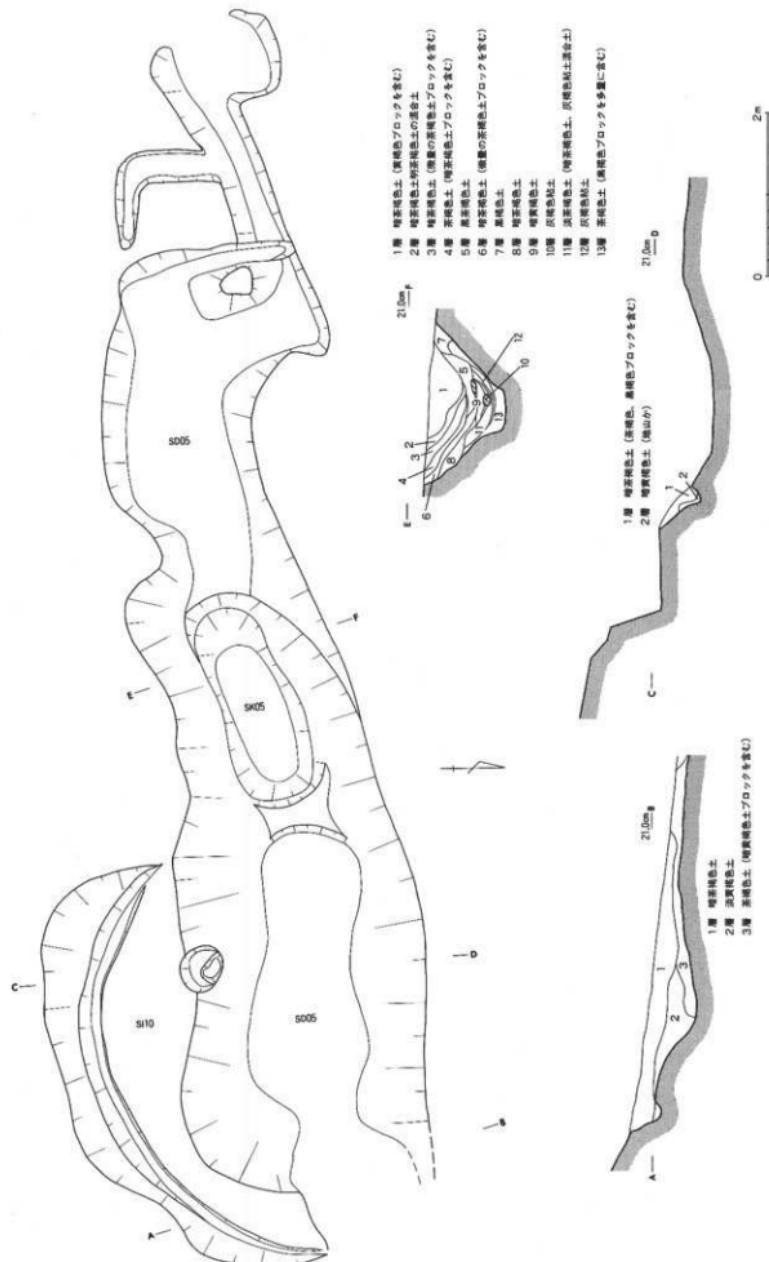
コシキ形土器には、①下端部から口縁部まで直線的にすぼまるタイプ、②本例のように口縁部付近にアクセントを付けるタイプ、③口縁部付近に「タガ」を持つタイプが知られている。本例は、①と③の中間タイプとして位置づけることがよう。

383は、長さ4cm、幅2.5cm、厚さ0.5cmの鉄片である。刃部など微的な部所が見あたらない。あるいは、製品を作る際の原材料であったのかも知れない。

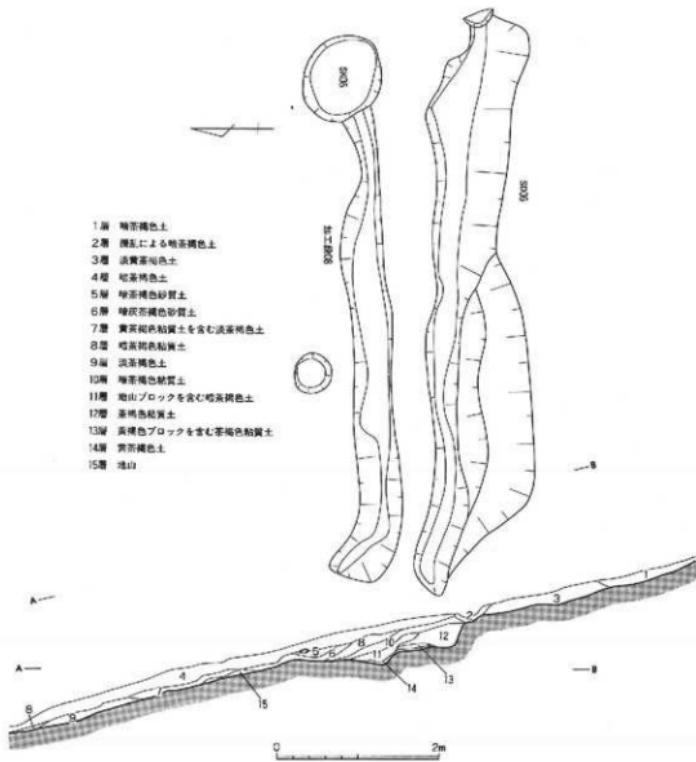
S I 09は、出土遺物から概ね塙津山5期に位置づけることが出来よう。

コシキ形土器の取り上げ S I 09の掘り下げは、A-B、C-Dにセクションベルトを残して行ったが、このうち、C-Dのセクションベルトにコシキ形土器がほぼ半分かかった状態で検出された。このため、すぐに取り上げることが出来なかった。セクションベルトを取り払って、土器が床面に張り付いた状況で出土していたので土器を壊さずに取り上げる為には住居跡の床面をかなり掘り下げる必要にせられた。ようやく、取り上げることが出来る状態になったのは、S I 09の全体の写真撮影が終了してからであった。ところが、次の難問は、土器の中に覆土が一杯に詰まっていたり、土器を動かすと重みで土器が壊れる危険性があったことである。そこで土器の全面に和紙を糊で幾重にも貼り付け、土器と和紙が十分に乾いてから取り上げることとした。土器は、この処理で何とか床面から取り外す事が出来た。しかし、次ぎに待ち構えていたのは、土器の重さとの格闘であった。4人がかりで、土器を床面に寝かせ、用意したスチール製の脚立に「うすば」で造った座布団を敷き丸太で補強したうえで土器を乗せ6人がかりでこの急造担架を担いで現場事務所までかえったのである。後日、センターでの土器の土落としに際し、担当者から怨嗟の声と苦情があつたことは、言うまでもない。

(ト部)



第110図 竹ヶ崎遺跡 S110・SK05・SD05実測図 S=1/50



第111図 竹ヶ崎遺跡加工段08・SK06・SD06実測図 S=1/60

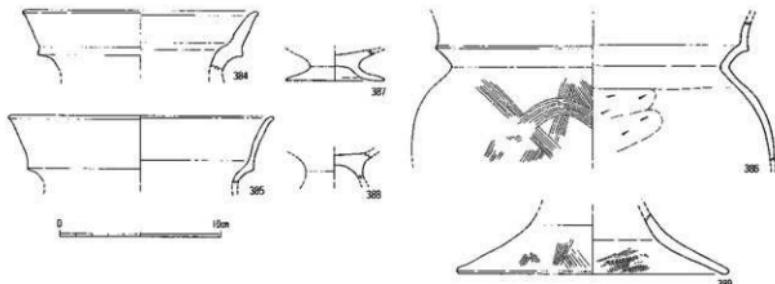
S I 10・SK 05・SD 05 (第110図)

竹ヶ崎遺跡の中央南よりに位置し、塩津山5号墳、6号墳の麓に位置するこの遺構は竪穴住居跡と、東西を近世削平段1に斬られた溝状造構、溝に掘り込まれた土坑とからなっている。

S I 10 土層図(A-B)を見ると第1層に表れているが、規模は5m程の竪穴住居跡になると思われる。およそ1/3程残った壁に沿うようにして、壁体溝とおぼしき溝が20cm幅で検出された。床面からは、壁際から1m内側に入ったところに直径60cm深さ70cmの主柱穴と思われるピットが一穴検出されている。

S I 10出土遺物(第112図) 複合口縁の甕384が出土している。肉厚な器壁を持ち、口縁は短く開き、端部は先細りになりながら先端を外につまみ出している。調整はヨコナデが施されている。淡黄色の胎土には長石、石英などを含む。

S D 05 長さ16m以上、幅3~4m程の東西に軸を持つ不定型な溝状を呈す落ち込みで、その形態は溝状造構や土坑の不規則な集合のように見えるが詳細は不明である。造構の東西両端部は近世の



第112図 竹ヶ崎遺跡 S I 10・SD 06 (385・389) 出土遺物実測図 S = 1/3

削平段により確認できなかった。遺物は出土しなかった。

S K 05 SD 05の覆土の上から軸を同じくして掘り込まれた土坑で、長さ2.5m、幅2m、深さ1mを測る。土層図(E-F)を見ると、何度か掘り返した跡が伺えるが、遺物は出土しなかった。

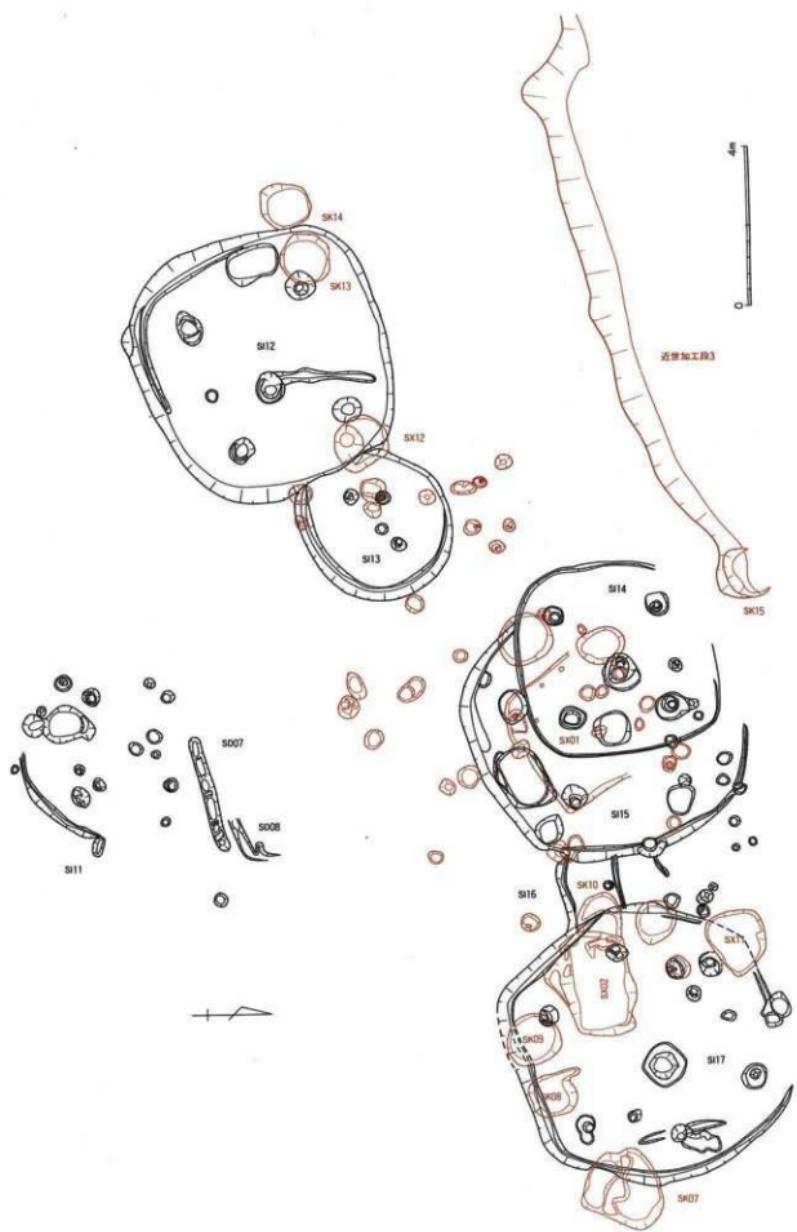
#### 加工段08・SK 06・SD 06 (第111図)

SD 05の西に検出された構造で東西に軸を持って真っ直ぐに伸びる加工段と、加工段に沿うように掘り込まれた溝状造構、加工段の東端に穿たれた土坑からなる。

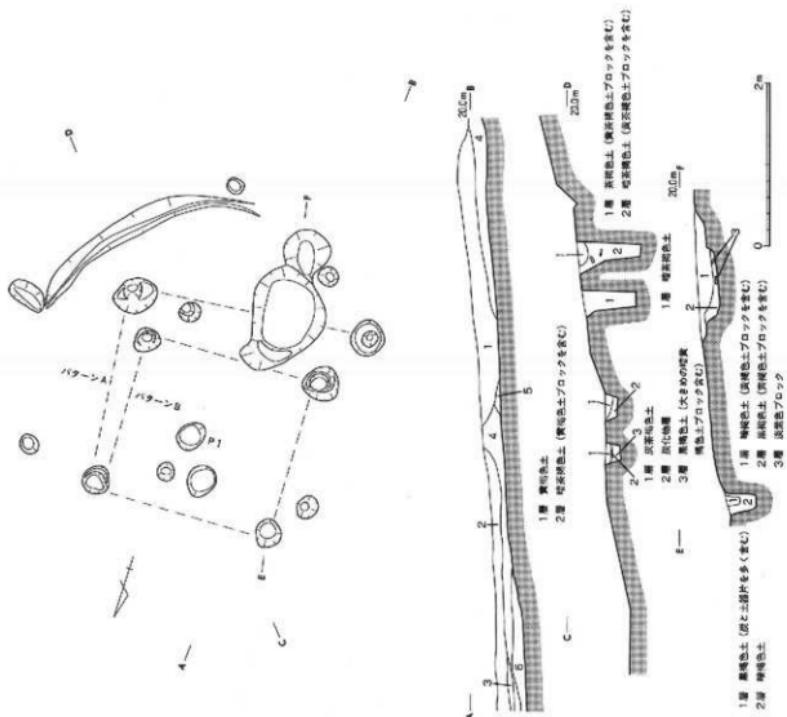
加工段08 長さ6m程が検出できた。その西端は北向きに折れており、加工段の終わりを思わせる。壁際には幅20cm程の壁体溝様な溝が走っており、径約1mのSK 06につながる。床面には幅50cm程のピットが1穴開くのみである。ここからの出土遺物はない。

SD 06 加工段08に沿うようにして50cm~1m南側に横たわっている溝状造構で、造構の西端は近世削平段1に切り落とされているためその長さは不明だが、残存長は6mをこえる。幅は50cm程である。土層図(A-B)を見るとSD 06は加工段の溝であった可能性があり、加工段08に切られていたものと思える。

SD 06出土遺物(第112図) 豊385は薄い複合口縁が緩くカーブしながら外に開くもので、その端部は軽く外につまみ出されている。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英、黒色砂粒などを含む。豊386は肩部に波頂間の広い波状文をゆったりと施している。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。低脚杯387はかなり低い脚が幅広がりに付いている。黒褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。低脚杯388は高い脚を持つ。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。389はやや人振りな高杯の脚部で、外面内面共にハケ調整が施される。



第113図 竹ヶ崎遺跡 S11・S17周辺造構配置図 S = 1 / 120

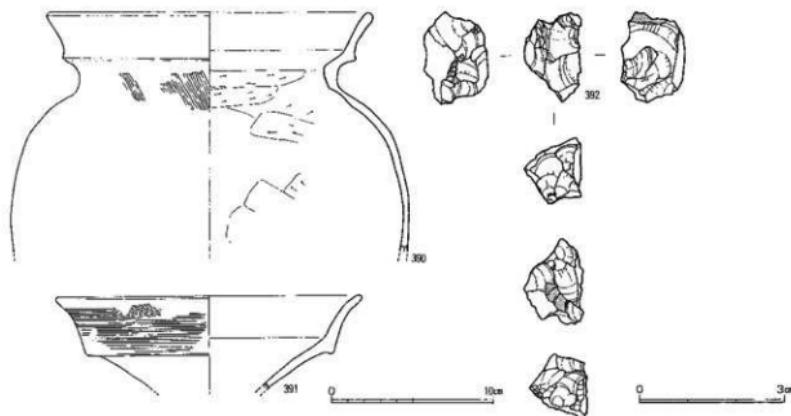


第114図 竹ヶ崎遺跡S I 11実測図 S = 1/60

S I 11～S I 17周辺、造構配置概要（第113図）

竹ヶ崎遺跡の中央には弥生時代終末期の竪穴住居跡（黒刷り）が、後に掘り込まれた古墳時代後期以降の土坑、ビット群等（茶刷り）により一部搅乱を受けて検出された。土坑、ビット群は後述する事として、ここでは弥生時代終末期の造構について概要を述べる。

造構は、大まかに甲乙2グループに分けることが出来る。即ち、甲（S I 12～13）と乙（S I 14～17）である。このグループ間には切り合い関係が見られず、ほぼ同時期に存在したため（埴津5期内）、当時は隣接して建っていたものと思われる。まず甲グループを見ると、S I 12とS I 13は土層図によりS I 13の方が新しく、S I 12の覆土を掘り込んで建てられているのが分かる。次に乙グループを見ると、S I 16の両側をS I 15とS I 17が覆土の上から掘り込んでおり、S I 15はS I 14に切られているのが分かった。よって、新旧関係は古い方から（S I 16）⇒（S I 15）⇒（S I 14）となり、また、（S I 16）⇒（S I 17）となる。S I 15とS I 17は形態、規模共に等しく、隣接しているため、同時期の建物とは考えにくく、おそらくS I 17とS I 14が同時期に建っていたものと思われる。

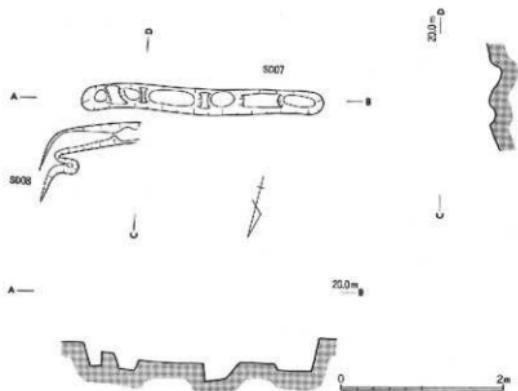


第115図 S I 11出土遺物実測図 S = 1/3 (石器392はS = 1/1)

#### S I 11 (第114図)

竹ヶ崎造跡の中央南寄りに位置するこの造構は、S I 10やS I 12・13等と近接している。近世に削平を受けたためか、南西側の掘り方を残す程度で、造構の大部分は流れ去ってしまったため規模は不明である。かろうじて残った南西の壁際には10~20cm程の細い溝が巡っている。この壁体溝とおぼしき溝からは2cm程の碧玉小片が出土しており、玉作関連造構の可能性を想起させる。また、鼓形器台391も溝からの出土である。造構の床面からは、ピット群と浅い土坑が検出された。ピットから主柱穴の配列を検討したところ、パターンAとパターンBが想定できた。両パターンともに主柱穴は4本で、P 1から炭化物の層が検出されていることなどから北寄りにいわゆる中央ピットP 1をもうけている可能性が考えられたが、土層などからは確定することは出来なかった。また、P 2からは縦半分に割れた甕390が割れ口を上にして出土した。

**S I 11出土遺物(第115図)** 甕390は厚はった複合口縁が、緩くカーブしながら外反するもので、その端部は丸く收まる。複合口縁部の稜は斜め下方に突出し、頸部外面には1mm単位のヘラミガキが施される。口縁部はヨコナデ調整が成される。頸部内面は、頸部の稜ぎりぎりまで右上がりにケズリ上げられている。鼓形器台391は複合口縁状に立ち上がった受部に、擬回線文を施したもので、よく発達した筒部を持つ。392は碧玉製の玉未製品で、濃緑色を呈すが、一部黄色(スクリーントーン)を残す。これは元々の素材の外面に黄色みを帯びている箇所があり、製品にして行く過程で打ち残されたものである。以上の遺物を観察した結果、鼓形器台391は塩津1期に相当し、この時期の玉作関連造構である可能性を示唆する。また、ピット2出土の甕390は塩津2~3期に中たると思われ、時期を経て偶然同じ場所に建てられたものと推定される。



第116図 竹ヶ崎遺跡 S D07・S D08実測図 S = 1/60

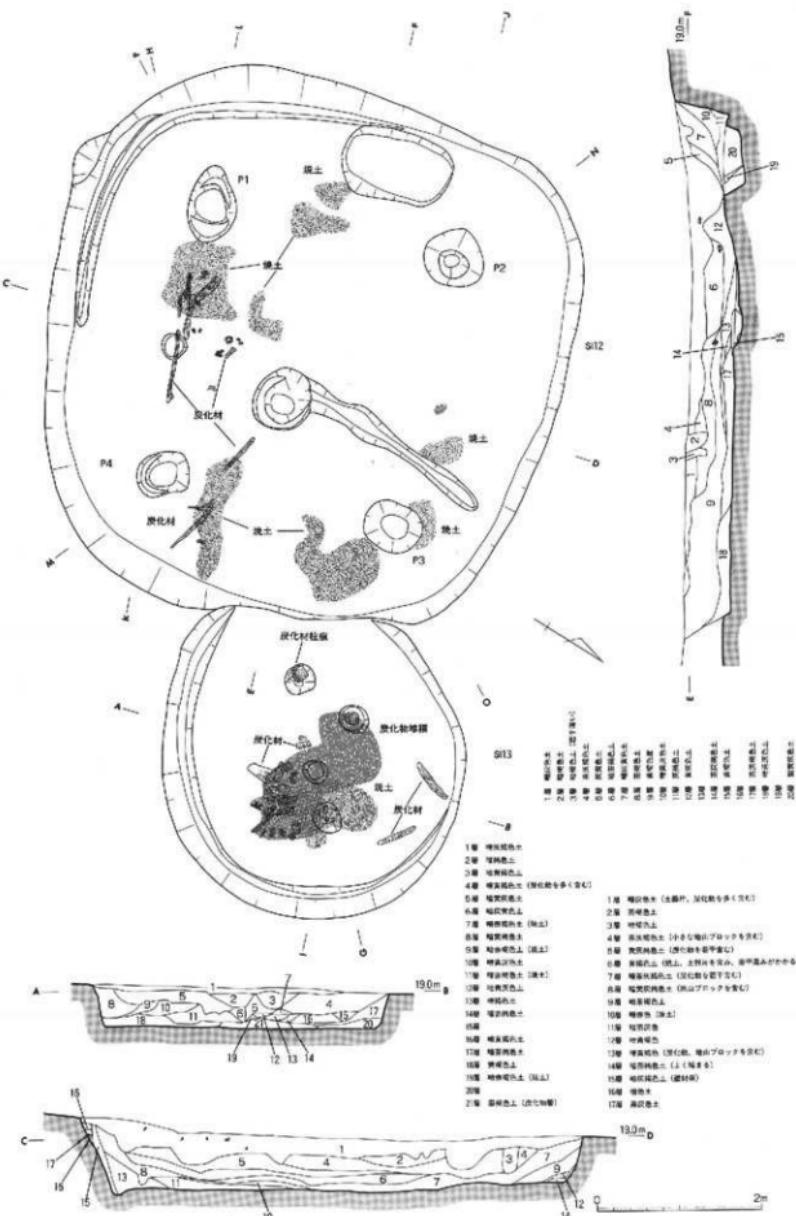
#### S D07・S D08 (第116図)

S I 11の北側に隣接する3m×40cmの布掘り状造構と、その北東に軸を同じくする直角に曲がる40cm幅の溝状造構とからなる。S D07の掘り込みは40~50cmで均一である。ここからは遺物は検出されず時期は不明である。

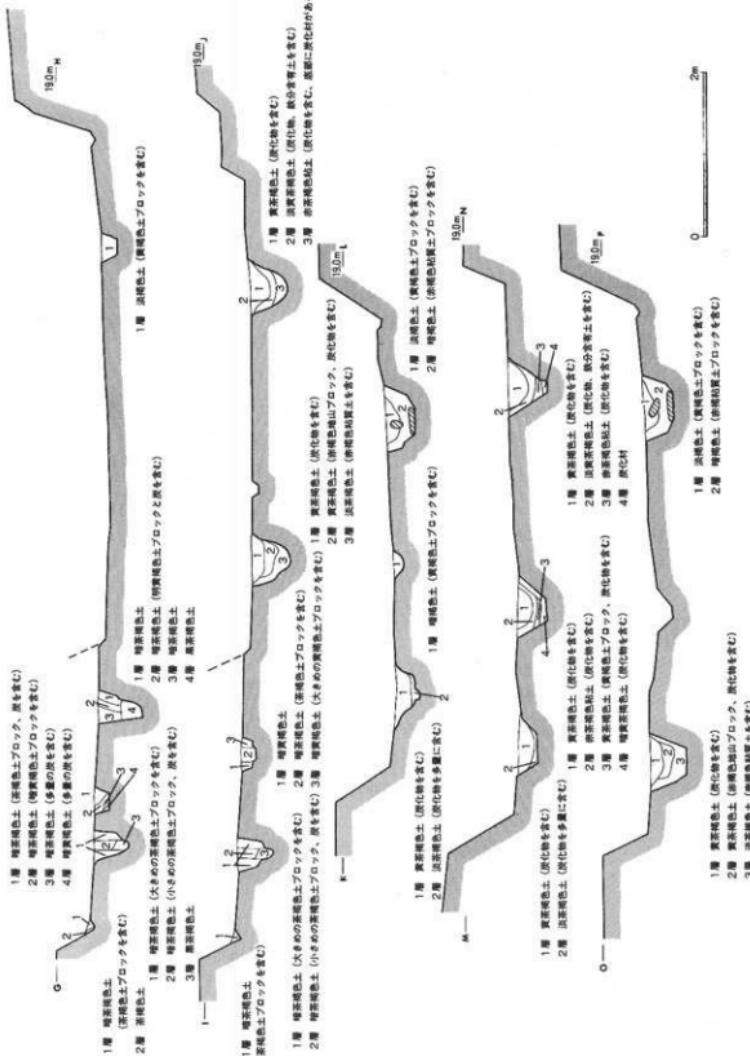
#### S I 12・S I 13 (第117図~118図)

東側調査区下段の中で中央西よりに位置する当造構は、2棟の焼失した建物が切り合う形で検出された。東方にはS I 14~17が隣接しており、造構密度は濃い。おそらく竹ヶ崎遺跡の中心的位置に在るものと思われる。造構上面は近世に削平を受けるも比較的残りが良く、掘り方と床面の距離は50cm~1m程ある。

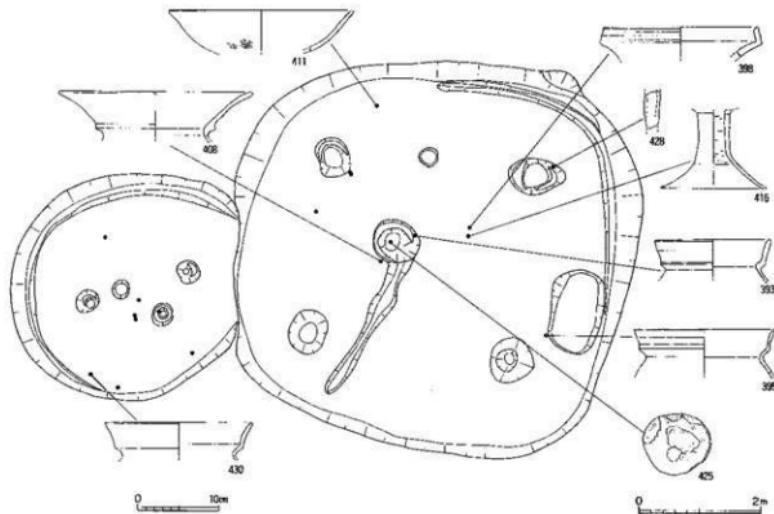
S I 12 5m四方の隅丸方形竪穴住居跡で、壁に沿うようにして南東の隅に幅20cm程の壁体溝とおぼしき溝が検出された。土層図(C-D)を見ると壁材の痕跡が確認できる。住居の西側には壁に接して1m40cm×80cmの土坑が検出された。深さは30cm程度とごく浅いものである。主柱穴とおぼしきピットは4穴検出されたが、いずれも径50cm、深さ40~50cmである。ピット1・2(それぞれP 1・P 2)は壁から1m程離れており、ピット3・4(P 3・P 4)は壁から50~70cm離れている。これは予め土坑のことを考慮した配置の様に見えなくもない。なお、P 1は二段掘りになっており、ピット底部には平らな石が敷いてあった。いわゆる中央ピットはその覆土に満遍なく炭化物を含んで、中央より若干東よりに設けてあり、そこから幅20~40cmの溝が真北に真っ直ぐ伸びているが、壁までは届かなかった。また、中央ピットを挟んで溝の反対側には径30cmの小さなピットがP 1・P 4に挟まれるように検出された。床面南半面からは焼土と炭化材が検出されており、焼失住居の可能性が高い。なお、S I 12はS I 13を切って建てられている。土層図(E-F)より。



第117図 竹ヶ崎遺跡 SII 12・SII 13実測図 S = 1 / 60



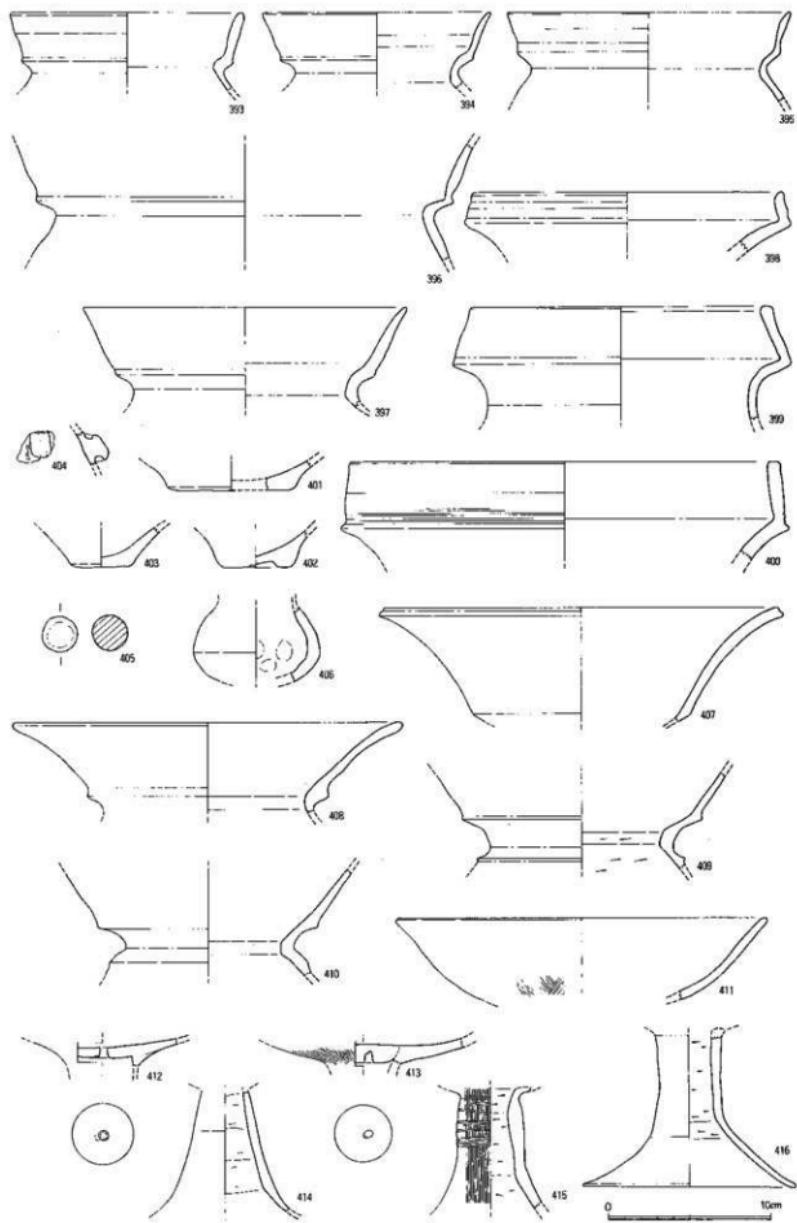
第118図 竹ヶ崎遺跡 S+12・S+13土層断面図 S=1/60



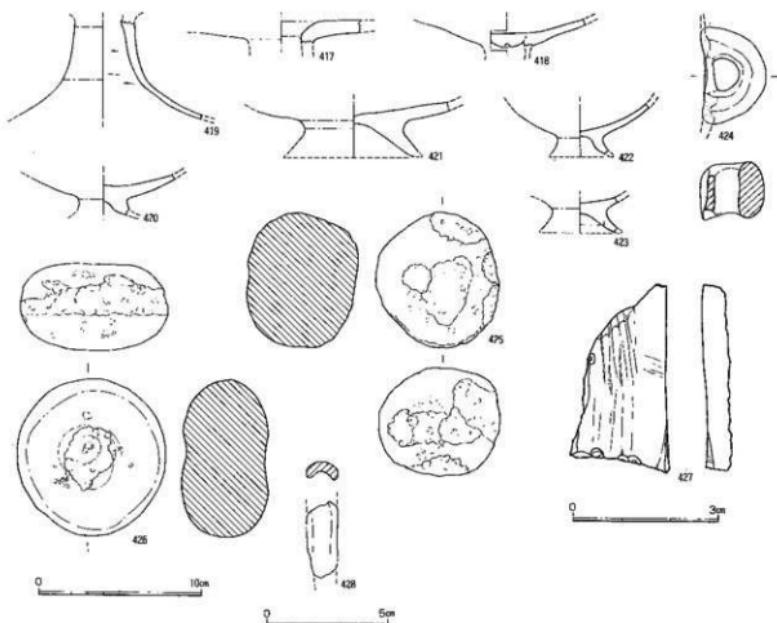
第119図 竹ヶ崎遺跡 S-12・S-13遺物出土状況 S=1/80

S-12遺物出土状況(第119図) 中央ビットを中心に塩津5期の遺物(やや古相を呈す)が床面から出土している。敲石425は中央ビットからの出土であるが、おそらく石皿426とセットで使用されていたものと思われる。ビット2の直ぐそばには鉄器428が出土した。ビット2は覆土に鉄分を含んでおり、鉄器428のものと推察される。

S-12出土遺物(第120図) 壺393は厚いまったく真っ直ぐ伸びる複合口縁の端部を丸く収めており、明橙褐色の胎土には2mm以下の長石や石英などを含む。壺392はやや薄く作った複合口縁が殆どカーブせずに真っ直ぐに開き、その端部は先細りする。複合口縁部の稜は、水平方向に突出するが余り顕著ではない。暗橙褐色の胎土には、1mm以下の長石や石英などを含んでいる。大型の壺396は厚めの複合口縁の複合部を強くナデすることによってその稜を強調しているように見えるが、稜の下側は丸みを帯びてきている。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石や石英などの砂粒を若干含む。壺397は厚い複合口縁が徐々に先細りしておりその端部は鋭い。複合口縁部は強くヨコナデされており、その稜を強調している。暗橙褐色の胎土には1mm以下の長石や石英などを含んでいる。壺398は内傾する短い複合口縁を持っており、その外面は強いヨコナデ調整が施されている。端部は若干外側につまみ出されており、端部をナデ残すことで強調している。淡茶褐色の胎土には長石、石英、暗赤茶砂粒などを含む。壺399は内傾する長い複合口縁を持ち、その端部は厚く面を持っている。複合口縁部の稜はナデによって、水平方向に伸びている。淡黄褐色の胎土には、1mm程の長石、石英などを含む。大型の壺400は内傾する分厚い口縁を持ち、その端部はややつまみ出されて水平に面を持つ。複合口縁部の稜には3条以上の擬凹線文が施されており、上方はナデ調整が施されている。黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを若干含む。401~403は壺もしくは壺の底部である。401は平底を呈し、底径は約7cmである。淡茶色の胎土には1mm程の長石や石英などを含んでいる。402は底部中央に指様の工具で付けた瘤みを有している上げ底状の平底を持ち、底径は4.5cmほどになる。胎土

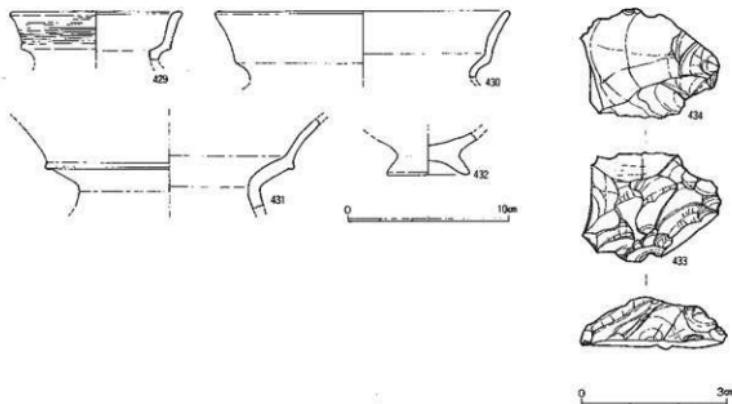


第120図 竹ヶ崎遺跡 S I 12出土遺物実測図 (1) S = 1/3



第121図 竹ヶ崎遺跡 S-12出土遺物実測図(2) S=1/3 (石器427は S=1/1・鉄器428は S=1/2)

は黄褐色を呈するが底部は黒色をしている。胎土には1mm程の長石や石英などを含む。403は平底を呈し、その底径は3cmである。淡橙褐色の胎土には一部白色粘土がマーブル状に見られ、2mm以下の長石や石英などを含んでいる。404は小型の取っ手と思われる。上下両端に径5mmの同一工具による円形穿孔が成されている。外側の調整にはヘラミガキが用いられ、赤色顔料が付着している。淡茶白色の胎土には、1mm程の長石、石英などを含んでいる。405は土器丸とでも呼ばうか。丁寧に丸められた径2cmの丸には穿孔などはない。暗茶褐色～黒色を呈す胎土には1mm程の長石や石英などが含まれる。406はミニチュアの壺と思われ、内側は、胴部の中程まで指頭圧痕が施されている。淡黄褐色の胎土には、1mm以下の長石、石英、黒色砂粒などを含む。407は器高の高い鼓形器台の受部で、その器壁は端部に向かうにつれ厚みを増す。先端は幅6mmの面を持ち、その中央に一条のハッキリとした沈線を入れている。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には2mm程の長石、石英などを含む。408は鼓形器台の受部で、低く外反している。その端部はやや肥厚して丸く収まる。409・410は鼓形器台の筒部で、若干の縮約が見られる。内側の稜はしっかりと面が残っている。409は受部内側に要等を受ける意思が見られるが、410のそれはほぼ真っ直ぐに筒部へ向かっている。411は高杯の杯部である。口径に比してやや杯部が深い。端部は若干つまみ出されている。外面にはハケメ調整が残る。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。412は高杯の円盤充填部である。円盤部は杯部とほぼ同じ厚みを持っている。光塙部の穿孔は2度行われ、1度は貫通している。淡黄白色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。413は杯部に厚みのある高杯の円盤充填部で、円盤部は杯



第122図 竹ヶ崎遺跡 S I 13出土遺物実測図 S = 1 / 3 (石器433は S = 1 / 1)

部とほぼ等しい厚みを有する。穿孔は2度繰り返されており2度目の方が深くなっている。外面にはハケメ調整が施される。淡茶白色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。414は高杯の脚部で、杯接合部に行くほど先細りしている。415は脚の中程に樽状の膨らみを持っており、緻密な縱方向のハケメの後に横方向のヘラミガキのような沈線が巡る。暗黄褐色の胎土には2mm以下の大粒の長石、石英などが含まれる。416は高杯の脚部で、筒部が真っ直ぐ伸びており、強く屈曲して広がる幅部を持つ。淡赤褐色の胎土には、1mm程の長石、石英などを含む。417・418は杯部の接合部で、418は径2cmの小さめの充填部を持つ。高杯の脚419は寸の詰まった筒部を持っており、幅部は広く開く。淡赤色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。420は低脚杯で、脚の付け根は厚い作りになっている。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。大きな脚の付く低脚杯421は脚部の接合に脚張り付け方式を用いている。淡橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含んでいる。422は深い杯部に小さな脚が付く低脚杯で、脚底部に1.5mmの平坦面を持つ。淡黄色の胎土には1mm以下の長石や石英などを含む。低脚杯423は脚部に接合痕が残っている。色調は淡橙褐色を呈し、胎土に1mm程の長石、石英などを含む。424はコシキ形土器の取っ手である。形態から見て通常突帯が回る方の口縁側に付くものである。425は球形の敲石で中央ピットから出土している。火を受けた形跡はない。426は凹石で、おそらく敲石425とセットになっていたと思われる。平坦面を両面とも石皿として使用し、周縁部を敲石として使用していたものと思われる。427は凝灰岩製の滑らかな砥石で、長辺3.7cmを測る。圓化されている2面が使用面である。鉄器の仕上げ用と思われる。鉄器428はヤリガンナと思われ、残存長は3cm、幅1.5cm程になる。これらの遺物を見た限りでは、S I 12の廃棄時期は塩津5期と思われる。

S I 13 4m × 3.8mの不正円形堅穴住居跡で、壁際には幅20cm程の壁体溝が巡っている。主柱穴と思しき径40cm、深さ50cm程のピットが2穴開いており、その柱間距離はピット中央で、1.6mを測る。いわゆる中央ピットは径30cm、深さ20cmと浅く掘り込まれており、覆土に炭化物を含んだ状態で主柱穴に挟まれるようにしてやや北寄りに検出された。南側の柱穴からは、炭化した柱がピットの覆土から検出された。これらと軸を異にして径40cm、深さ20cmのピットが1穴検出された。これは土

層図（I - J）を見ると、柱痕が確認されており、何らかの柱（例えば補助的なもの）が立っている可能性がある。住居跡中央には炭化物の層がピットを覆って厚く堆積しており、炭化材と焼土が検出されている。また、土層図（A - B）を見ると焼土と炭化物が入り交じっており、これらを考えあわせた結果、S I 13は焼失住居と思われる。

S I 13遺物出土状況（第119図） 北東壁際の床面から甕の口縁430が出土しており、単独で見た場合時期は塩津4期位と見られるが、遺物の個体数が少ない上に時期幅があるので時期は塩津3期から4期としておく。また覆土からは、緑色凝灰岩製の未製品と思しき石片が出土しており、玉作関連遺構の可能性を示唆している。

S I 13出土遺物（第122図） 甕429は厚めの複合口縁が直立気味に立ち上がるもので、端部は厚く外反する。その口縁外面には擬凹線文が巡っている。複合口縁部の稜は、斜め下に軽く突出している。淡茶褐色の胎土には、2mm以下の長石、石英、黒色、暗赤色砂粒等を多く含んでいる。甕の口縁430はやや厚めの緩やかに外反する複合口縁を持ち、その端部を丸く収めており、複合口縁部の稜には余り意識が向けられていない。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。431は甕の口縁と思われ、やや薄作りの複合口縁部はカーブしながらかなり開いている。複合部の稜は下方に突出している。外面は暗褐色、内面は暗黄褐色を呈しており、胎土には2mm以下の長石や石英などを含む。低脚杯432は厚ぼったい脚と深い杯部を持つ。明橙褐色の胎土には、2mm以下の長石、石英などを含む。433は緑色凝灰岩製の未製品で、全長1.5cmあり、玉作関連遺構の可能性を考えられる。これらの遺物より、S I 13廃絶時期は塩津4期～5期にかけてと思われる。

#### S I 14・15・16・17遺構配置状況（第123図）

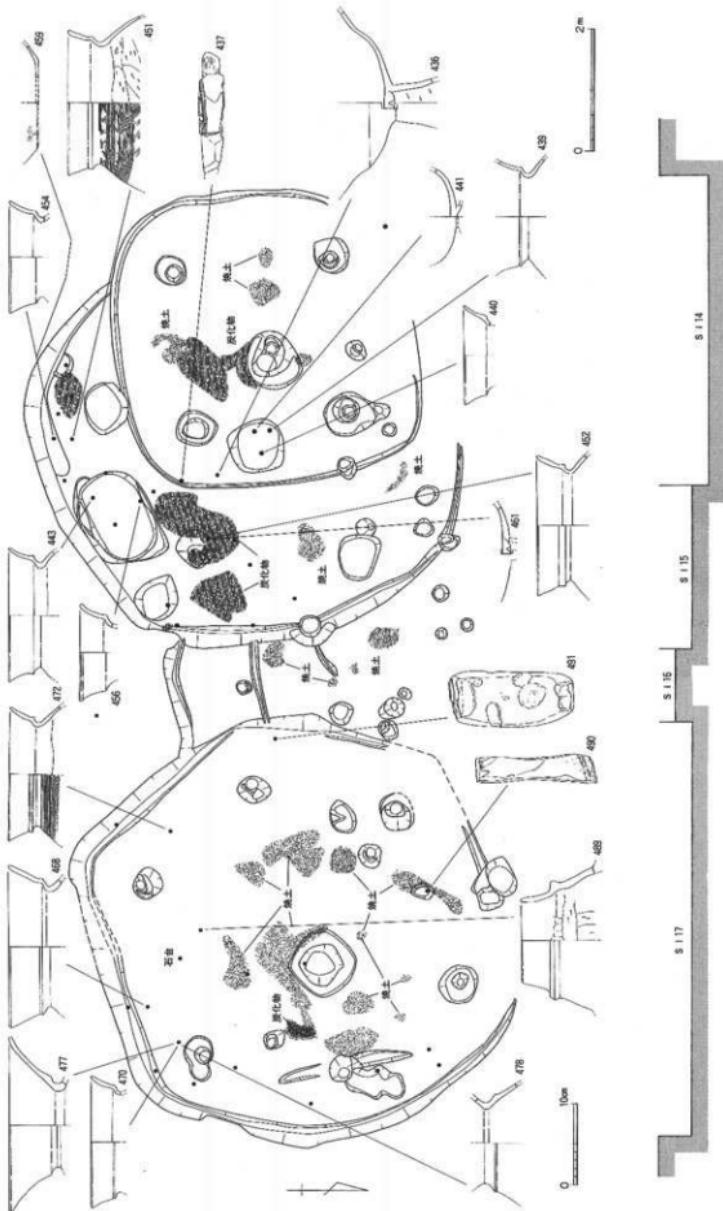
先述の通り、S I 14～S I 17は1カ所に集まって切り合い関係を持っている。新旧関係を述べると時期の古いものから（S I 16）⇒（S I 15）⇒（S I 14）・（S I 16）⇒（S I 17）となっているが、S I 16からは遺物が出土しておらず、正確な時期などは不明である。しかしS I 14・S I 15・S I 17が塩津5期に中たることから、S I 16は塩津5期以前の遺構であろうと思われる。

これらの遺構は、土層観察ベルトを共用しており土層番号が前後しているがご了承願いたい。

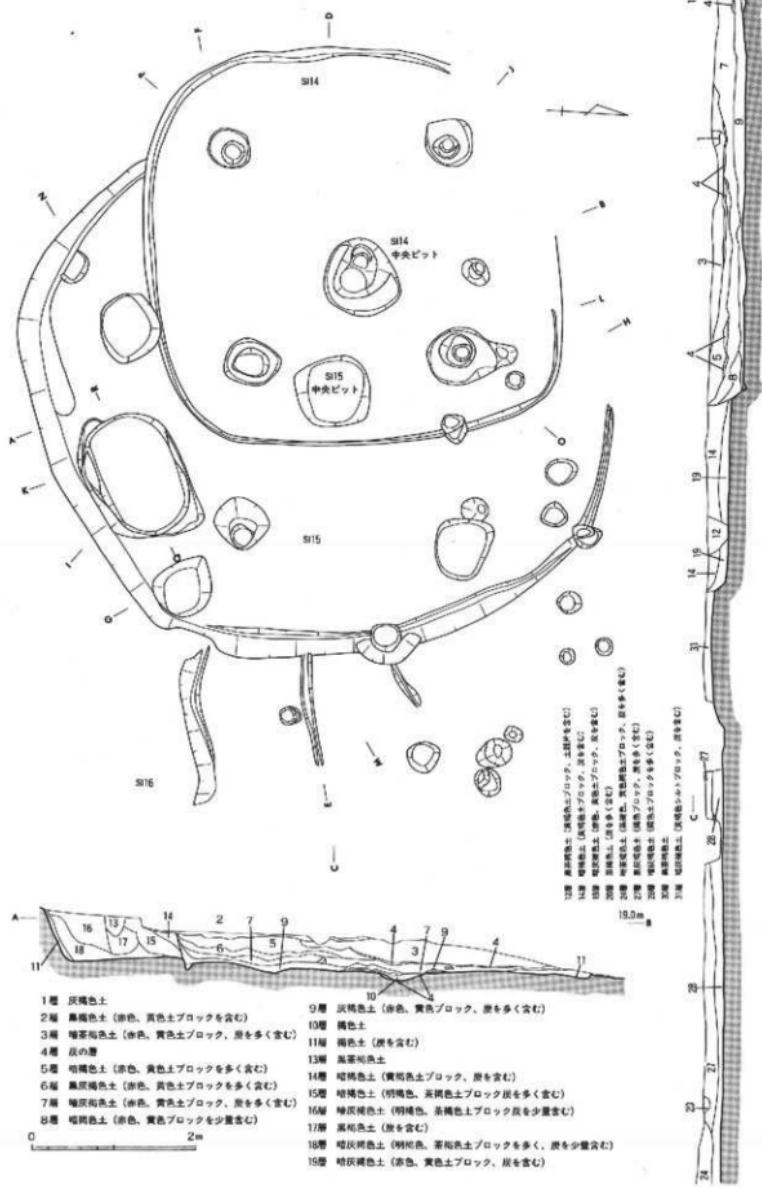
#### S I 14・S I 15（第124図）

竹ヶ崎遺跡の中心に位置し、東側はS I 16・S I 17と切り合い関係にあり、西側にはS I 12・S I 13が隣接している。このあたりは遺構の密度が濃く、竹ヶ崎遺跡の中心的なものと思われる。S I 14・S I 15共に床面に焼土面と炭化物の堆積を持っており、焼失廃棄された可能性が推察される。

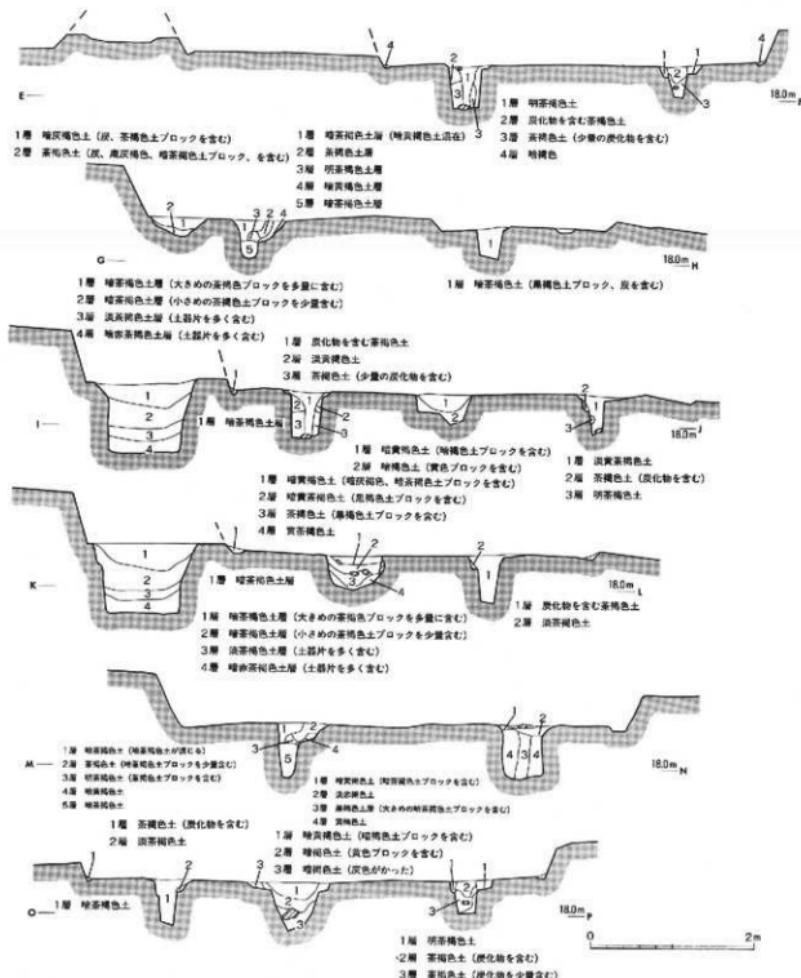
S I 14 景丸方形の竪穴住居跡で、土層（A - B）（C - D）に見られるように、S I 15の覆土を切り込んでいる。規模は壁体溝の内側で東西方向に4.8mを測る。壁際沿うようにして幅10cm～20cmの壁体溝が巡っている。壁際から1m程内側に寄ったところに掘り込まれた4本柱の主柱穴は、径50cm～70cm、深さ40cm～60cmあり、その柱間距離は柱中心で2.6mを測る。住居跡の中央からやや東よりには、土層図（O - P）のような2段掘りのいわゆる中央ピットが掘り込まれている。床面には焼土や炭化物の堆積などが中央ピットを避けて検出されている。



第123図 竹ヶ崎遺跡 S 14～S 17造構配置図・遺物出土状況 S = 1/80



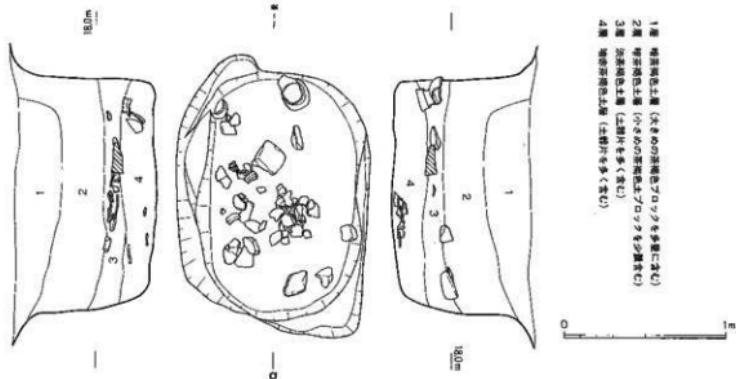
第124図 竹ヶ崎遺跡 S 14・S 15実測図 S = 1/60



第125図 竹ヶ崎遺跡 S14・S15土層断面図 S=1/60

S14出土遺物状況(第123図) 遺物総数は少ないながら、南東隅の壁体溝ではヤリガンナ437が出士している。

S14出土遺物(第127図) 斧434はやや厚めの複合口縁が真っ直ぐ伸びており、端部は軽く面を持って強くつまみ出されている。全体にヨコナデ調整が施されているが、特に複合口縁部の稜はその上部を強くナデすることにより強調され、しっかりと突出している。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。高杯436の杯部は、緩いS字カーブを描いている。杯底部と同じ厚さ(1.3cm)



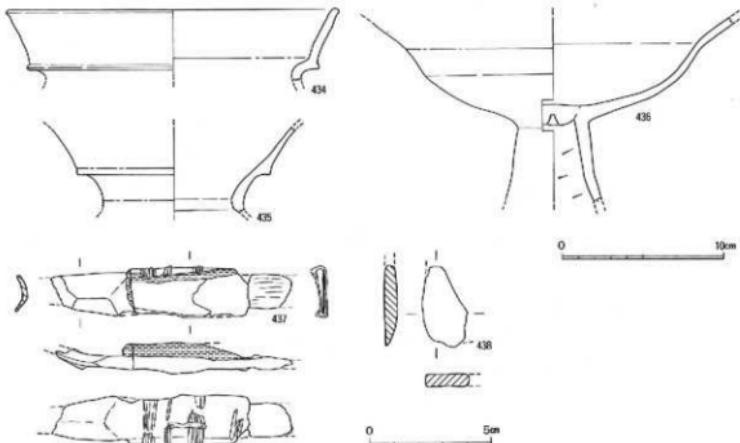
第126図 竹ヶ崎遺跡 S 15土坑内遺物出土状況  $S = 1/30$

の円盤光墳部は直径2.4cmあり、中心には軸穴が開いている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。鼓形器台の受け部435は筒部の縮約が始まっており、筒径も8.5cmと小さい。器高はやや高いと思われる。黄褐色の胎土には、1mm程の長石や石英などを含んでいる。鉄器437はヤリガシナで、断面V字を呈す刃部は反っており、長さ3cm以上、幅2.7cmある。身部は長さ7cm以上、幅3cm、厚さ1cm程になる。そのうち厚さ5mmを占める木柄は上面に被せてあり、幅1mm程の紐で平行に巻いてある。鉄器438は片刃鉄斧と思われ、厚さは5mm程になる。これらの遺物からS I 14廃棄時期を考えると塩津5期と考えられる。

S I 15 隅丸多角形の竪穴住居跡と思われるが、遺構の西側半分をS I 14に切られているため正確な規模は不明である。しかし、柱穴の並びや遺構の形態などを見ると、おそらく6本柱の6角形を呈するものと思われる。以下そのつもりで進めていくと、およそ規模は7mになり、主柱穴は、径70cm、深さ70cm程で、壁際から1m内側に掘り込まれているものと、壁際ギリギリに掘り込まれているものがある。これは南東壁際に掘り込まれている土坑を考慮したことと思える。柱間距離は柱中心で2.7~3m程である。S I 15の中央ピットはS I 14の東壁際に検出されているが、位置としてはS I 15中央に中たる、直徑1mあり、深さ40cmを測る。前述した土坑(第126図)は長軸1.7m、短軸1mの隅丸長方形で深さは90cmある。掘り方は、軽く2段掘りになっている。S I 15南東の壁際に沿うように検出されており、主柱穴は土坑の掘り方より内側に掘り込まれている。土坑の中には4層に分層でき、3層と4層床面に遺物の堆積が見られる。

S I 15遺物出土状況(第123図、126図) 遺構の南側半分から遺物が出土している。また、中央ピット内からも遺物が出土している。床面から出土した遺物は圧倒的に甕が多く、その他に高杯と低脚杯が一点ずつ含まれている。

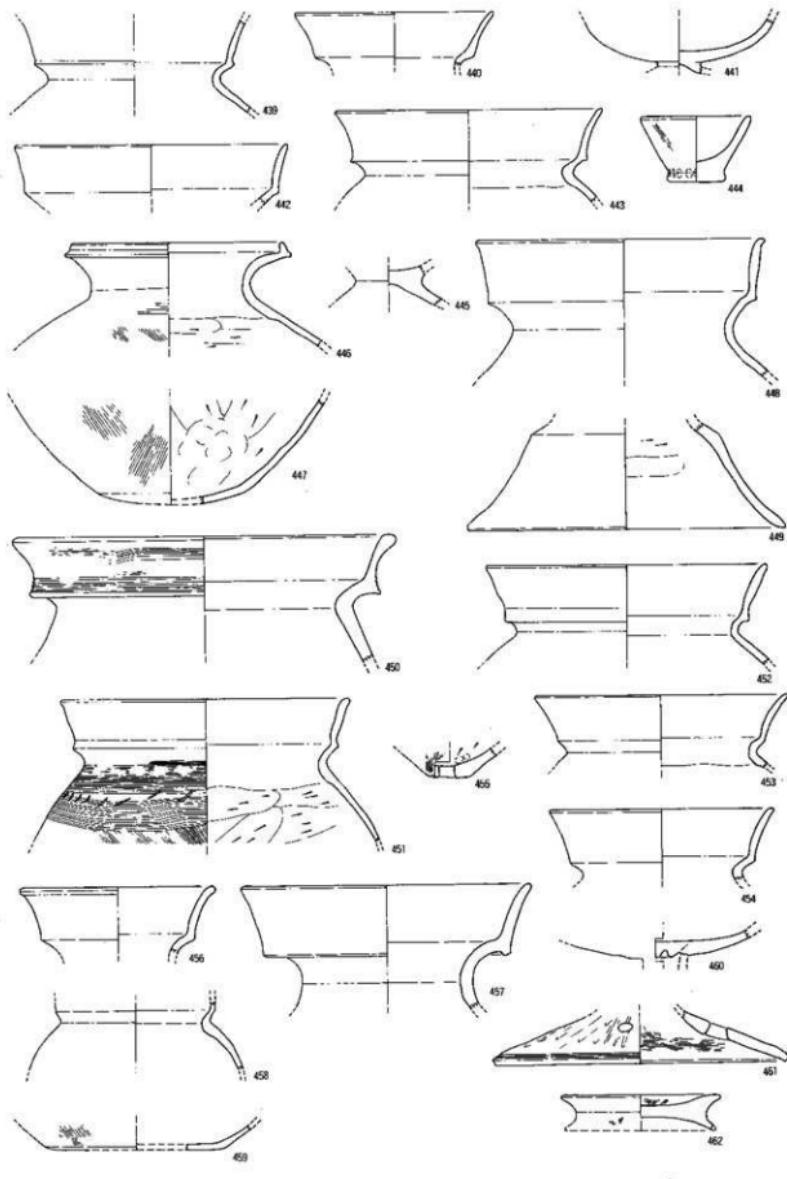
S I 15出土遺物(第128図~129図) S I 15の遺物は出土地により3つに分かれ。中央ピット、土坑、その他である。



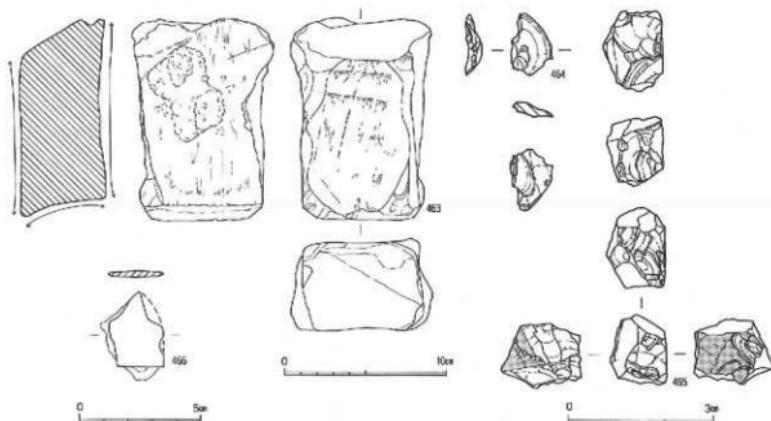
第127図 竹ヶ崎遺跡 S14出土遺物実測図 S=1/3 (鉄器437-438は S=1/2)

中央ピットからの出土遺物は3点で、甕439は複合口縁部の稜が水平を意識して突出している。淡黄褐色の胎土には石英、長石等を含んでいる。甕440は薄い複合口縁が軽く外反しており、端部は丸く収まる。複合口縁部の内側は弱くナデられており、明瞭な溝を作らない。淡黄褐色の胎土には、1mm以下の長石、石英などを含む。低脚杯441は深い杯部と小さな脚部を持っており、外面の調整は風化のため不明だが、内面はヘラミガキと思われる。ただしこちらも風化のため図化するには至らなかった。色調は淡橙褐色を呈し、胎土には長石、石英などを含む。

土坑からの出土遺物は大まかに2層に分かれている。甕の口縁442は余り外反しない複合口縁が中厚になっており、端部は先細りして丸く収まる。複合口縁部の稜は水平を意識しているがさほどの突出は見られない。淡黄色の胎土には1mm程の長石や石英などの砂粒を含む。3層出土である。甕443はやや薄作りの複合口縁が外反しており、その端部は丸く収まる。複合口縁部の稜は口縁のカーブに合わせて斜め下方に突出している。淡黄褐色の胎土には1mm以下の長石や石英などを含む。3層の上方出土。444は小型の鉢形土器と思われ、口径6.6cm、底径3.3cm、器高4.0cmを測り、口縁端部を丸く收め、底部は突出気味の平底を呈し、接合箇所に工具による圧痕を残す。外面に縱方向のミガキと思われる調整が施される。淡橙褐色の胎土に長石、石英などを含む。445は低脚杯で、広く開いた脚部を持つ。淡黄褐色の胎土には1mm以下の長石、石英などを含む。446はかなり短い内傾する複合口縁を持っており、その端部は丸く収まる。口縁外面は強いヨコナデが施されており、複合口縁部の稜は水平方向によく突出している。胎土には1mm程の長石、石英などを含む。447は甕または壺の底部で、丸みを帯びた平底を持っており、底部内側に指頭圧痕を残す。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。4層出土である。甕448は直立する複合口縁を持ち、その端部は外側につまみ出されており、若干の面を持つ淡黄褐色の胎土には2mm以下の砂粒を含む。3層より出土している。449は鼓形器台の脚部で、高い器高を持つと思われる。淡橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英などを含む。



第128図 竹ヶ崎遺跡 S I 15出土遺物実測図 S = 1 / 3 (中央Pit439-441・土坑442-449)



第129図 竹ヶ崎遺跡 S-15遺物実測図 S=1/3 (石器464-465は S=1/1・鉄器466は S=1/2)

床面及び覆土出土の遺物 裸450は複合口縁の外面が、貝を使ったように強くカーブしており、肥厚した端部は面を持っている。複合口縁部の稜は斜め下方に突出している。口縁外部に貝状工具による擬凹線が施されているが、中央部はナデ消されている。暗茶褐色の胎土には3mm以下の長石、石英などを含んでいる。裸451はやや厚めの複合口縁が真っ直ぐ外に開き、端部を軽くつまみ出している。肩部には平行線文が隙間を空けて無造作に二周り入り、その隙間にハケ原体による刺突が荒く入る。淡黄褐色の胎土には長石、石英などを含む。裸452は、肉厚の口縁部が先細りして、端部が軽く外につまみ出されるものである。淡黄色の胎土には1mm程の長石や石英などを含んでいる。裸453は複合口縁が緩やかにカーブしながら外反しており、端部は丸く収まる。暗茶緑色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。裸454は厚めの複合口縁がやや直立気味に立ち上がり、その端部は軽く外につまみ出されている。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英、暗赤砂粒等を含んでいる。455は裸もしくは壺の底部で、底径2cm程の平底には径1cmの孔が穿たれている。外面は底部の際まで細かいハケメが入る。内面底部に指頭圧痕が巡っている。壺の口縁456はやや厚い口縁が滑らかにカーブして直立気味に立ち上がり、その端部は軽く面を持ってつまみ出されている。複合部の稜は鋭く水平方向を意識しているが突出していない。口縁外面にはナデ調整が施されており端部はナデ残すことによって強調されている。淡黄褐色の胎土には1mm以下の長石、石英、黒色砂粒などを含む。壺の口縁457は、厚い複合口縁が緩やかにカーブして直立気味に立ち上がり、端部は丸く収まる。複合口縁部の稜は口縁のカーブに合わせて斜め下方に突出している。淡橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英、金雲母等を含む。458は小型の裸の頸部で、複合口縁部と思しき稜は丸くなっている。淡橙褐色の胎土には1mm以下の長石などを少量含んでいる。裸の底部459は厚さ5mm程の薄作りをしており、大きな平底を持つ。底部調整は外面にハケメ、内面には指頭圧痕がのこり、胴部外面にはハケメが巡る。淡茶色の胎土には若干の砂粒を含むが、外面はススのため黒色を呈す。高杯460の浅い杯部は径2cm程の小さな円盤で充填されている。円盤の厚さはほぼ杯底部の厚さと一致する。明橙色の胎土には1mm以下の長石、石英などが含まれている。高杯の脚部461はかなり低く

作られており、その端部は強いナデによりやや擦んだ面を持っている。端部外面には2条の沈線が巡っている。外面の調整には幅2mm程の工具によるヘラミガキが細かく施されており、内面の調整もハケメである。幅6mm程の器壁には径1cmの孔が穿たれているが、何カ所の穿孔かは不明である。暗黄褐色～暗橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英、黒色砂粒、金雲母等を含む。外来系の特徴が色濃い。462は円盤脚状土器とでも呼ぶか。身部の径は約10cmで、内面ヘラミガキが施される。脚部の径は9cm程と思われ、内面の調整は不明だが荒れている。脚内部以外では剥落しているか暗赤色を呈し、赤色顔料の可能性を伺わせる。石器463は砂岩系の砥石で3面を使用しており、若干の窪みが見られる。また、一部石皿として敵かれている。464・465はそれぞれ碧玉製の剝片と未製品で、濃緑色を呈すが、一部黄色（スクリーントーン）を残す。これはS I 11でも述べたように、元々の外面の色が残ったものである。鉄器466は平基式鉄鎌で、全長3cm、身幅2cm、厚み3mmを測り、重量は3.27gになる。これらの遺物を見ると、S I 15の廃絶時期は塩津5期のやや古相と考えられる。

#### S I 16・S I 17（第130図）

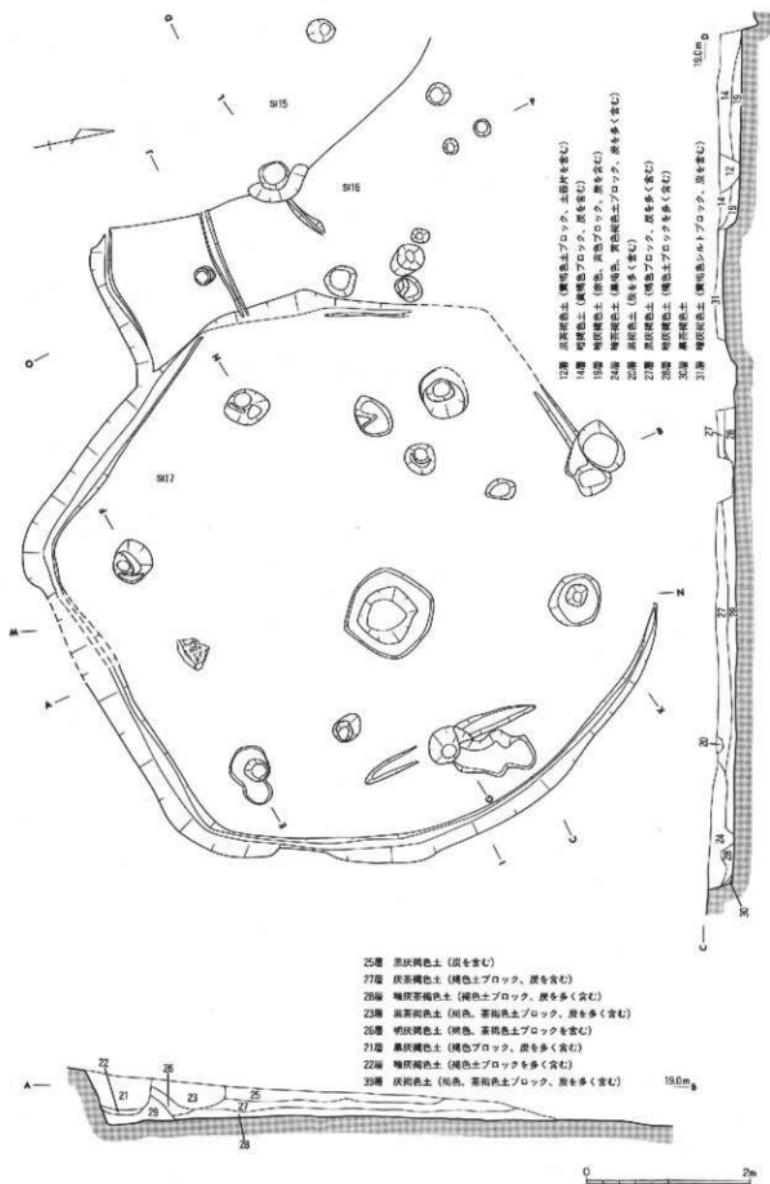
竹ヶ崎遺跡の中央に位置し、西にS I 09を望み、東にS I 12・13・14・15が隣接する。また、S I 17とS I 09の間は谷になっており、遺物が堆積している（第181図～183図）。

S I 16 その大部分をS I 17とS I 15に切られており、S I 15との関係は土層図（C-D）で明らかだが、S I 17との関係は後述するSX02によって土層の搅乱を受けていたために切り合い関係を図説できなかった。しかしブラン検出時にはS I 16にS I 17が切り込んでいることが確認出来た。残っていたのは南壁とそれに沿うように掘られた壁体溝様の溝状造構で、床面には火を受けた痕跡がある。なお、遺物の出土はなかった。おそらくS I 16はS I 14～S I 17の建て替え関係のなかにあり、最初に建てられたものと想定できる。推定廃棄時期は塩津5期か、それ以前と思われる。

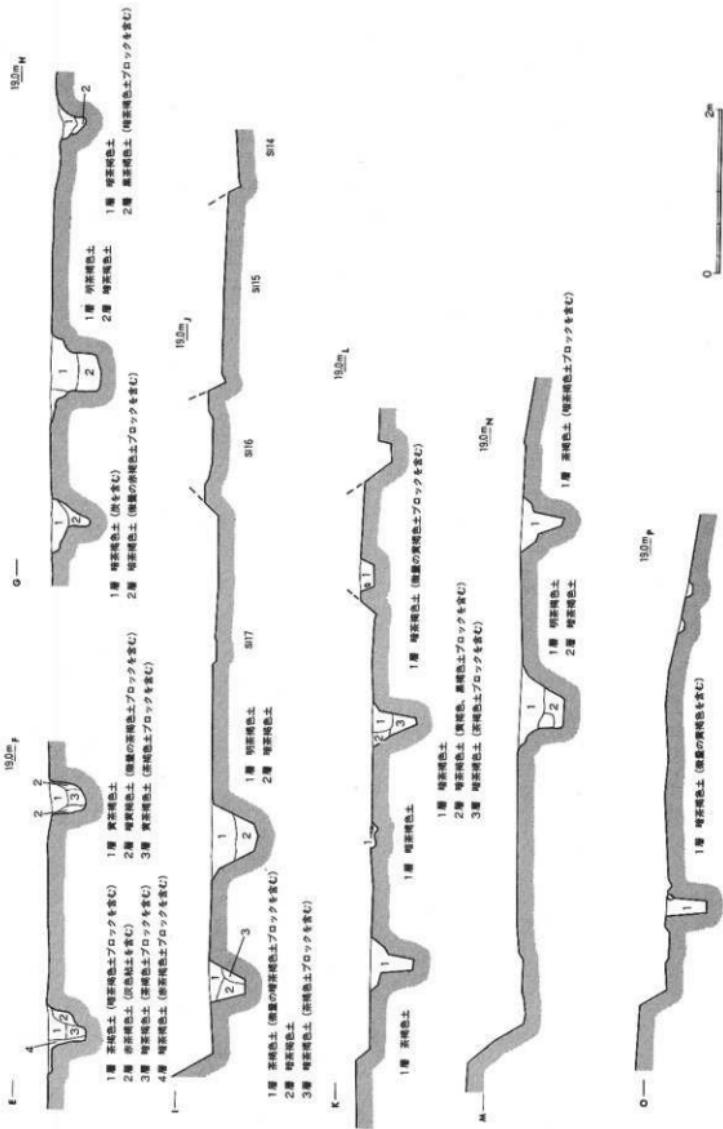
S I 17 後世の造構等により搅乱を受けており、土層図からはS I 16との切り合い関係を見ることが出来なかつたが、ブランによりS I 16の覆土を掘り込んで建てられていたことが確認できている。S I 17は隅丸六角形の竪穴住居跡で北側の壁が若干流れているが、幅15cm～20cmの壁体溝が浅く巡っている。住居跡の規模は壁体溝の内側で6.5mを測り、6本柱の主柱穴は直径50cm、深さ50cm程あり、壁から50～60cm内側に掘り込まれている。柱間距離は柱中心で、2.5m～3mある。掘り方が方形を呈す2段掘りのいわゆる中央ピットはやや北東に検出されており、径1m深さ90cm程である。覆土には炭化物などは含まれていなかった。北東の主柱穴は南北方向に溝を伴っており、建て替えの可能性が考えられる。住居跡南東には一抱え程の据え置きの石台（砥石）が主柱穴に挟まれるように検出できた。また、石台とは逆位置に径30cm程の作業用と思われる浅いピットが検出された。床面には火を受けていた痕跡が焼土面となって残っていた。

S I 17遺物出土状況（第123図） 遺物は造構の南から南東にかけての壁際で多く出土しており、遺物総数は縦26ヶ、臺17ヶ、器台27ヶ、高杯13ヶ、低脚杯14ヶ、合計97ヶとなっており、割合もほぼこのとおりである。床面からは甕の口縁が多く出土している。石台の北側にはコシキ形土器489が尖帯の付く口縁を上向きにして出土している。作業用と思しきピットからは仕上げ用の砥石490が出土しており、壁体溝からは磨製石斧を転用したタガネ状石器、491が出土している。

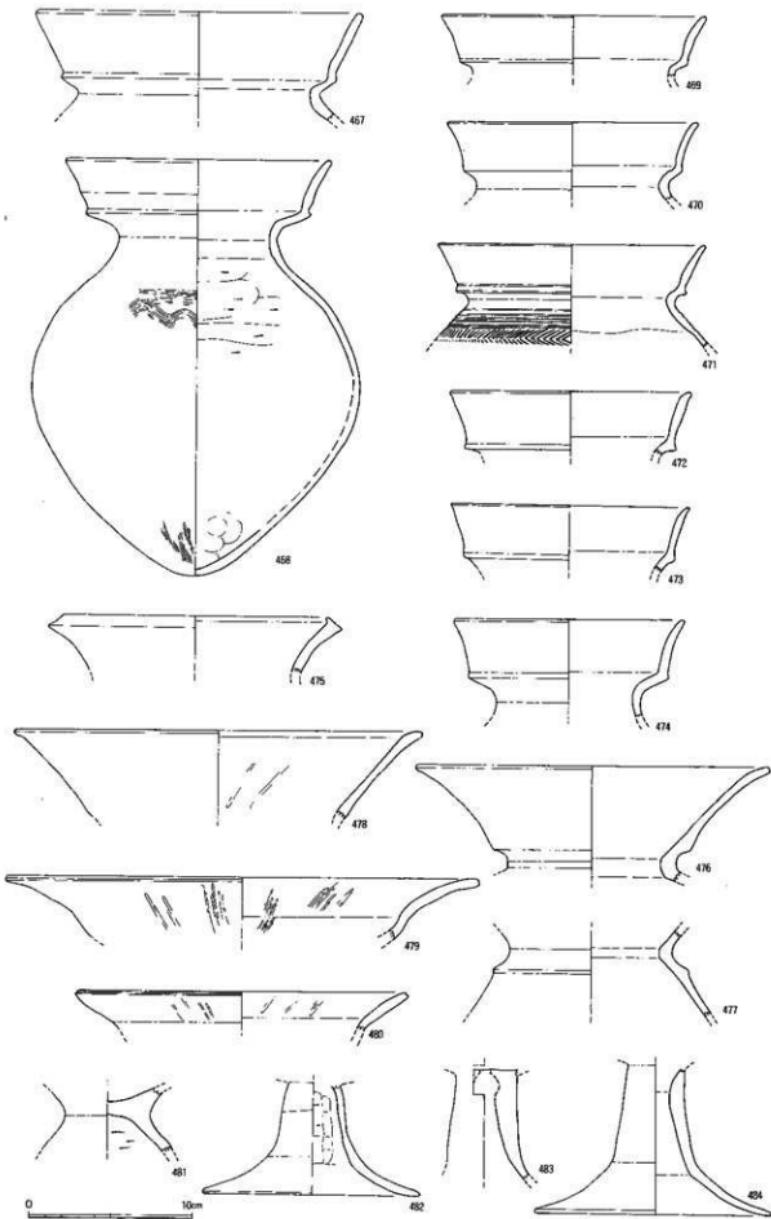
S I 17出土遺物（第132図～133図） 壺467はやや厚めの複合口縁が真っ直ぐ開くもので、その端部は丸く収まる。淡黄色の胎土には2mm以下の長石、石英などを含んでいる。壺468は厚めの口縁が軽く外反しながら外に開くもので、その端部は丸く収まっている。複合口縁部の稜は上部を強くナデすることによってその突出を強調している。肩部は中程が強く張り出し、平底の痕跡を若干とどめる尖り底に向かって収束している。底部内面には指頭圧痕が残る。肩部の調整には、ヨコハケの後に同じ原体によると思われる波状文が施されている。淡黄白色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。469は口縁の中程に厚さのピークが来る壺の口縁で、その端部はややつまみ出されて丸く収まっている。淡黄色の胎土には1mm以下の長石や、石英などを含む。床面出土。壺の口縁470は緩やかにカーブする複合口縁の端部を外側につまみ出しており、淡橙褐色の胎土には1mm程の長石や石英などを含んでいる。床面出土。壺471は真っ直ぐ外に開く複合口縁を持ち、その端部は先細りしている。複合口縁部の稜は水平を意識して突出しており、その上部は強くナデられている。肩部には6条の擬回線文が施されており、その下には、羽状文が細かく巡っている。淡黄色の胎土には1mm程の長石や石英などを含んでいる。472は壺の口縁で、やや厚めの複合口縁は端部を外側につまみ出している。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英、金雲母、赤茶褐色土粒などを含んでいる。壺の口縁473は薄作りの複合口縁が先細りしながら開くもので、その端部は外側につまみ出されている。暗茶緑色の胎土には1mm以下の長石、石英などを含む。壺の口縁474はやや厚手の複合口縁が軽く外反しており、その端部は先細りして丸く収まっている。複合口縁部の稜は水平方向に突出している。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含んでいる。壺475は内傾する複合口縁を持つものの部類に入るとと思われる。外面にはヨコナテ調整の跡が見られ、淡黄色の胎土には1mm以下の長石、石英などを含まれる。476は鼓形器台の受け部で、その端部は余り発達していない。筒部内側は面がハッキリと残っている。淡黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英、金雲母などを含む。鼓形器台477はやや高い脚部を持っており、筒部の縮約もやや甘い。淡黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英などを含む。鼓形器台478の受け部は、やや肥厚する端部が発達しており、その内面には縱方向のヘラミガキが施されている。淡橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英、黒色砂粒等を含む。479は高杯の杯部と思われるが、肉厚の器壁は端部に面を持っており、どちらかというと鼓形器台のように見える。調整は内外面共に縱方向の細かいヘラミガキが施されており、淡茶褐色の肌理の細かい胎土には1mm以下の長石、石英、黒色砂粒等を含む。480も高杯の杯部と思われるが、端部の沈線が明瞭に表れている。淡橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英などを含む。481は短脚の高杯とでも呼べようか。その杯部は深く、しっかりとした脚が付いており、内面はヘラケズリが施されている。色調は、外面淡黄色を呈し、杯部内面は明橙褐色、脚内側は淡橙色を呈す。高杯482はやや低めの脚部で、筒部内側には単位の長い工具でケズリが施されている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。高杯の脚483は杯部接合面に径8mm程の穿孔が成されており、脚内部は袋状を呈す。明橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含んでいる。高杯484は10cm程の高い脚部で、筒部の内側はケズリの関係か一部厚くなっている。明橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英などが目立つ。杯部485は厚ぼったい器形にヘラミガキが施されており、外面内面共に赤色顔料が塗布されている。淡茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英などを含む。低脚杯486の脚部は厚い作りになっており、裾はあまり開かない。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英、黒色砂粒などを含んでいる。低脚杯487は杯部と脚部の接合に脚張り付け法を使用している。淡黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石



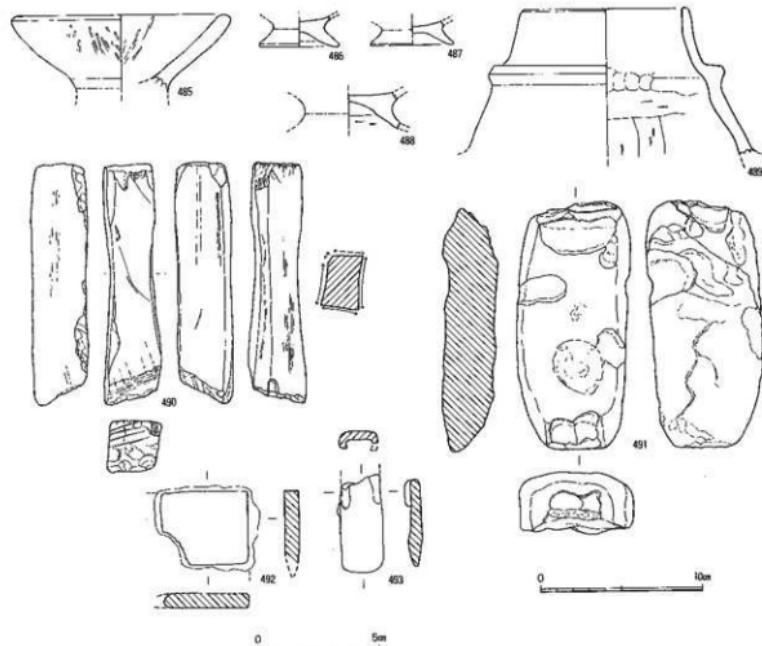
第130図 竹ヶ崎遺跡 S 116・S 117実測図 S = 1/60



第131図 竹ヶ崎遺跡SII 16・SII 17土層断面図 S = 1/60

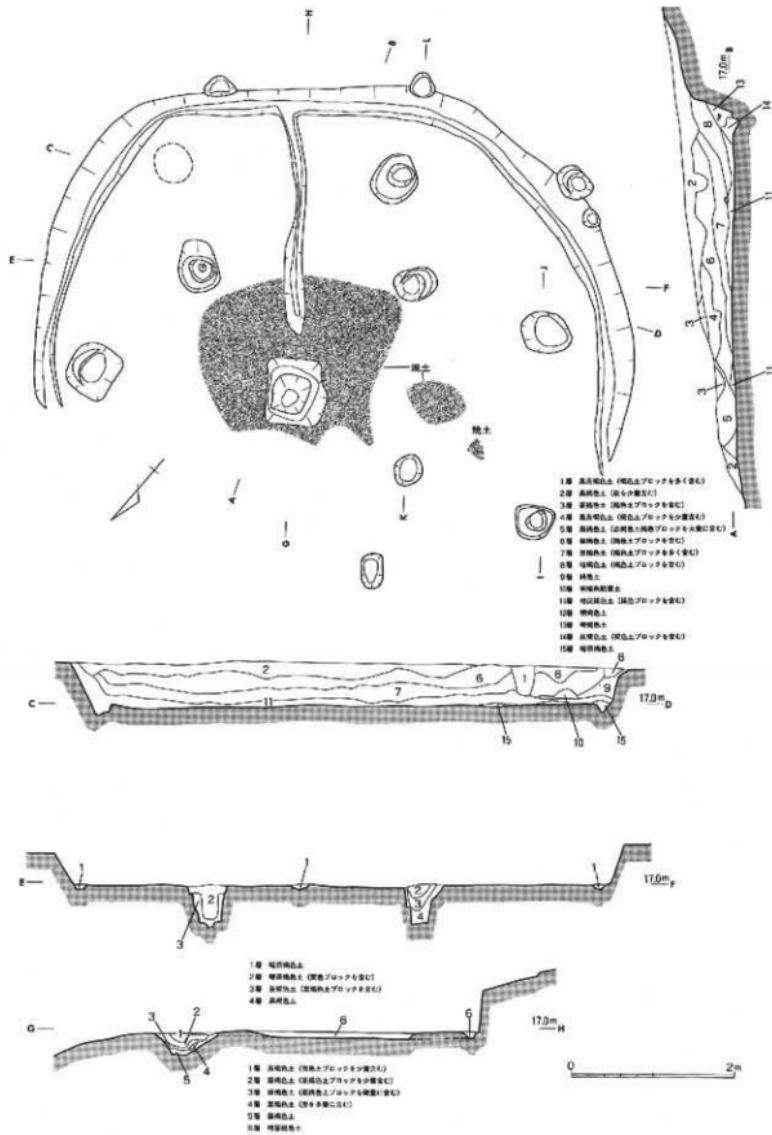


第132図 竹ヶ崎遺跡 S I 17出土遺物実測図 (1) S = 1 / 3

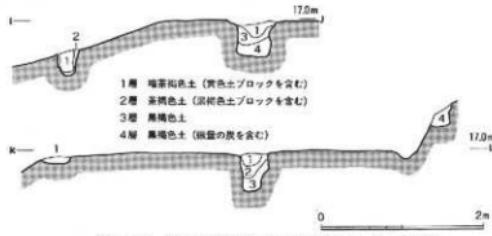


第133図 竹ヶ崎遺跡 S I 17出土遺物実測図 (2) S = 1/3 (鉄器492-493は S = 1/2)

英などを含む。低脚杯488は大型品で、杯部の作りも厚くなっている。淡赤褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。489はコシキ形土器の突帯が遡る口縁で、口縁端部は面を持っている。内面はヘラケズリの後に突帯を張り付けており、その際の指頭圧痕が遡っている。また、突帯の口縁側は水平に面を成し、胴部側は傾斜面になっている。これは実用を考えてのことと思われる。淡茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。床面出土。石器490は硅長岩系の仕上げ用の砥石で、5面の使用が認められる。使い込まれた使用面は一様に回状を呈し、滑らかである。作業用と思われるピットから出土している。全長15cm程の石器491は崩製石斧を転用したと見られるタガネ状石器である。目の細かい灰色の素材からなっており。上部は叩かれているために剝離を繰り返している。床面西部より出土。鉄器492は厚さ5mm程の板状鉄片で、板状鉄斧か、もしくは板状素材の可能性が考えられる。鉄器493は袋状鉄斧で、縦横2.5cm四方、幅1.3cm程あり、刃部の残り具合を見ると、余り使用されていなかった様である。以上の遺物を見ると、S I 17の造構廃棄時期は塙津5期と思われる。また、タガネ状石器が出土していることにより、鉄器の製作を行っている造構の可能性も考えられる。



第134図 竹ヶ崎遺跡 S-18実測図 S=1/60



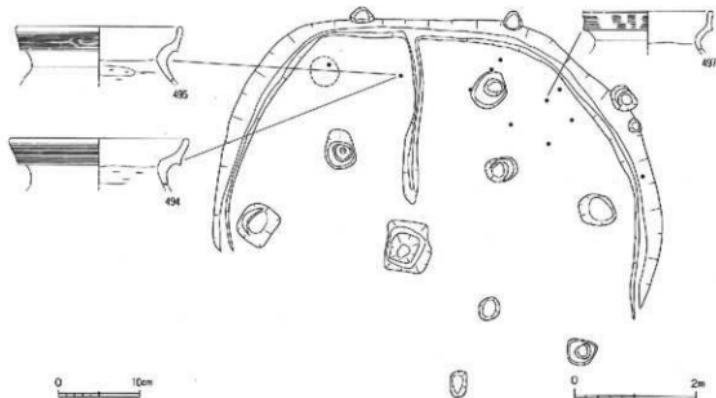
第135図 竹ヶ崎遺跡 S-18土層断面図 S=1/60

#### S-18 (第134図～135図)

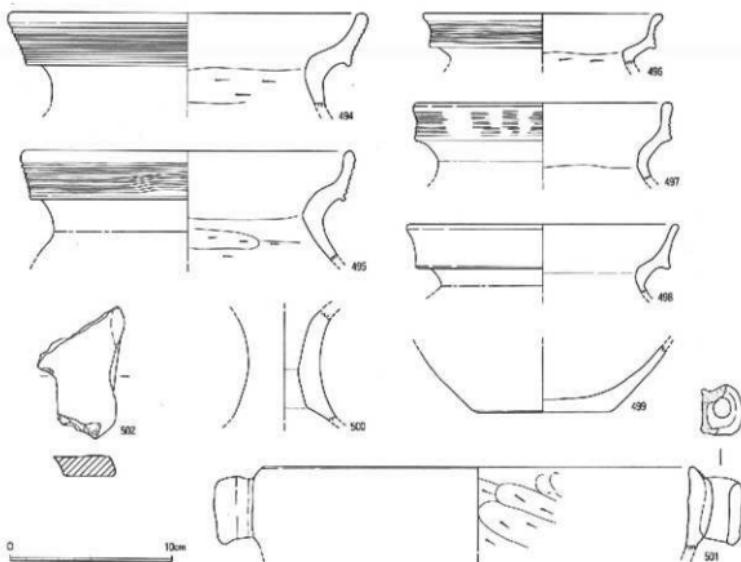
当遺跡の中央北寄りに位置しており、遺構の北側は流れているが、形態は隅丸多角形の堅穴住居跡で、壁際には幅20cmの壁体溝が巡っている。住居の規模は溝の内側で7m程になり、直径50cm、深さ50cm程の主柱穴と思しきビットが壁際には掘り込まれている。主柱は6本か7本と思われ、主柱の内側に4穴開いたビットは垂木を支えるための補助的な4本柱があったと考えられる。また住居跡の掘り方にも径40cm程のビットが見られ、これも垂木を支える補助的な柱か、または杭があったものと思われる。床面のほぼ中央には掘り方が方形を呈す、2段掘りのいわゆる中央ビットが掘り込まれており、中央ビットと壁体溝を結ぶ幅10～20cm、深さ10cmの溝が柱間の真ん中を通って真っ直ぐに掘り込まれている。中央ビットの周囲2mは焼土に覆われている。しかし、中央ビットと溝には焼土はかかっていないかった。なお、精査時に確認できなかったビットが写真で確認出来たので、点線で位置を示している。

S-18遺物出土状況(第136図) 住居跡南側壁寄りに遺物が集中して出土しているのが分かる。床面からは甕の口縁494・495・497が出土している。

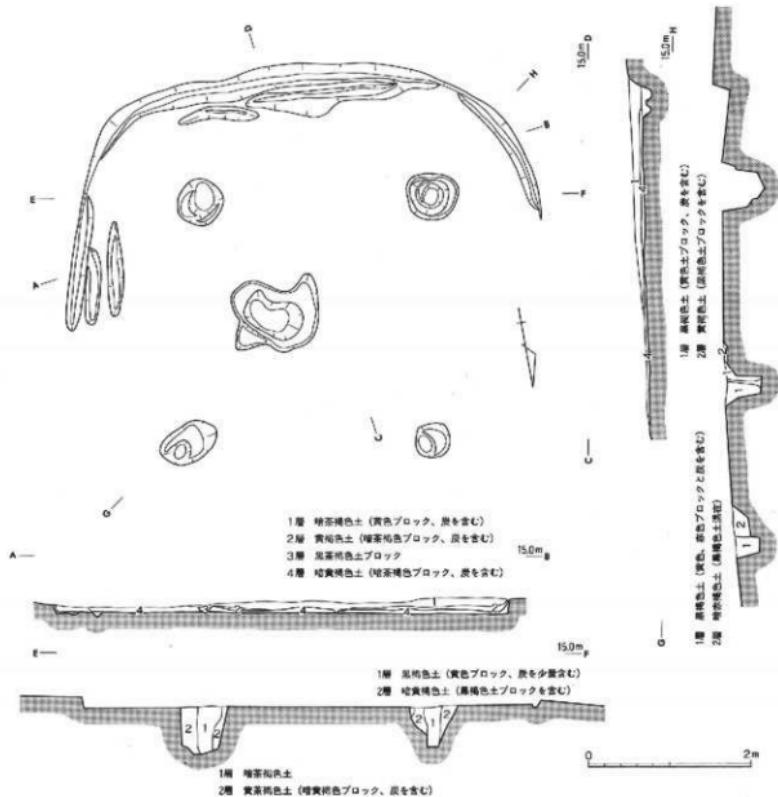
S-18出土遺物(第137図) 甕494はやや短く厚い複合口縁が開いており、端部は丸く取まっている。外面には貝殻腹縁と思しい平行線文が施されている。複合口縁部の稜は下方に垂れ下がっている。口縁内面は明瞭な段を持たずに頸部から端部にかけて緩やかなカーブを描いている。内面の調整は左方向のヘラケズリが頸部上方まで施されている。暗茶褐色の胎土には2mm程の長石、石英等を含む。甕495は厚い複合口縁が直立気味に立ち上がっており、端部は丸く取まる。外面には貝殻腹縁によると思われる平行線文が2周巡っている。複合口縁部の稜は下方に突出している。内側の調整には左回りのヘラケズリが頸部中程まで施されている。暗茶褐色の胎土には2mm程の長石、石英などが含まれている。甕の口縁496は2cm程の強く外折れる複合口縁を持ち、その外面には貝殻腹縁と思われる平行線文が施されている。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。甕497は短い口縁が直立気味に立ち上がっており、その口縁は丸く取まる。口縁外面には原体不明の平行線文が施されている。暗茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英、赤色土粒等を含む。甕498はやや短めの複合口縁が緩やかにカーブして開いており、やや肥厚する端部は丸く取まっている。複合口縁部の稜は斜め下方へ突出している。淡茶褐色の胎土には1mmほどの長石、石英などを含む。甕、もしくは甕の底部499は径8.2cmの明確な平底を呈しており、その底面は平滑である。体部も滑らかな器



第136図 竹ヶ崎遺跡 S I 18遺物出土状況 S = 1 / 80



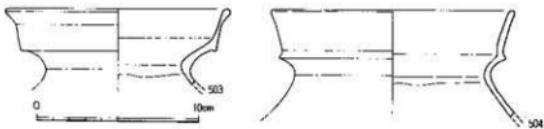
第137図 竹ヶ崎遺跡 S I 18出土遺物実測図 S = 1 / 3



第138図 竹ヶ崎遺跡 S I 19実測図 S = 1/60

面を持つが、ミガキの有無は不明である。内側はヘラケズリの跡にナデていると思われる。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。500は鼓形器台の筒部で、厚い器壁を持ち、筒部はよく発達している。淡橙褐色の粗い胎土には2mm程の長石、石英等を含む。501は取っ手付きの鉢と思われる。穴の開いている取っ手は器面に張り付けられており、取っ手付け根に強いナデが施されている。先細りの口縁はやや内傾しており、端部は丸く収まっている。内側の調整は左上がりのヘラミガキで、口縁のすぐ下に指頭圧痕が見られる。淡茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含んでいる。502は、幅1.3cmの淡黄色を呈す平滑な石器で、端部には敲打による剝離が見られる。おそらく石錐として使用されたものと思われる。

以上の遺物を見たところ、S I 18の廃棄時期は塩津1期と思われる。



第139図 竹ヶ崎遺跡 SII-19出土遺物実測図 S = 1 / 3

#### SII-19 (第138図)

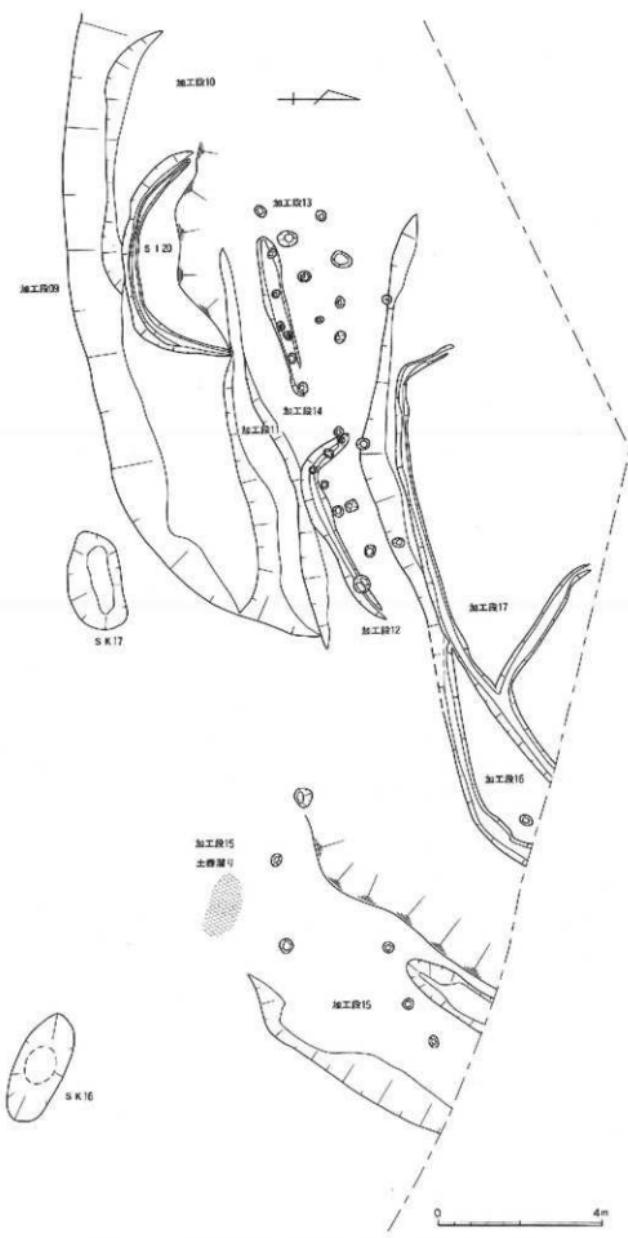
竹ヶ崎遺跡の中で、北側に位置する。東に加工段09～17を見下ろす堅穴住居跡では南北に軸を取っている。近世の削平を受けており、遺構は深さ60cm程が検出できた。規模はおよそ6mと思われ、壁際には幅10cm～20cmの壁体溝が少なくとも2条巡り、土層図(A-B)にも見られるように、一度は拡張されたが、後に縮小されていることが分かる。覆土には炭をよく含んでいるが、焼失の痕跡は受けられない。径40～60cm、深さ40～60cm程の主柱穴は壁際から1.5m程内側に4穴掘り込まれており、建て替えの痕跡が認められることから、住居の建て替え時には主柱の移動がなかったものと思われる。床面の中央東寄りにいわゆる中央ピットが不定形に2段に掘り込まれている。土層図(G-H)に見られるように中央ピットは炭化物を含んでおり、同じ場所に一度は掘り直されていることが分かる。

**SII-19出土遺物 (第139図)** 遺構の残りが悪いため遺物の出土量は少ないが、ほぼ床面で検出されている。壺503は薄い複合口縁を持っているが、その端部は肥厚して丸く収まっている。複合部の稜は余り発達しておらず、下方にやや突出している。暗黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含んでいる。壺504はやや厚い複合口縁が真っ直ぐに開いており、端部は丸く収まっている。複合口縁部の稜はよく発達しており、水平方向を意識して突出している。明橙褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含んでいる。以上のことからSII-19の廃棄時期を知ることは難しいが、およそ塙津3～5期の内の廃棄と考えられる。

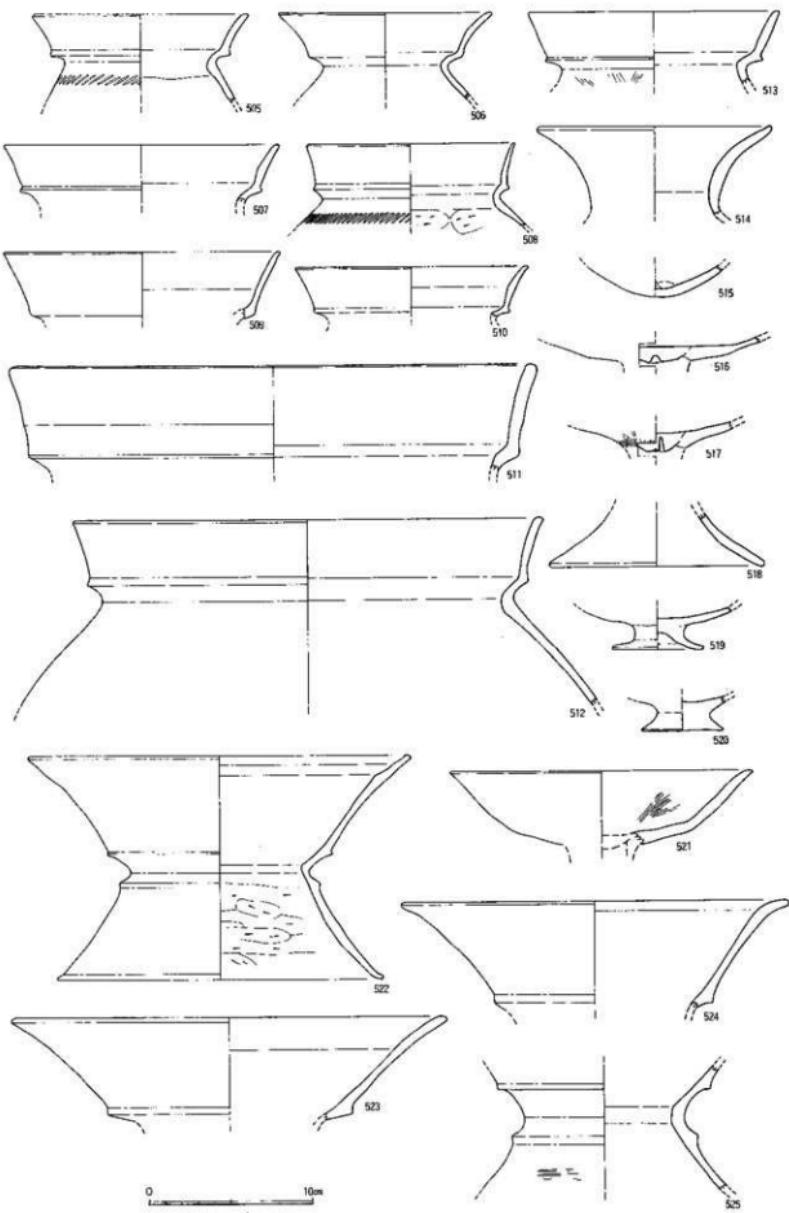
#### SII-20・加工段09～17遺構配置状況 (第140図)

竹ヶ崎遺跡において、最北端の最も低い場所に位置し、標高は11m～13m程である。遺構の一部は調査区の外へと伸びており、遺構の延長線上にある未調査区のなだらかな地形からも遺構の広がりを感じさせるものである。SII-20は加工段09・10の上に建てられていたと思われる。加工段12は後述する加工段17と切り合い関係にあり、第143図の土層図(C-D)により、加工段12が古いことが分かる。加工段15は北東調査区外へ伸びる可能性があり、南西部に土器溜りを持つ。土器溜りは谷筋の遺物包含層の最下層で検出されており、一括廃棄の可能性が考えられる。なお、包含層の遺物は後述する【遺構に伴わない遺物】に掲載している。

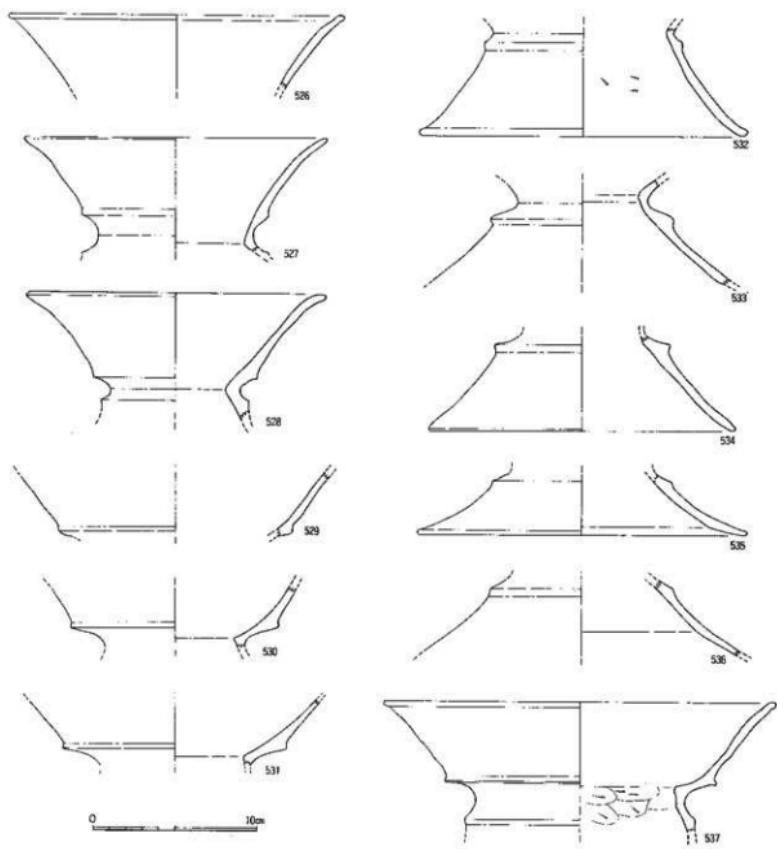
**土器溜り遺物 (第141図～142図)** 土器溜まりから出土した遺物の割合を見ると、壺と鼓形器台がほぼ同数検出され、残り2剖程を高杯、低脚杯が占める。壺は広口壺と思われるものが1点出土したのみである。壺505はやや厚い複合口縁が外反するもので、その端部は丸く収まる。複合口縁部の稜は水平方向を意識して突出している。肩部にはノの字状の刺突が細やかに巡っている。口縁には



第140図 竹ヶ崎遺跡 S120・加工段09～17遺構配置図 S=1/120



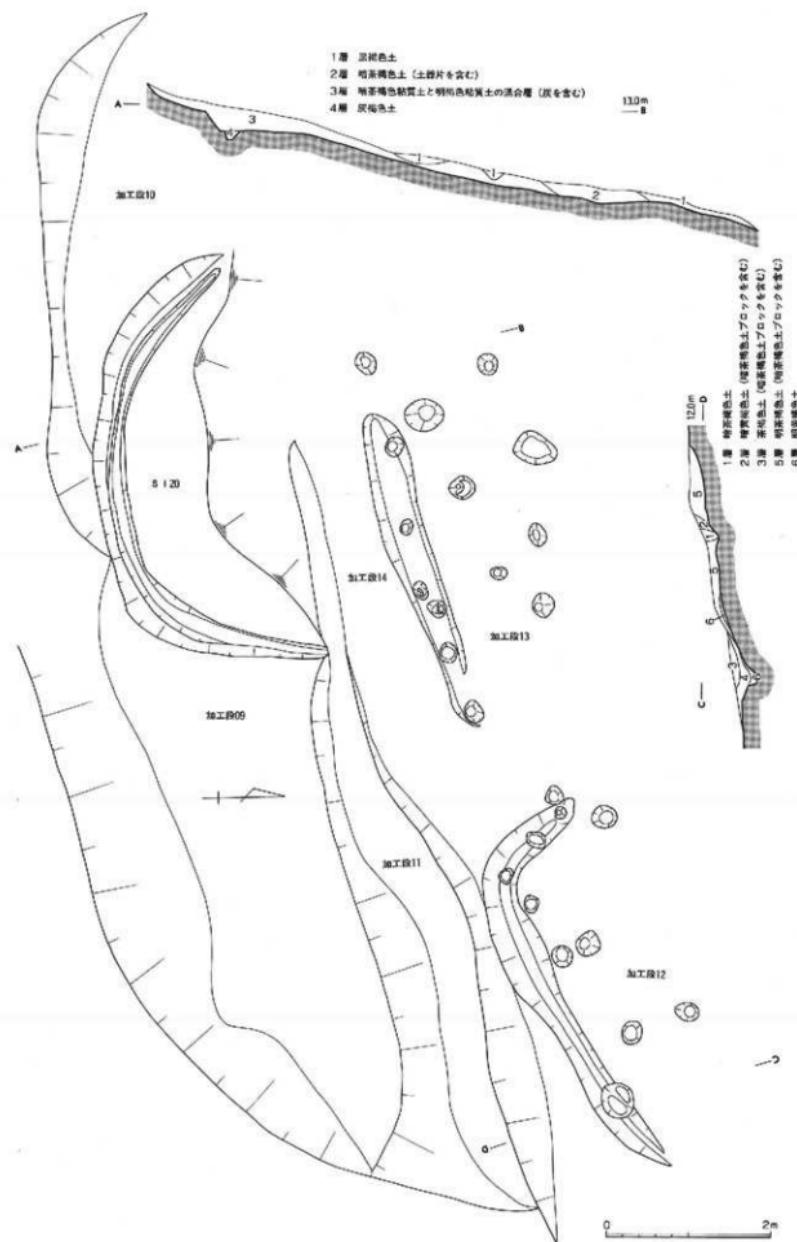
第141図 竹ヶ崎遺跡加工段15土器埋まり遺物実測図（1） S = 1 / 3



第142図 竹ヶ崎遺跡加工段15土器溜まり遺物実測図(2) S=1/3

ススが付着している。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英、金雲母等を含む。甕506は薄く長めの複合口縁がカーブしながら外に開いており、その端部は丸く収まる。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含んでいる。甕507は厚い口縁が真っ直ぐに開いており、その端部は面を持っていて。複合口縁部の稜は水平方向に突出しており、その上部には強いナデが施されている。灰白色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含んでいる。甕508は薄い複合口縁が直立気味に立ち上がっており、その端部は先細りになる。肩部には単位の細かいノの字状の刺突が巡っている。黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕509は薄作りの長い複合口縁が真っ直ぐに外側に開くものでその端部はやや外側につまみ出されたようなアクセントを持つ。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英、金雲母などを含んでいる。甕510はやや短めの複合口縁が真っ直ぐ外側に開くもので、その端部は外側につまみ出されている。複合口縁部内側は強いナデにより、中程から屈曲している。これ

は厚い器壁をナデによって薄く調整したためと思われる。淡橙褐色の胎土には、1mm以下の長石、石英等を含む。大型の甕511は肉厚の複合口縁が、均一な厚みを持って真っ直ぐ外側に開いており、端部には明瞭な面を持ち、内側はナデにより僅かに窪む。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。同じく大型の甕512はやや薄作りになっており、直立気味に立ち上がる複合口縁はその端部を外側につまみ出して明瞭な面を作っている。複合口縁部の稜は水平方向に鋭く突出している。淡黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含んでいる。甕の口縁513はやや厚めの複合口縁を持っており、その端部には若干のつまみ出しが認められる。複合口縁部の稜はその上部を強くナデることによって稜の突出を強調している。肩部には鋭い工具によるハケメ様の調整が施されている。淡黄白色の胎土には1mm程の長石、石英等を含んでいる。壺514はやや厚めの単純口縁が強くカーブをしながら外側に開いており、その端部は若干尖り気味に丸く収まる。口縁内側に若干の赤色顔料が付着している。ややボソボソとした茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英、赤茶色土粒等を含んでいる。甕または壺515は丸底を呈しており、内側に指頭圧痕が残っている。淡橙白色の胎土には1mm程の長石、石英等を含んでいる。高杯516は円盤充填されており、5mm程の軸孔が径3cm程の円盤部中央に穿孔されている。淡黄褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含んでいる。高杯517は杯部より厚い充填部を持っており、充填部の穿孔は中央に浅く開き、そのヨコにも深く開けられている。軸孔の径はそれぞれ3mm程である。淡黄白色的胎土には1mm以下の長石、石英等を含んでいる。脚518は裾部が立ち上がっており、端部は丸く収まる。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。やや小振りな低脚杯519の脚は杯部に張り付けられている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。520は低脚杯のバリエーションと思われ、脚内部は粘土で充填されている。橙白色の緻密な胎土には余り砂粒を含まない。後世の流れ込みの可能性も考えられる。高杯521は厚い器壁を持ち、端部は外方につまみ出されている。内側に粗いハケメが見られる。明橙色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。鼓形器台522は口径23cm、脚径20cm、器高13.5cmを測り、縮約された筒部を持つ。筒部の内側は痕跡を留める程度に面を持っている。やや厚い脚の内側にはヘラケズリが施されている。鼓形器台523は厚い受け部が真っ直ぐ外側に開いており、端部は丸く収まる。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台524はやや立ち上がり気味に聞く受け部の端部が外反するもので、淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台525は筒部の縮約が余り進んでおらず、やや高い器高を持つと思われる。脚部にごく浅い平行線文が認められる。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。526~531は鼓形器台の受け部で、余り外側に開かない。鼓形器台526は真っ直ぐ伸びる口縁端部にアクセントを持つ。淡茶色の胎土に1mm以下の長石、石英等を含む。鼓形器台527は余り縮約しない筒部とやや外反する受け部を持ち、筒部内側には稜を持つ。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台528は受け部の端部がやや外側につまみ出されており、筒部の径は小さく、約10cm程で、内側には稜を持つ。暗橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。529~531は受け部の稜が強調されている。淡黄褐色の胎土に1mm程の長石、石英等を含む。532~536までは、鼓形器台の脚部で、かなり開いている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台537は余り縮約していない筒部の内側が受け部の際まで削られている。淡茶色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。土器溜まりの施業時期は塩津5期と思われる。



第143図 竹ヶ崎遺跡 S 120・加工段09～加工段14実測図 S = 1 / 60

### S I 20 (第143図)

加工段09・10の上に掘り込まれており、形態は隅丸方形の豊穴作居跡と思われるが北側の半分ほどが崩落しており断定は出来ない。壁際には20cm程の複体溝と思しき溝が巡っている。床面からはピット等は検出できなかった。なお、S I 20からは遺物の出土が無く、廃棄時期などは不明であるが、S I 20の北側斜面にある加工段12・13の遺物が塩津1～2期と、5期の2時期に分かれているため、おそらくはそのどちらかと推定される。

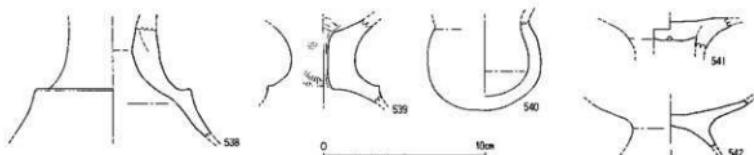
### 加工段09・10・11 (第143図)

東西方向に伸びる全長15m程の大型の加工段09とその床面にはほぼ軸を等しく造られている全長7mの加工段10は標高13m付近にある。床面からはピットなどは検出されなかった。加工段11は全長10m弱のテラス状の遺構で、性格は不明である。

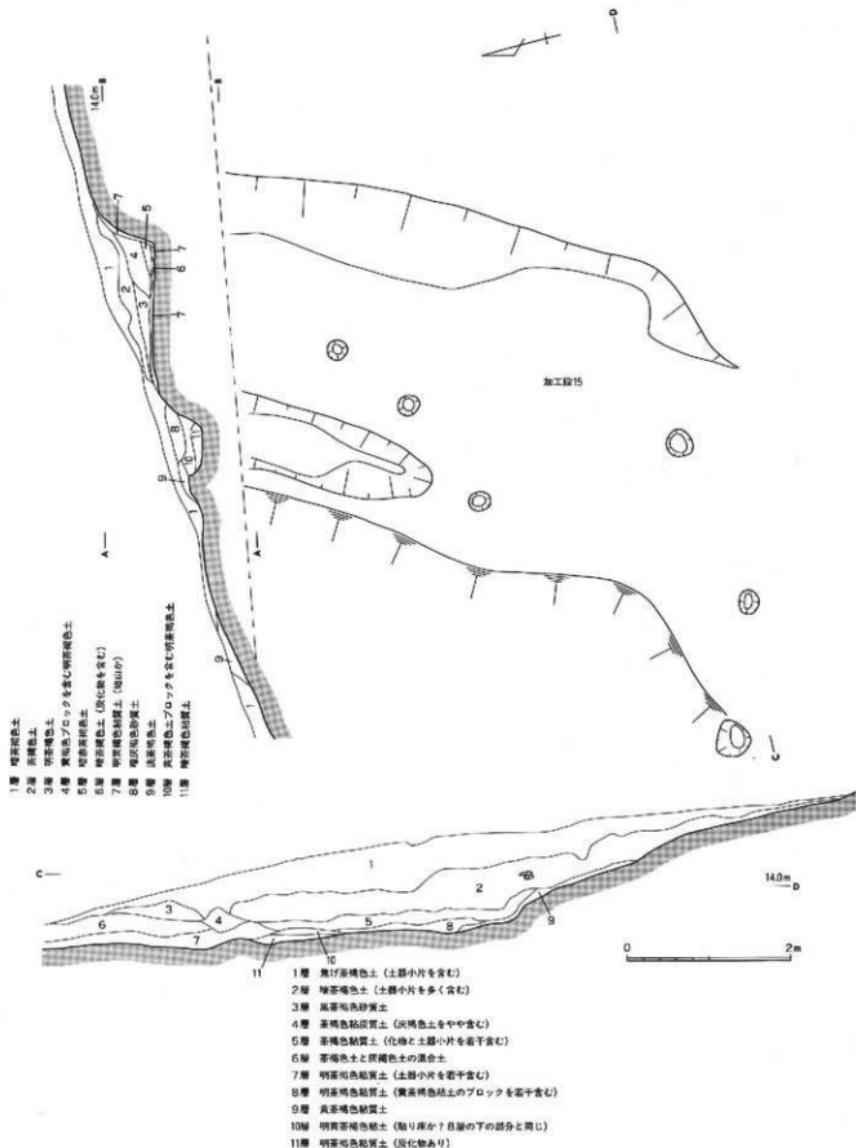
### 加工段12・13・14 (第143図)

加工段09・10の一段下に展開する加工段で、加工段14は加工段09・10に付属する可能性も考えられる。加工段12は南壁から西に直角に曲がり込む幅30cm～50cm程の溝状造構を伴っており、残存長は長辺4m、短辺1.5m程になる。溝の中、及び床面には建物の配列が認められないピットが検出された。同床面では加工段13が加工段14と軸を同じくして検出されている。加工段13は南側の壁に溝状造構が沿うように掘り込まれており、溝内にピットが並んでいる。床面にもピットが検出されたが建物の配列は確認できなかった。

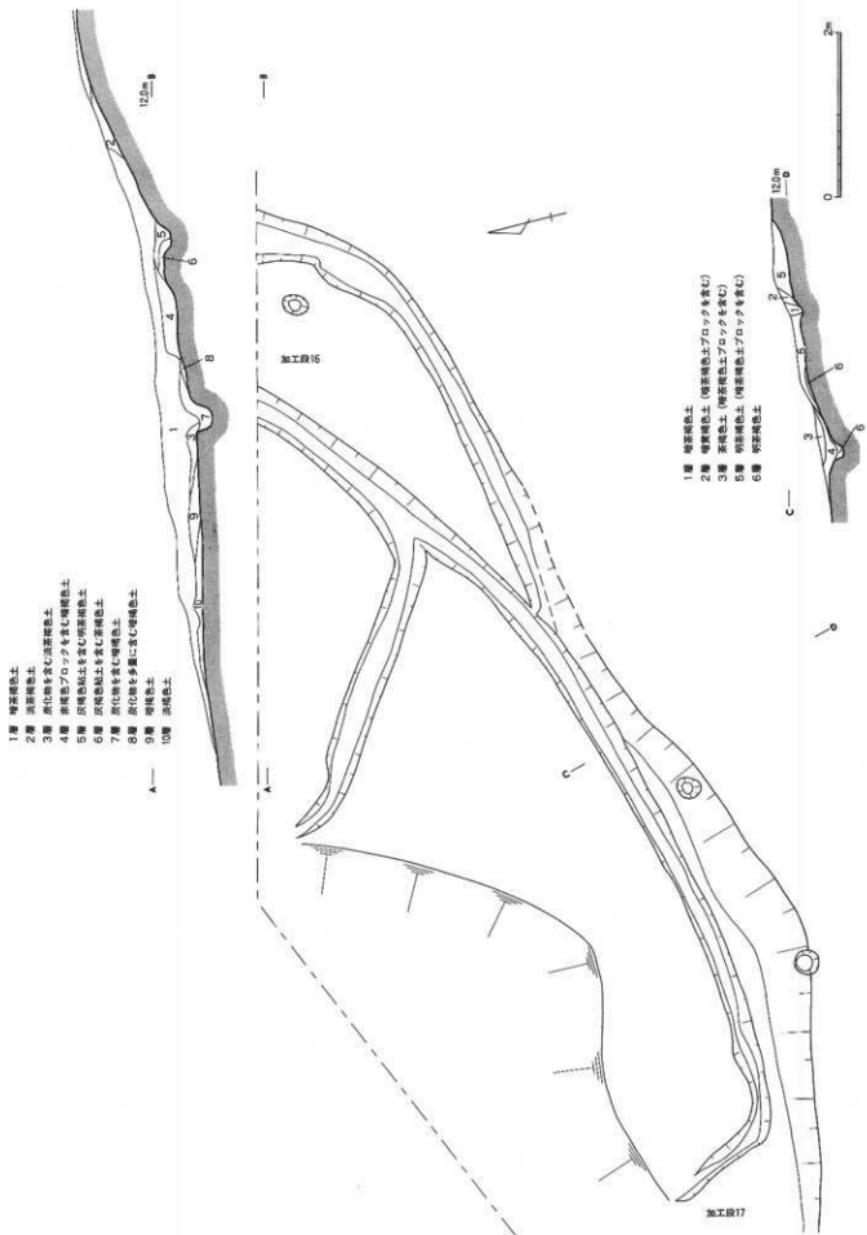
加工段12・13出土遺物(第144図) 鼓形器台538はよく発達した筒部に高い脚が付くもので、淡橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。塩津1期から2期に移行する過程で出現するものと思われる。鼓形器台539はやや縮約する肉厚の筒部を持つ。暗茶褐色の胎土には2mm程の長石、石英等をよく含む。単独で見る限り塩津2期のものと思われる。540は小壺で、底部は完全な丸底を呈し、2次的に火を受けている。短黄褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。高杯541は充填部の中央に4mm程の穿孔が杯部まで抜けていたが、粘土で埋められたと思われる痕跡がある。淡黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。低脚杯542は杯部に大きめの脚部が張り付けられており、淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。541・542は、塩津5期の遺物に中たると見える。以上の少ない資料から言えることは加工段12・13及びその上方に位置する加工段09～14、S I 20等の造構廃棄時期はおそらく塩津1期～2期にかけてか、5期の内ではないかと言ふことくらいである。



第144図 竹ヶ崎遺跡加工段12～加工段13出土遺物実測図 S = 1 / 3



第145図 竹ヶ崎遺跡加工段15実測図 S = 1 / 60



第146図 竹ヶ崎遺跡加工段16・加工段17実測図 S = 1 / 60

### 加工段15（第145図）

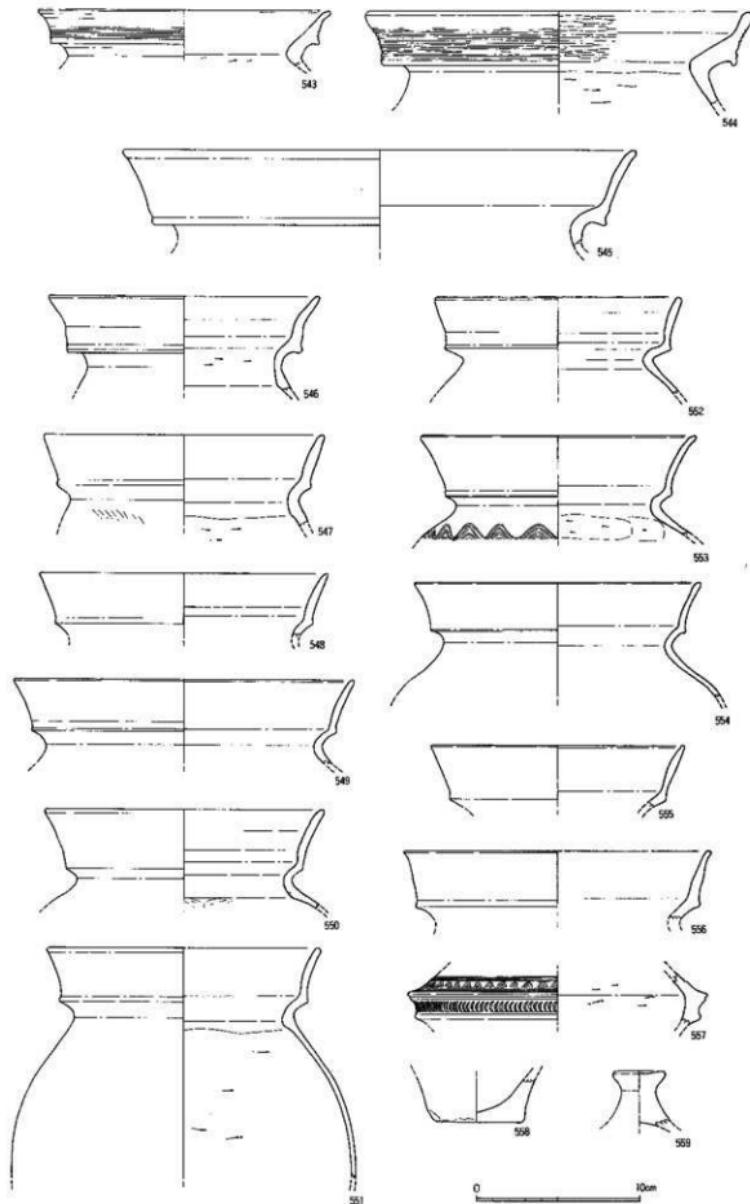
調査区最北端に位置し、北側は調査区外に伸びている。調査できたのは加工段の南側7m程である。平坦面は幅2mが残っており、径30cm程の小さいピットが検出されているが、建物の配置を伺うことには出来なかった。なお、床からは塩津5期の遺物が検出されている。また加工段に平行した溝が床面の落ち込みに検出されており、加工段15と何らかの関係があると思われる。加工段の南側には、土器溜りが検出されている。

### 加工段16・17（第146図）

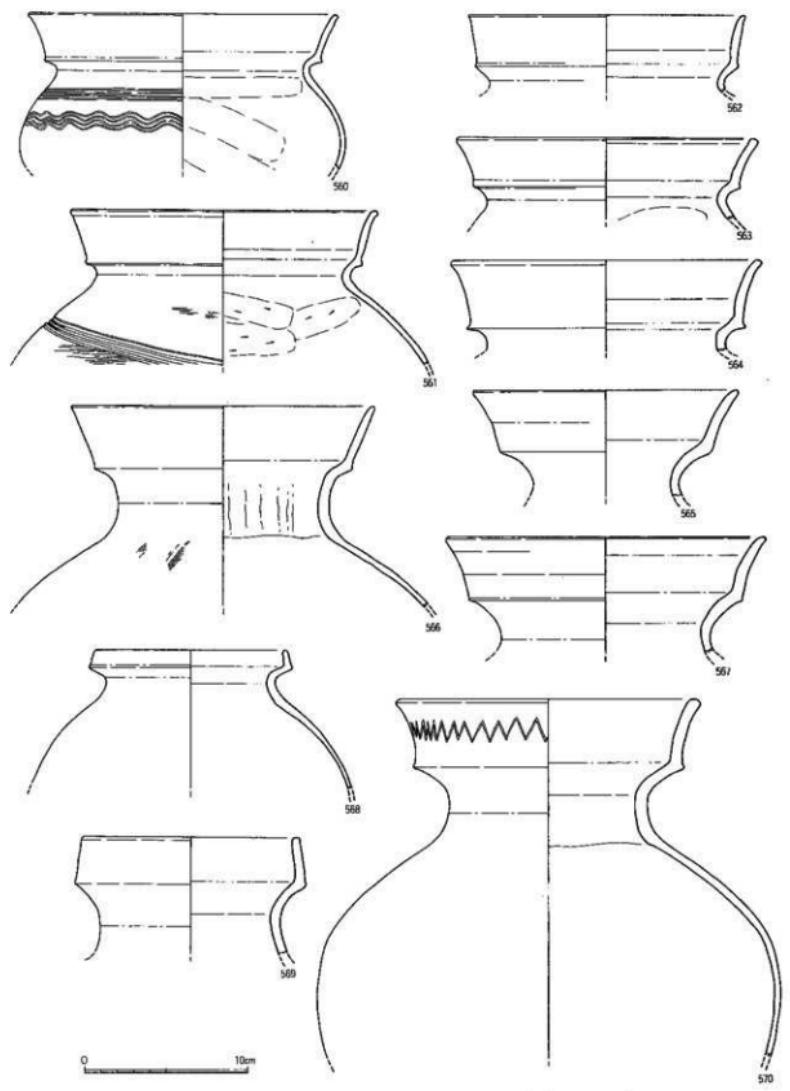
加工段09～15に囲まれるようにして竹ヶ崎遺跡の最も低い位置に検出されており、標高は11m付近である。加工段の北側は加工段15と同様調査区外に伸びており、遺構の広がりを感じさせる。また、西側は盛り土が流れており、遺構は検出できなかつたものの、調査区外へと伸びて行くように感じる。調査できた加工段16は、全長15m以上あり、壁際に幅30cm程の溝が加工段17との接点まで巡る。加工段17は加工段16の大半を切っており、壁は加工段16・17で共有している。また、加工段17は壁際に幅30cm程の溝を持っており、その途中から内側に向かう同規模の溝が走っている。

### 加工段09～17出土遺物（第147図～149図）

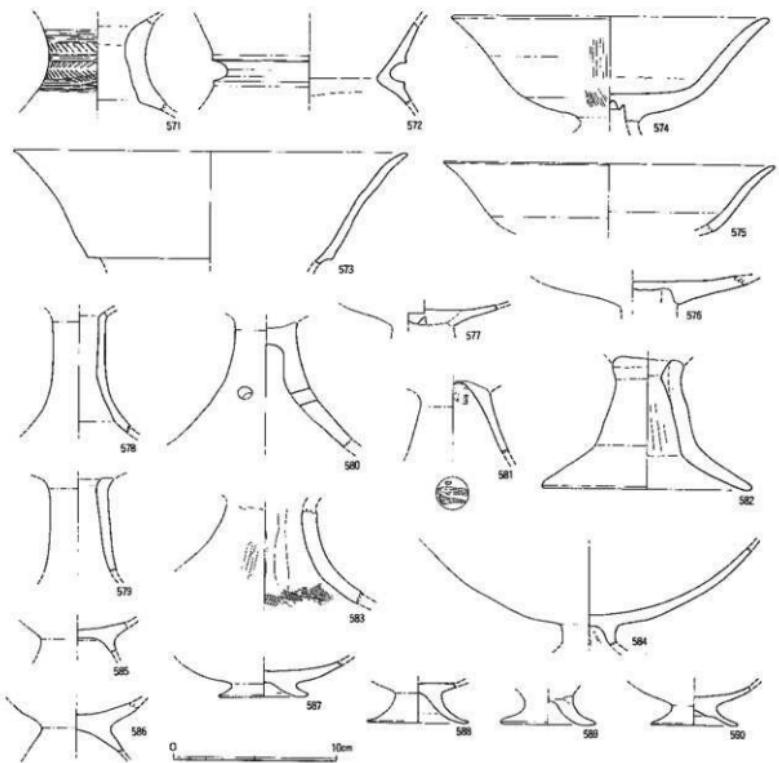
甕543は複合口縁の端部が先細りしながら外反するもので、口縁外面下半分に工具不明の平行線文が巡る。口縁端部は強くつまみ出されており、口縁上半にはヨコナテ調整が施されている。口縁内側はあたかも単純口縁のごとく真っ直ぐに開いている。暗茶褐色の胎土には1mmほどの長石や石英などを含む。甕544は肥厚した複合口縁の端部が丸く収まるもので、口縁外面には貝状工具による凹線文が施されており、口縁端部はヨコナテ調整により四線文が消されている。口縁内側にはヘラミガキが施されている。暗茶褐色の胎土には2mm以下の長石や石英等を含む。大型の甕545はよく発達した複合口縁の端部が外側につまみ出されており、丸く収まる。複合口縁部の稜はその上部を強くナデすることにより強調されている。淡橙赤色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含んでいる。甕または壺546の複合口縁は強いナデにより中程から屈曲している。端部は先細りして丸く収まる。複合口縁部の稜はやや下方に突出している。頸部はやや発達しており、内側は頸部下方までヘラケズリが達している。淡茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。甕547はやや厚めの複合口縁が真っ直ぐ伸びているもので、その端部は丸く収まる。暗茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。甕548は口縁端部が真っ直ぐ伸びるもので、端部は先細りしている。暗茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。甕549は薄い複合口縁がほぼ真っ直ぐに伸びるもので、その端部は丸く収まる。淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕550は複合口縁部が緩くカーブし、その端部は先細りして丸く収まる。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕551は複合口縁が緩くカーブするもので、その端部は若干外側につまみ出されている。淡橙色の胎土には1mm程の長石、石英、金雲母等を含む。甕552は直立気味に立ち上がる複合口縁の端部が丸く収まるもので、複合口縁部の稜は水平方向に突出している。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英、雲母などを含んでいる。甕553は薄作りの長い複合口縁を持ち、その端部は外方につまみ出されて、丸く収まる。肩部には波状紋が施されている。淡黄褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含んでいる。甕554は薄作りの長い複合口縁が緩くカーブするもので、その端部は若干外側につまみ出されて



第147図 竹ヶ崎遺跡加工段09～加工段17出土遺物実測図（1） S=1/3



第148図 竹ヶ崎遺跡加工段09～加工段17出土遺物実測図（2） S = 1 / 3



第149図 竹ヶ崎遺跡加工段09～加工段17出土遺物実測図（3） S=1/3

いる。複合部の縁は水平方向に突出している。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕555は複合口縁の中程が厚くなっている。その端部は内側にナデの線を残して細く収まる。淡茶褐色のきめ細かな胎土には1mmほどの長石、石英等を含んでいる。甕556は肉厚の複合口縁が端部に向かうにつれ細くなり、端部は外側につまみ出されている。複合口縁部の縁は水平方向に突出している。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英、赤色粘土粒等を含む。小型壺557は体部がそろばん玉状を呈し、その中央部には断面三角形の突帯が2条通り、それぞれの突帯の内側に沈線を施している。突帯の間には爪痕状の刺突が密に巡っており、上部突帯の上面には4条の沈線が巡る。沈線は1cm程の間隔を開けてもう1周しており、その間に幅5mm程の鋭い工具による扇状の文様が連続して設文されている。黄白色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含んでおり、器壁には赤色顔料が塗布されている。甕または壺の底部558は明瞭な平底を持ち、その径は6cm程になる。体部は直立気味に立ち上がる。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。ツマミ559はおそらく蓋のもの

と思われ、上部の径は3cm程である。暗茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕560は真っ直ぐ伸びた複合口縁がやや直立気味に開くもので、その端部は外側につまみ出されて丸く収まる。複合口縁部の稜は水平方向を意識して、突出している。体部は扁平で横に膨らんでいる。肩部には4条の平行線文が巡り、その下に波状文が施されている。暗黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等が含まれている。甕561は真っ直ぐ伸びた複合口縁が直立気味に立ち上がり、その端部は外側につまみ出されている。複合口縁部の稜は鈍いながらも水平方向を意識して突出している。肩部には数条の平行線文が斜めに走っており、施文の荒さを感じさせる。暗茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含んでいる。甕562は殆ど直立した複合口縁の端部が外側に若干つまみ出されており、僅かに面を持っている。複合口縁部の稜は水平方向を意識しているがさほど突出は見られない。淡黄色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。甕563は軽く外反する複合口縁を持ち、その端部は面を持っており、内側には強いナデの痕が見られる。橙褐色の胎土には2mm以下の中石、石英等を含む。甕564はやや厚めの複合口縁が軽く外反しつつ外側に開いており、その端部は外側につまみ出されて明確な面を持っている。複合口縁部の稜は水平方向に鋭く突出している。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含んでいる。甕565はやや厚めの複合口縁が緩く外反して端部は丸く収まる。淡黄褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。甕566は真っ直ぐに伸びる複合口縁の端部をやや外側につまみ出しており、複合口縁部の稜は水平方向にやや突出する。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕567はやや厚めの複合口縁が緩くカーブしながら開き気味に立ち上がるもので、その端部は外側につまみ出されて、やや面を持つ。複合口縁部の稜の突出はさほどでもなく、やや水平を意識している程度である。淡黄褐色の胎土には2mmほどの長石、石英等を含む。甕568は内傾する短い複合口縁を持っており、その端部は丸く収まる。複合口縁部の稜は水平を意識しており、ナデにより強調されている。黄白色の胎土には1mm程の長石、石英、金雲母、赤色土粒等を含んでいる。甕569は複合口縁が内傾しており、その端部には明瞭な面を持つ。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕570は厚い複合口縁が外反して立ち上がっており、端部に面を持っている。複合口縁部の稜は水平方向に僅かに突出している。口縁外面にはヘラ描きの山形文が設文されている。暗橙褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。鼓形器台571はよく発達した筒部にヘラ描き直線文、列点文、羽状文を施している。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英等を含んでいる。鼓形器台572は縮約した筒部に鋭い稜を持ち、内側は面を持たない。暗橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。鼓形器台573はやや直立気味に開く受け部を持ち、その端部は丸く収まる。淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯574は深く厚い杯部の端部が外反して丸く收まり、径1.5cm程の円盤充填部は径5mmの軸孔を持つ。暗茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。高杯575の杯部は薄い作りをしており、その端部は丸く収まる。淡黄褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含んでいる。高杯576は脚部が剥離した痕跡がよく残っている。茶褐色の胎土には3mm程の粗い長石、石英、赤色土粒等をよく含んでいる。高杯577は径3cm程の充填部に径5mmの軸孔を持つ。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英、金雲母等を含む。高杯の脚578は剥離した上端部が外側に折れ曲がっている。淡黄色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。高杯の脚579は剥離した上端部が外側に開き、面を持っている。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。高杯の脚580はその中程に4カ所の穿孔が見られる。穿孔はそれぞれ径8mmである。脚上端部は粘土を割り抜いて中空にしている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯の

脚581は上端部が剥離しており、その内側にはヘラ状の工具によるかき混ぜ痕がある。淡黄褐色の胎土には、1mm以下の長石、石英等を含む。高杯の脚582は安定感のあるしっかりした作りをしている。暗茶赤色の胎土には長石、石英、赤色粘土粒、黒色砂粒などを含む。脚583は脚径が5.5cmあり、大きく低い印象を与える。おそらく外面にミガキを施しており、脚部内側にはハケメが巡る。明橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英などを含む。低脚杯584は大きな杯部に脚接合部径の小さな脚が付いており、バランスが悪い。淡黄色の胎土には1mm以下の長石、石英などを含む。低脚杯585は脚上端部の裏側に平坦面を持っている。脚接合部の径は4.5cm程である。淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。低脚杯586は高い脚部を持っている。淡橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。低脚杯587は円盤充填されており、低い脚が付く。暗黄褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。低脚杯588も円盤充填されており、やや高めの脚が付く。淡黄色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。低脚杯589は円盤充填されており、円盤底部は脚部調整の際に一緒に撫でられて埋んでいる。淡黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。低脚杯590は脚の内側が2段になっている。淡黄白色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。以上の遺物を見たところ、加工段09~17の廃棄時期は概ね塩津5期と考えられる。

### 第3節 西側調査区

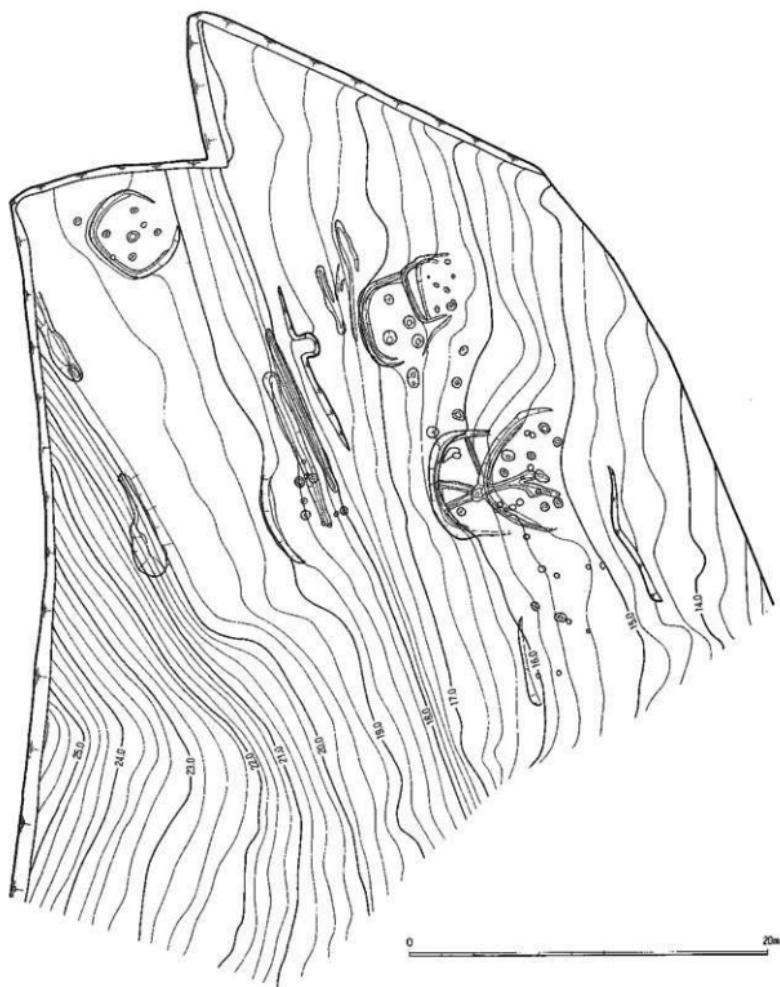
竹ヶ崎遺跡西端に中たる当調査区は、奥まった谷の東側の塩津山6号墳の麓に広がる緩斜面上に、弥生時代（塩津1期、5期）の竪穴住居跡や加工段等と古墳時代後期頃のピットなどが、近世の削平段の下から検出されている。谷を挟んで直ぐ西側には急斜面上に柳遺跡の加工段群がそびえており、まさに圧倒される思いである。それでは以下弥生時代の遺構遺物を中心に西側調査区について記述していく。

#### 加工段18（第151図）

竹ヶ崎遺跡の南端に位置し、遺構の一部は調査区外に伸びている。調査できたのは北側の5m程である。形態としてはテラス状の加工段の北端に1m×50cm、深さ50cmの土坑が付随するものである。遺構の西側は近世に削平を受けており、ザックリ切り落とされている。ここからは遺物は検出できなかった。

#### 加工段19（第152図）

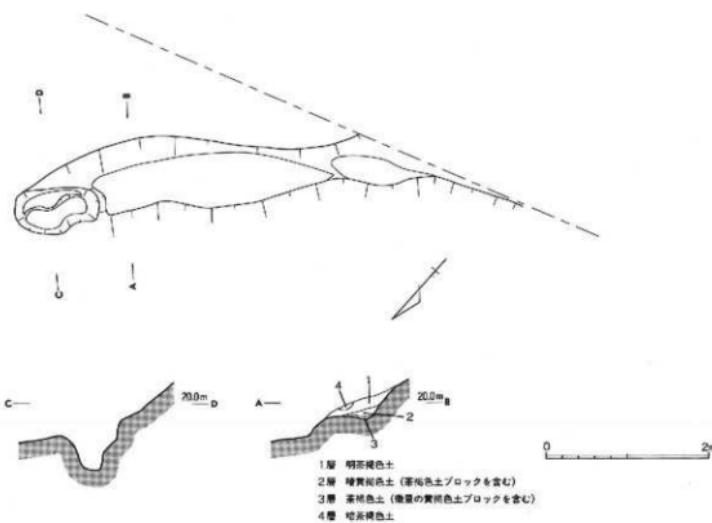
塩津山6号墳の裾下に中たる斜度30°の急斜面と緩斜面の変化点に、斜面に対して平行に造られた加工段で、不定形ながら全長6.5m程ある。加工段の西側は近世の削平を受けており、ザックリ切り落とされている。土層図（A-B）を見ると、土層1や2のように、加工段19の上方にも遺構の広がりを感じさせている。



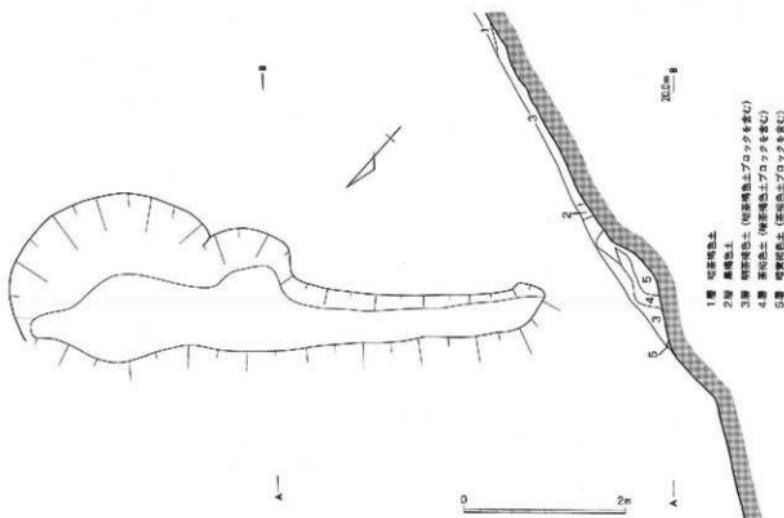
第150図 竹ヶ崎遺跡西側調査区遺構配置図 S = 1/300

加工段19遺物出土状況(第153図) 床面東端より甕、低脚杯が出土しており、遺構の廃棄時期を示す資料として有効と考えられる。また、土器の組成も甕と低脚杯に偏っている。覆土からは鉄器598が出土している。

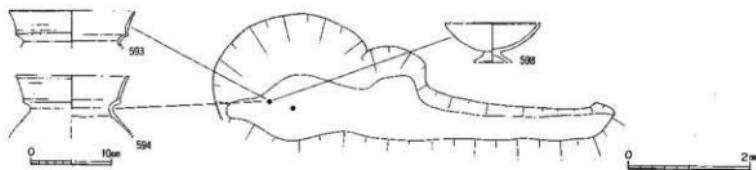
加工段19出土遺物(第154図) 甕591は薄い複合口縁がややカーブしながら立ち上がっており、その端部は先細りしながらも明瞭な面を持つ。複合口縁部の稜は水平を意識するというより、稜の上部



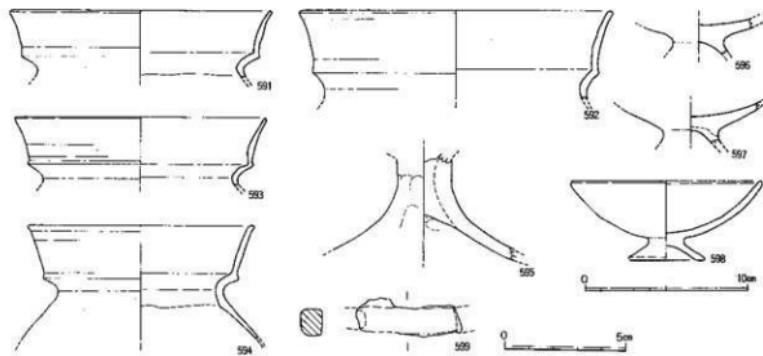
第151図 竹ヶ崎遺跡加工段18実測図 S = 1 / 60



第152図 竹ヶ崎遺跡加工段19実測図 S = 1 / 60

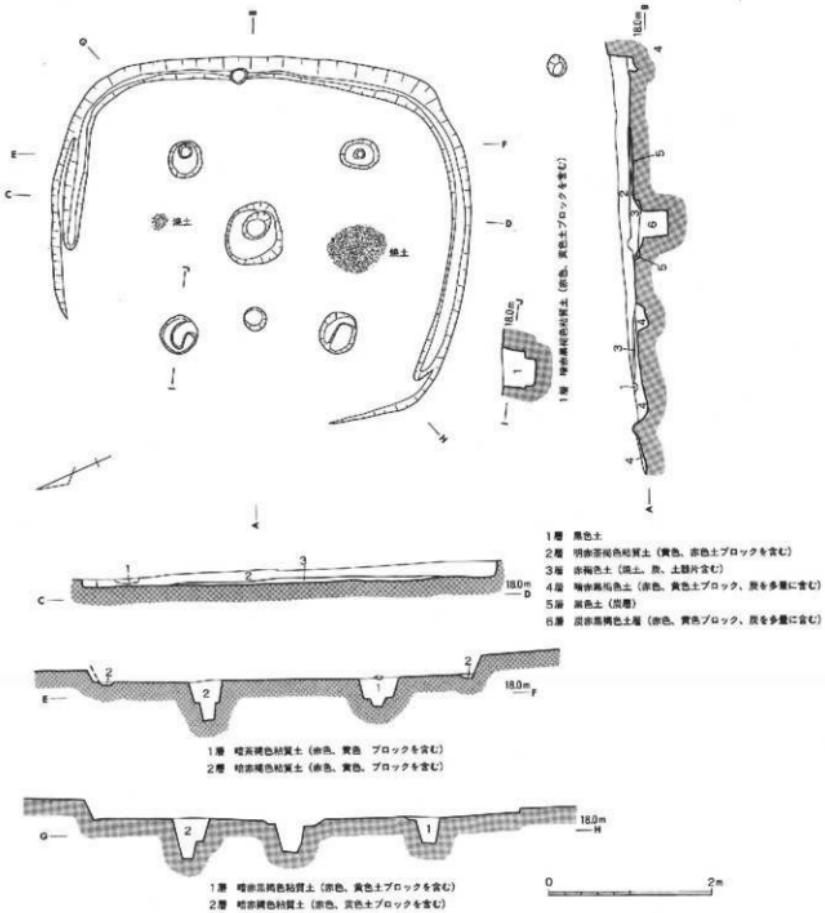


第153図 竹ヶ崎遺跡加工段19遺物出土状況 S = 1/80



第154図 竹ヶ崎遺跡加工段19出土遺物実測図 S = 1/3 (鉄器599は S = 1/2)

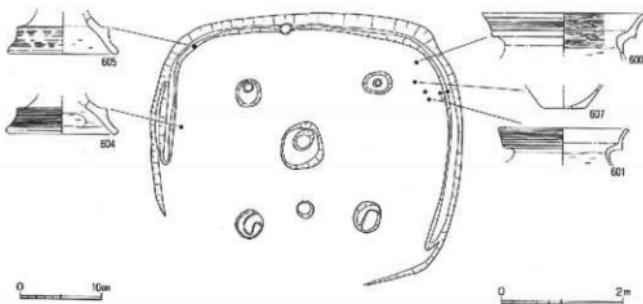
に強いナデを施すことに意識が向けられている。暗黄褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。甕592は薄く長い複合口縁が緩やかなカーブを持って立ち上がるもので、その端部は外側に軽くつまみ出されている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕593は薄作りの複合口縁が端部に向かうにつれて更に薄くなる。複合口縁部の稜はその上部に強いナデを施すのみで、水平方向には突出しない。暗橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。甕594は真っ直ぐ伸びる複合口縁の端部を外側につまみ出し、そこに明確な面を持つもので、複合口縁部の稜は鈍いながらも水平方向を意識して突出している。暗黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。高杯の脚595は短い脚柱と広い脚を持ち、上端は剥離痕が丸く残っている。脚内部は粘土で充填されており、更に指で押さえている。調整はナデ、またはケズリ後ナデと思われる。器形及び製作技法に他地域の影響を強く受けているものと思われる。淡茶褐色のきめ細かな胎土には1mm程の長石、石英等を含む。低脚杯596はやや厚い作りをしている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。低脚杯597は上端を丸く作った脚部を杯部の窪みに差し込む接合方を用いる。暗黄褐色の胎土に2mm以下の長石、石英等を含む。低脚杯598は口径12cm、底径5cm、器高5cmと小振りながらもバランスの取れた器形をしている。淡黄褐色の胎土には長石、石英等を含む。鉄器599は幅1.1cm厚さ8mm程の棒状小鉄片でやや折れ曲がっている。刀子の茎か、あるいは鉄素材の可能性もある。以上の遺物を見たところ加工段19の廃棄時期は塩津5期と思われる。



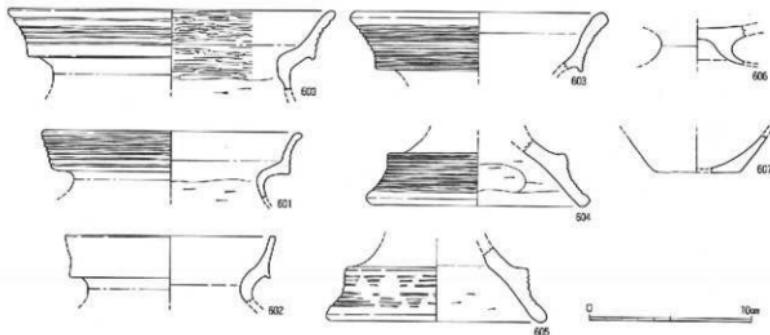
第155図 竹ヶ崎遺跡 S 121実測図 S = 1/60

S 121 (第155図)

竹ヶ崎遺跡の最奥部に中たり、谷の最奥部付近に位置する当遺構は、近世代に受けた削平の下から残りが悪いながらも検出された。形態は隅丸方形を呈す竪穴住居跡で、北東側の一部は遺構が流れているが、残っている壁際には壁体溝と思われる幅15cm～20cm程の溝が巡っており、建物の規模は壁体溝の内側で4.5m程になる。主柱穴は径50cm前後のものが4穴あり、壁際から1m程の所に深さ50cm掘り込まれている。床面中央よりやや西よりに、掘り方が不定方形のいわゆる中央ピットが深さ50cm程掘り込まれており、炭化物を多量に含んでいる。床面東寄りの柱穴の間には径30cm程の



第156図 竹ヶ崎遺跡 S I 21 遺物出土状況 S = 1 / 80



第157図 竹ヶ崎遺跡 S I 21 遺物実測図 S = 1 / 3

浅いピットが開いている。また、東壁際の溝の中に径20cmのピットが開く。床面からは焼土が検出されており覆土からも炭化物が出ている。おそらくS I 21は焼失したと思われる。

S I 21遺物出土状況(第156図) 近世の削平により造構の上部の大半を失っているが、床面近くで、甕、鼓形器台等を検出できた。遺物は壁際に集中して出土しており、甕と鼓形器台は離れて出土している。

S I 21出土遺物(第157図) 甕600は厚めの複合口縁が外反して開いており、その端部は丸く収まる。口縁外面には5条の四回線文が軽く施されている。複合口縁部の稜は下方に突出しており、口縁の延長を意識しているものと思われる。口縁内側は頸部下のヘラケズリが施される所までヘラミガキが施される。暗茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。甕601の口縁部は完形で、器形はややゆがんでおり、口径は測点間で16cmを測る。薄く作られた複合口縁は基本的に外反して、口縁外面に擬回線文を2周巡らせている。複合口縁部の稜には殆ど意識が向けられていない。暗橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。甕もしくは甕602はやや薄作りの複合口縁外面がカーブし、その端部は厚くなつて面を持つ。複合口縁部の稜は口縁の延長に伸びている。暗橙褐色の胎土には2mm程の長石、石英等をよく含む。鼓形器台603は厚めの受け部外面が強くカーブしており、擬回線

文が施されている。その端部は肥厚して丸く収まる。受け部の稜は甕同様下方に突出している。内側はヘラケズリの後ミガキか、ナデが施されていると思われるが風化のため不明である。淡茶褐色の胎土には2mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台604は脚部外面がカーブしており擬四線が施されている。端部は肥厚してやや面を持って収まる。脚稜部はつまみ出されたかのように突出している。暗茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英、黒色砂粒等を含む。鼓形器台605は短い脚部の外面が屈曲して、そこに擬四線文が施されている。淡黄色の胎土には2mm程の長石、石英等を含む。低脚杯606は低く小さい脚が付いている。淡黄色の胎土には1mm以下の中石、石英等を含む。おそらく後の流れ込みと思われる。とすると加工段18の物か、その先の調査区外に塩津5期の遺構が存在する可能性も出てくる。甕もしくは壺の底部607は完全な平底を呈し底径5.5cm程になる。暗橙褐色の胎土には2mm程の長石、石英等を含む。

以上の遺物を見たところS I 21の廃棄時期は塩津1期と思われる。

#### S I 22～S I 25周辺遺構配置概要（第158図）

竹ヶ崎跡の西側調査区北側は、弥生時代の竪穴住居跡が切り合って検出されており、切り合いで新旧関係は古い方からそれぞれ次の通りである。（S I 22）→（S I 23）・（S I 24）→（S I 25）

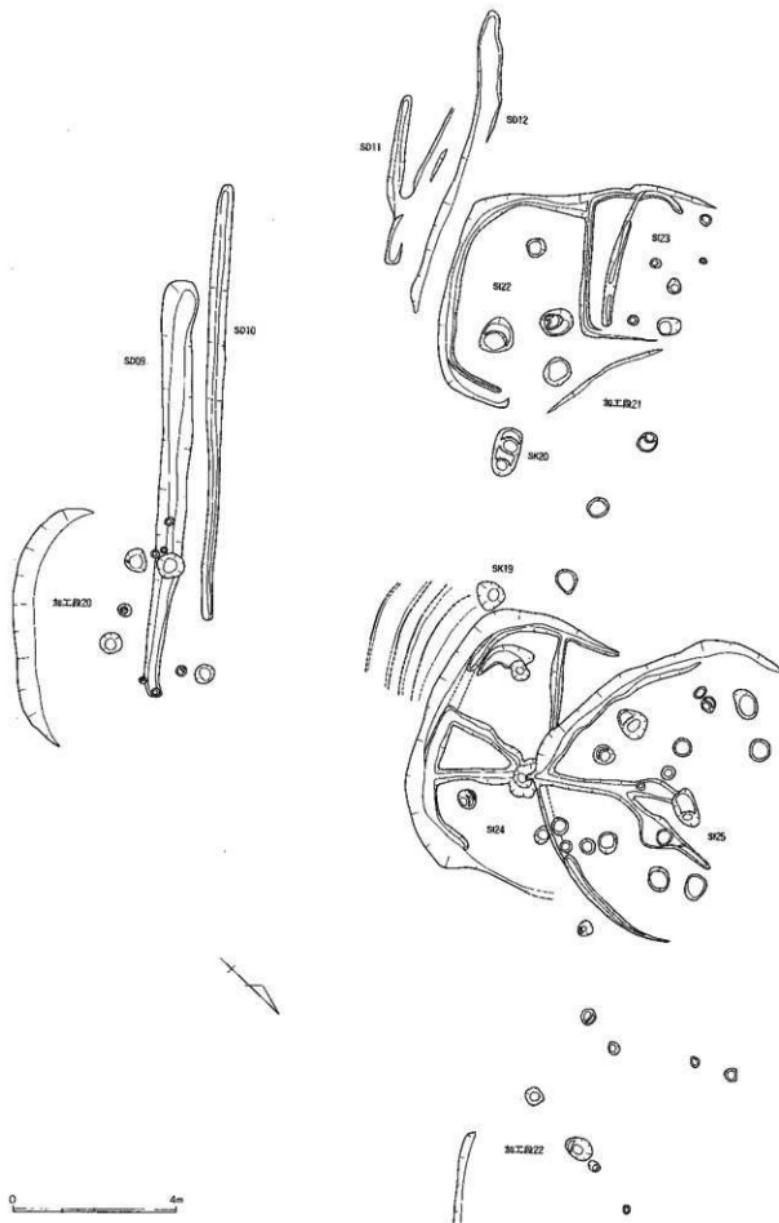
また、S I 23は軸をずらせて建て替えがあったものと思われる。S I 25の北側は古墳時代と思われるビットによって搅乱を受けており、何らかの建物が建っていた可能性が考えられる。また、遺構外の遺物にも須恵器などが混ざっており（第184図）、このことの裏付けになるものと思われる。なお、ビット内の遺物は、S I 24遺物出土状況（第165図）を参照していただきたい。加工段20の北側半分は近世に削平を受けている。また、SD 09・10が削平によって出来た段と平行して伸びている。それでは以下、それぞれの遺構、遺物を見ていきたい。

#### 加工段20（第159図）

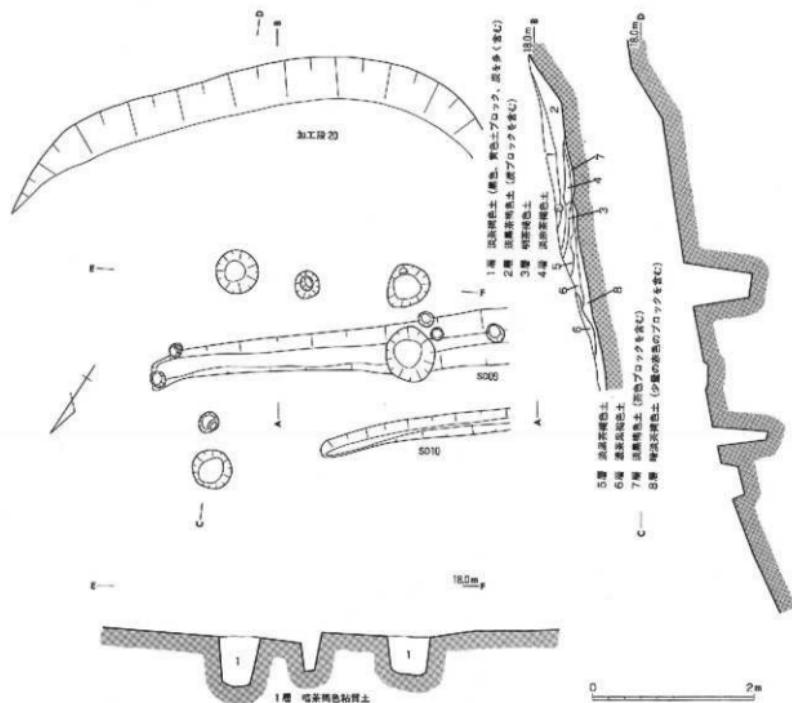
竹ヶ崎跡西側調査区のほぼ中央に位置し、北側にS I 22～S I 25がひしめき合っている。遺構の北側半分は近世に受けた削平により失われているが、南側の壁が残っている。壁の長さは7m程あり、丸い隅を持つ。壁の立ち上がりは緩く、溝状遺構は伴わない。全体にはんやりとした造りである。壁際から2m離れて径50cm程のビットが掘り込まれており、竪穴住居跡の可能性も考えられる。SD 09との新旧関係は土層図（A-B）により、SD 09の方が新しいと分かる。

加工段20遺物出土状況（第160図） 壁際の床面から弥生時代終末期の甕、注口等が出上しており、壁から少し離れたところで土器の堆積が見られた。そのうちの床面出土遺物は甕、鼓形器台、低脚杯等で、構成されている。

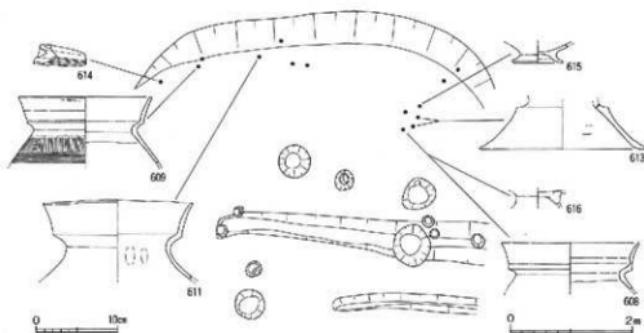
加工段20出土遺物（第161図） 甕608は緩く外反する複合口縁の端部が先細りしながら丸く収まるもので、複合口縁部内側に強いナデによる窪みが出来ている。淡橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。甕609は真っ直ぐ伸びる複合口縁の端部が丸く収まっている。外面調整は、口縁部ヨコナデ、肩部タテハケの後平行線文を施す。淡橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。甕610は直立気味に開いた複合口縁の端部を外側に丸くつまみ出しており、複合口縁部の稜は鈍く水



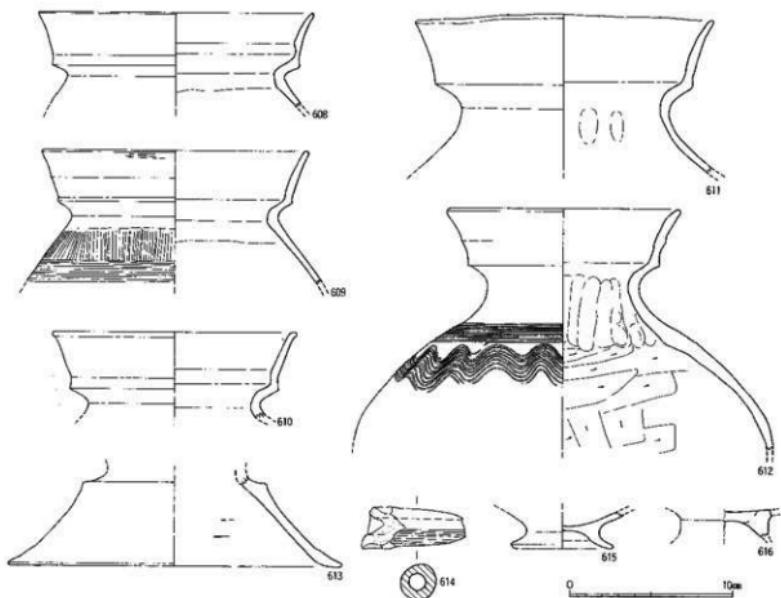
第158図 竹ヶ崎遺跡 S 1 22～S 1 25周辺構配図 S = 1 / 120



第159図 竹ヶ崎遺跡加工段20実測図  $S = 1/60$



第160図 竹ヶ崎遺跡加工段20遺物出土状況  $S = 1/80$

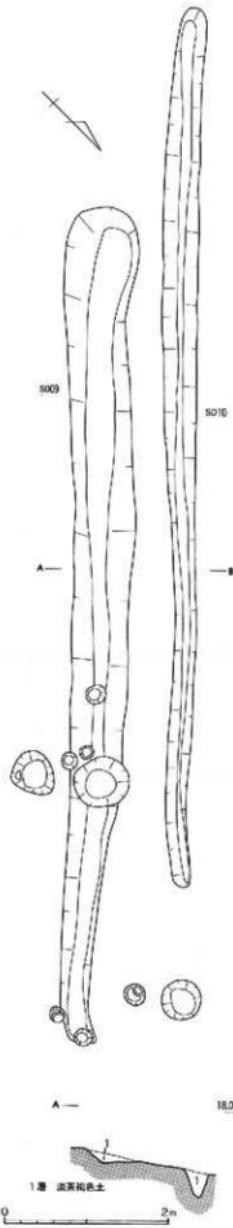


第161図 竹ヶ崎遺跡加工段20出土遺物実測図 S = 1/3

平方向に突出する。淡橙褐色の胎土には、1mm以下の長石、石英等を含む。壺611は軽くカーブしながら開く薄作りの複合口縁端部を丸く収めており、複合口縁部の稜には若干の突出が認められる。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。壺612はやや厚めの複合口縁の端部を丸くつまみ出しているもので、複合口縁部の稜は水平を意識してはいるがさほどの突出は無い。肩部には平行線文と波状文が丁寧に施されている。頸部内側には頸部形成時に付くと思われる指押さえの痕が残る。淡茶色の胎土には1~3mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台613はやや厚めの脚端部が短く屈曲している。明橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英、赤色土粒等を含む。注口614は全体に縱方向のヘラミガキが施されており、外面はススが付着している。暗橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。低脚杯615は大きめの脚が低く付いており、安定感がある。暗黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。低脚杯616はやや大きめの脚が高めに付いており、その接合には円盤充填法が取られている。淡黄褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。以上の遺物を見たところ加工段20の廃棄時期は塩津5期と思われる。

#### S D09・10 (第162図)

加工段20を東西に切って、近世削平段に平行して真っ直ぐ伸びる溝状造構で、それぞれ規模は、S D09が全長10m、幅80cm、深さ10cmあり、S D10が全長11m、幅40cm、深さ30cmある。ここからの出土遺物が無いため造構廃棄時期は不明としかいいようがないが、敢えて言うならば、近世の可能性が高いと思われる。しかし、後述するS D11・12もやや重みながらもS D09・10に平行して伸びて



第162図 竹ヶ崎遺跡 S D09・S D10実測図

おり、弥生時代後期の遺物を伴っているので一概には時期の決定は出来ない。

#### S I 22・23、S D11・12 (第163図)

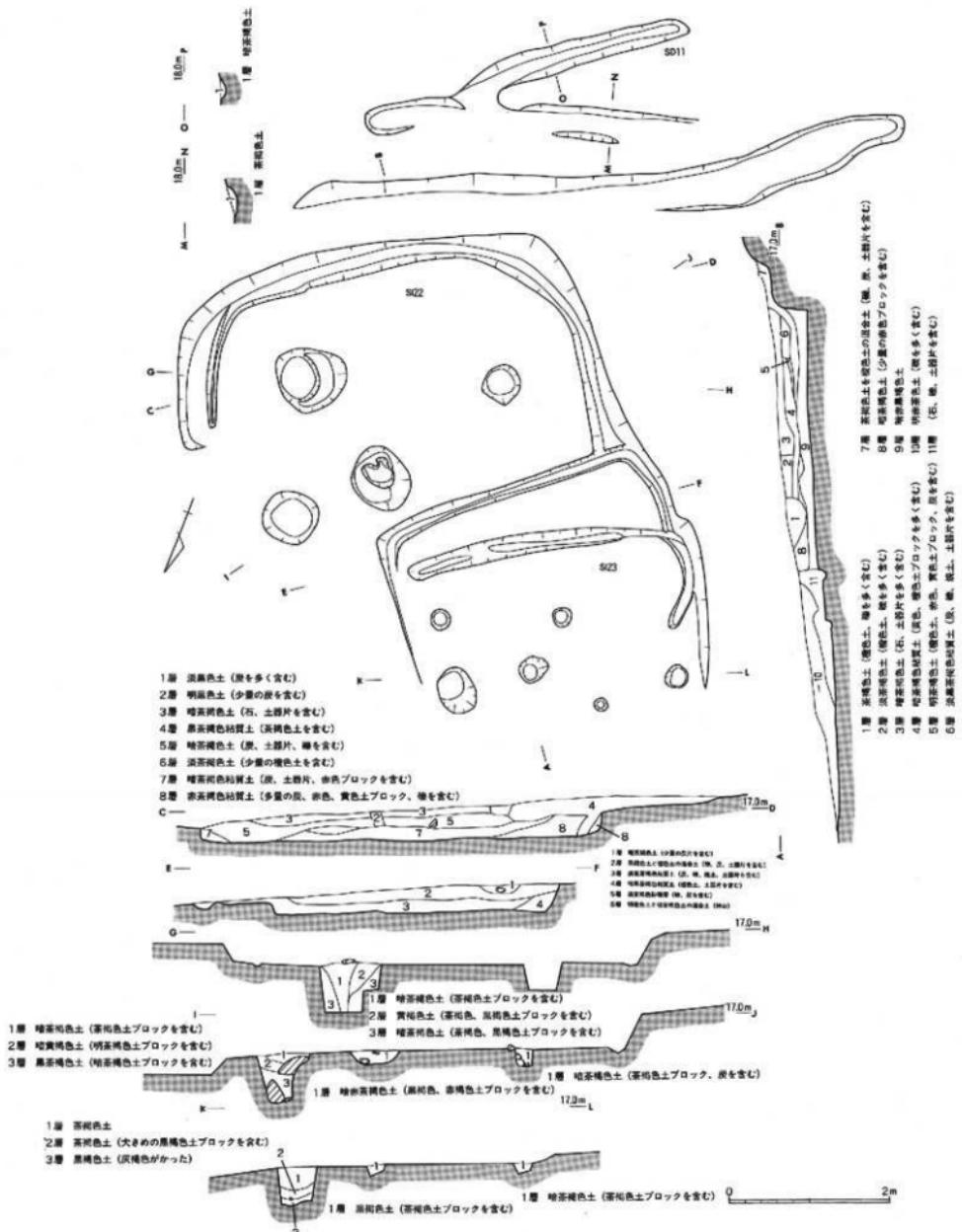
竹ヶ崎遺跡西側調査区の北寄りに位置し、東にはS I 24・S I 25が隣接している。

**S D11・12** S D11は二股に分かれる幅40cm程の溝状遺構で、S D12はS I 22に隣接する幅60cm程の溝状遺構である。この二条の溝状遺構は、前述したS D09・10と共に近世削平段と平行するように伸びている。しかし、S D09・10が近世削平段に寄り添うように真っ直ぐ伸びているのに対して、S D11・12は少し距離を置いてやや歪みながらも平行して伸びており、S D09・10とは多少なりとも性質の異なる遺構と認識したい。また、S D11・12はS I 22の外周平坦面、及び外堤の可能性も考えられるが、S I 22の壁には沿わないで西に流れおり、断言するには至らない。

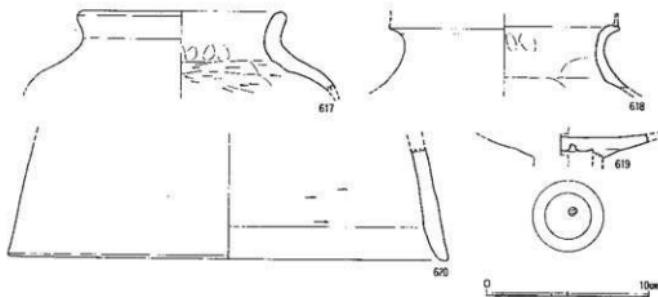
**S D11・S D12出土遺物(第162図)** 単純口縁の壺617は厚い口縁の端部を丸く収めており、明橙褐色の胎土には2mmほどの長石、石英、赤色土粒などを含む。壺の頸部618は淡灰白色の胎土に1mm程の長石、石英等を含む。高杯619は径2.8cmの円盤中央からややずれて径6mm程の穿孔が成されており、淡黄褐色から淡赤色を呈す胎土に1mm程の長石、石英、金雲母などを含む。620はコシキ形土器の広く開く口縁と思われ、口縁内側は端部の手前1cm程の所で屈曲して先細りに端部に至っており、端部は面を持っている。黒褐色の胎土の外面は淡黄色を呈し、1mmから2mm程の長石、石英等を含む。以上の遺物を見たところ、壺は5世紀以降のものと思われるが、その他の遺物は塩津5期にはいるので、遺構の廃棄時期は塩津5期と思われる。

**S I 22 (第163図)** S D12と隣接して北側に位置する隅丸方形の竪穴住居跡で、壁際には幅20cm程の整体溝が巡っている。規模は整体溝の内側で約4m程になる。床面には直径50cmから70cm、深さ70cm程のビットが4穴開くが、ややいびつな配置を見せている。ビットの中には径50cm程の石を含むものもあり、地山からも同様の石が検出されている。なお、S I 23とは切り合い関係にあり、新旧関係は土層図(A-B)より、古い方から(S I 22)⇒(S I 23)となる。

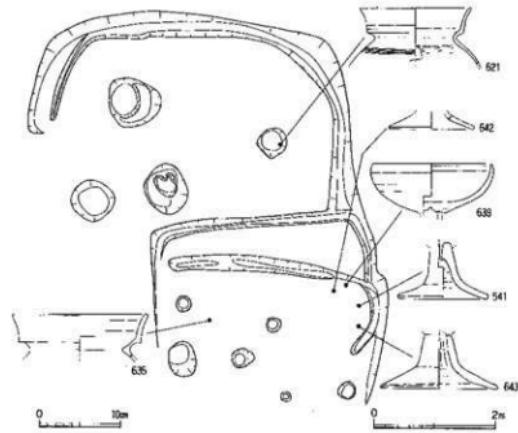
S = 1/60



第163図 竹ヶ崎遺跡 S I 22・S I 23・S D 11・S D 12実測図 S = 1/60



第164図 竹ヶ崎遺跡 S D11~S D12出土遺物実測図 S = 1 / 3

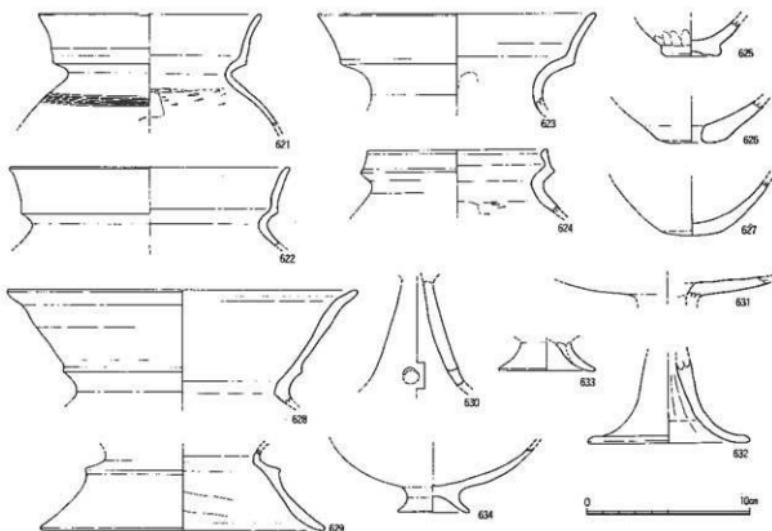


第165図 竹ヶ崎遺跡 S I 22・S I 23出土遺物実測図 S = 1 / 80

S I 22遺物出土状況（第165図）  
ピット内から壺621が潰れた状態  
で出土している。

S I 22出土遺物（第166図）  
壺621はやや薄作りの複合口縁が  
軽く外反しており、その端部は  
丸く収まる。肩部には平行線文  
が施されている。淡灰白色の胎  
土には1mm程の長石、石英等を  
含む。壺622はやや直立気味の複  
合口縁の端部が外側につまみ出  
されているもので、その端部は  
丸く収まる。淡黄白色の胎土に  
は、1mm程の長石、石英等を含  
む。

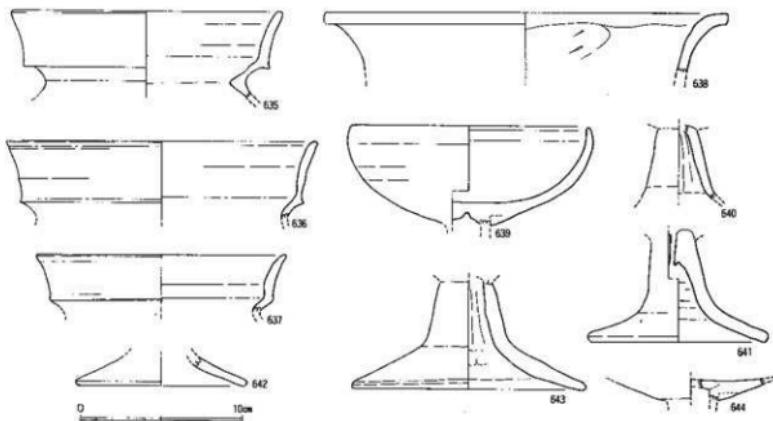
んでいる。壺623はやや薄作りの複合口縁が、緩くカーブしながら外側に開いており、端部には若干のつまみ出しが見られる。淡茶褐色の胎土には1mm以下の長石、石英、金雲母などを含む。内傾する壺624は口縁立ち上がり長が1.2cm程しか無く、その端部は外側につまみ出されている。複合口縁部の稜はやや鈍く水平方向に突出している。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。625は脚杯の鉢であろうか、脚の内側には指状の調整による窪みが見られる。淡茶褐色のきめの細かい胎土には1mm程の長石、石英等を含む。壺、または壺の底部626は径3cm程の平底に1cm程の穿孔が成されており灰白色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。壺、または壺の底部627はやや平底を留めてはいるがほぼ丸底である。外面は黒斑に覆われているがスヌの付着は見られない。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台628はやや厚めに伸びる受け部の端部が弱くつまみ出されており、その先端は丸く収まる。受け部の稜は小さいながら鋭く突出している。筒部内側には面を持つが明瞭ではない。淡茶白色のきめ細かい胎土には1mm以下の長石、石英、金雲母などを含む。鼓形器台629の脚部は大きく開いており、端部は先細りしながら丸く収まる。脚部の稜は水



第166図 竹ヶ崎遺跡 S I 22出土遺物実測図 S = 1 / 3

平方向に突出しており、稜の下部を強く撫でることで稜を強調している。淡黄白色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯630は上端部が先細りしており、剥離している端部は丸く收まる。脚部近くには3若しくは4方向の円形の透かしが穿孔されており、淡黄白色の胎土には1mm程の長石、石英と、3mm程の白色土粒が含まれている。他地域の影響を色濃く受けていると思われる。高杯631は円盤充填部が剥離しており、淡黄白色の胎土には1mm程の長石、石英、金雲母等を含む。高杯の脚632は裾部が短くその端部は丸く收まる。淡橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。低脚杯633はやや高めの脚部で裾は余り開かない。淡茶色のきめ細かい胎土は鼓形器台628とよく似ている。1mm程の長石、石英等を含んでいる。低脚杯634は薄作りの深い受け部と、小さく余り裾の開かない脚部を持っており、淡茶白色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。以上の遺物を見たところS I 22の廃棄時期は塩津5期と思われる。

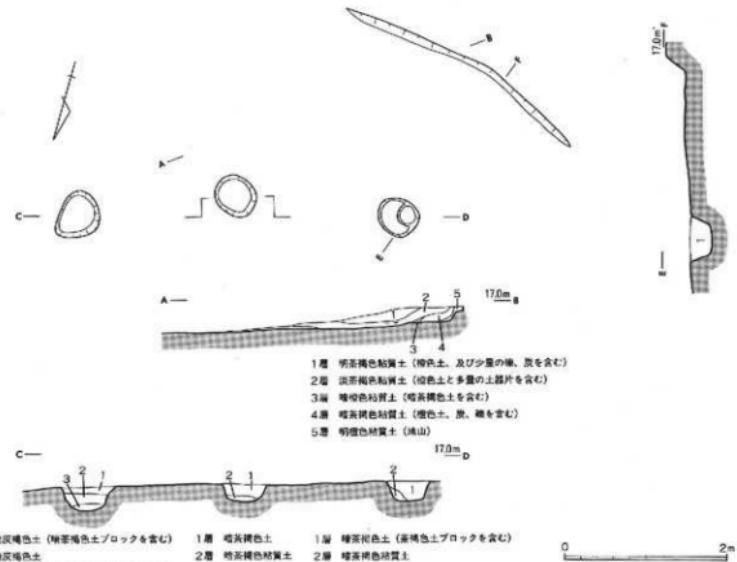
S I 23(第165図) S I 22と切り合っており、その新旧関係は土層図(A-B)により、S I 23の方が新しいと思われる。形態は方形の竪穴住居跡と思われる。規模は、一辺3.5m程あり、壁際には幅10cm程の壁体溝と思しき溝が巡っている。S I 23は軸を変えて一度建て替えを行っているのが内側に巡る溝で分かるが、上層図でその関係を追うことは出来なかった。しかし、土層図(A-B)の10層を見ると不自然な堆積をしており、可能性として南側の建物を北側に建て替えたと考えられる。床面からは径20cmから50cm程のピットが検出されてはいるが、いびつな配置をしている。覆土からは炭化物が出土しているが床面には焼土は無い。



第167図 竹ヶ峰遺跡S I 23出土遺物実測図 S = 1 / 3

S I 23遺物出土状況（第165図） 内側の溝の側に5世紀頃の高杯が固まって出土している。また、東側の床からは弥生時代後期の甕が出土している。

S I 23出土遺物（第167図） 甕635はやや厚めの複合口縁が軽く外反しており、その端部は丸く収まる。複合口縁部の稜は口縁に沿うようにやや下方に突出している。頸部内側は突出しており稜を成す。淡黄白色の胎土には2mm程の長石、石英等を含む。甕636はやや厚めの複合口縁が直立気味に開いており、その端部は若干外側につまみ出され、端部直下に一条の沈線を造らせることにより、端部の強調を試みているものと思われる。複合口縁部の稜は水平方向を意識して鋭く突出している。淡灰白色の胎土には1mm程の長石、石英、黒雲母などを含む。甕637は短い複合口縁の端部が外側に強くつまみ出されており、その端部は先細りしながら丸く収まる。複合口縁部の稜はその上部を撫でることにより、稜を強調している。淡茶色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。638は器種不明の口縁と思われ、強く屈曲する口縁の端部は幅6mmの面を持つ。内側は屈曲部以下にヘラケズリが施されている。淡茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。高杯639は深い杯部を持ちやや内湾気味に立ち上がる端部は丸く収まる。脚の接合点には径3mm程の穿孔が成されている。明橙褐色の胎土には3mm以下の長石、石英等を含む。高杯の脚640は差込式で、上端部は丸く収まる。脚内側はシボリ目が見られる。淡橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。高杯の脚641は脚高7cm、底径11cm程あり、脚の中心をすれて軸孔の穿孔がされる。淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯の脚642は底径が10cm程のやや潰れた器形をしており、淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯643は脚高7cm底径14cm程の裾広がりの器形をしており、上端部の剥離痕は丸く収まる。高杯の杯部644は脚の差込部分が剥離している。暗橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。以上の遺物を見たところ遺構の廃棄時期は古墳時代中期頃と思われる。



第168図 竹ヶ崎遺跡加工段21実測図 S=1/60

#### 加工段21（第168図）

S I 22・S I 23の北側に接する加工段で、その壁は流れてはいるが、3.5m程残っている。壁際には溝状の造構は伴わない。壁から2m程離れて径50cm、深さ20cm程のビットが3穴並んで掘り込まれている。

加工段21出土遺物（第169図） 単純口縁の甕645はやや厚めの口縁が直立気味に開きその端部は丸く收まる。暗茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。造構の廃棄時期は不明である。



S K 19（第170図）

第169図 竹ヶ崎遺跡加工段21  
出土遺物実測図 S=1/3

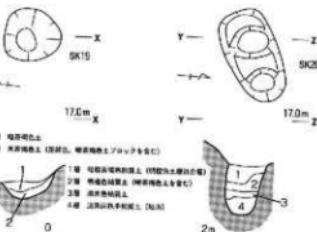
S I 24の南側で検出された径70cm程の円形土坑である。

S K 19出土遺物（第171図） 645は器台の受け部と思われ、器壁は厚さ1cm以上あり、端部に下向きの逆刺を持ち、強いナデを施す。淡茶褐色の胎土には3mm程の大粒の長石、石英、赤色土粒等を粗く含む。いわゆる北陸系の土器の影響を強く受けていると思われる。塙津2期に平行すると思われる。高杯647はやや内湾気味に立ち上がる深い杯部を持ち、脚接合部には軸孔の痕跡を留める。暗橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。古墳時代中期のものと思われる。S K 19出土遺物は時期的に共存出来ず、造構の廃棄時期は不明である。

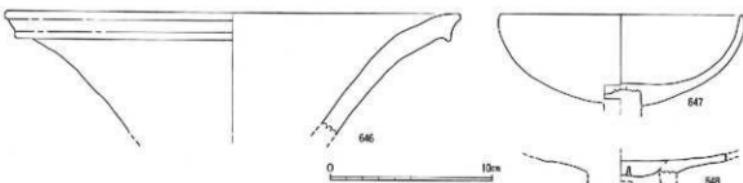
### S K 20 (第170図)

S I 22の北側で検出された1.2m×70cmの土坑で  $w-x$  SK19  
深さは60cm程ある。

S K 20出土遺物(第171図) 高杯648は浅い杯部に  
径3cm程の円盤充填が為されており、円盤部には  
軸孔が穿孔されている。淡黄褐色の胎土には1mm  
程の長石、石英等を含む。塙津5期のものと思わ  
れる。しかし、これだけでは時期決定の資料とし  
ては乏しく、遺構の廃棄時期は不明としておくし  
かない。



第170図 竹ヶ崎遺跡SK19・SK20実測図  
 $S = 1/6$



第171図 竹ヶ崎遺跡SK18・SK19出土遺物実測図  
 $S = 1/3$

### S I 24・25 (第172図～173図)

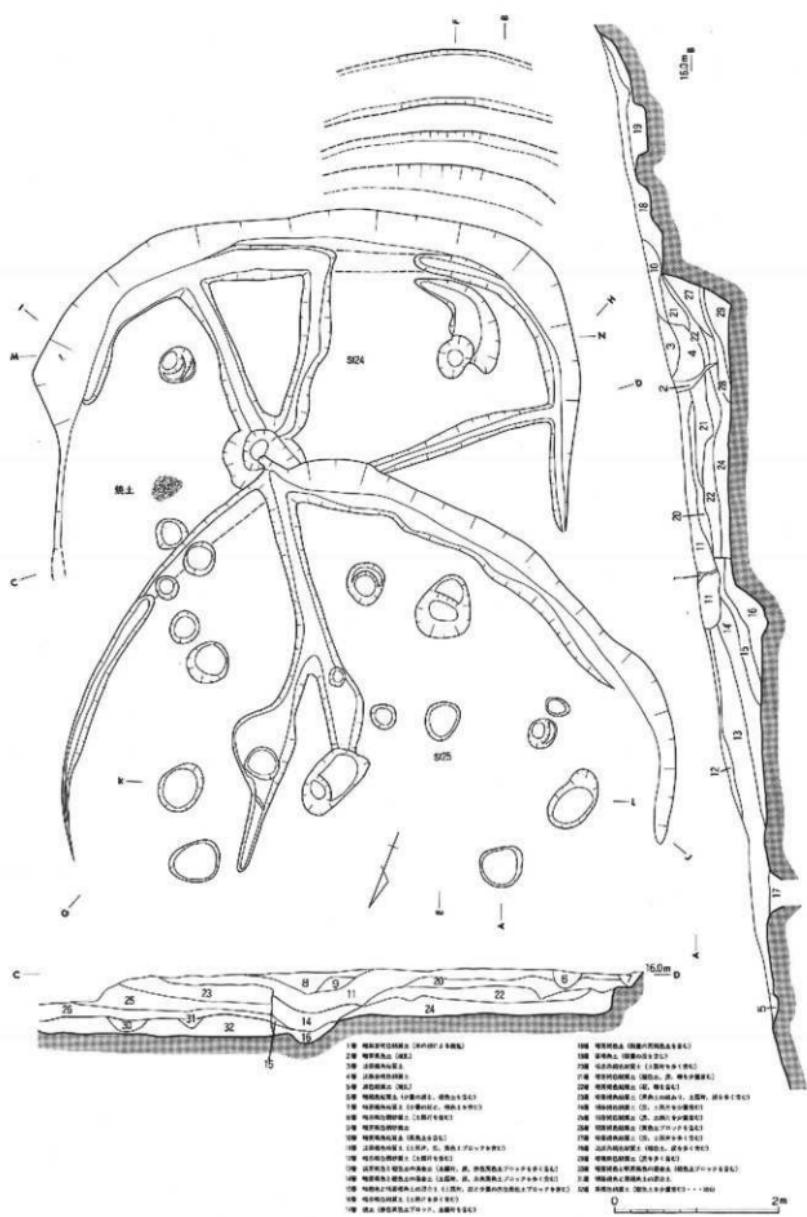
西側調査区の北側で検出されている弥生後期の竪穴住居跡で、2棟が重なり合って検出されており、2棲の新旧関係は(S I 24) ⇒ (S I 25) となっている。また、S I 25は古墳時代中期に搅乱を受けていると思われる。

S I 24(第172図～173図) S I 22、加工段20等と隣接しており、隅丸方形を呈す竪穴住居跡である。壁際には幅20cm～40cm程の壁体溝と思しき溝が巡っており、建物の規模は溝の内側で6m程になる。壁際から1m程内側に寄ったところに径50cm深さ50cm程の主柱穴と思われるビットが2穴掘り込まれており、北側で切り合うS I 25の床面にもS I 24に伴うと思われるビットが2穴あるため、S I 24は4本の主柱穴を持つと思われる。床面中央東よりに掘り方が不定形な2段堀の、いわゆる中央ビットが掘り込まれており、中央ビットから壁際に放射状に壁体溝様な溝状構造が伸びている。床面東寄りには焼土が見られるが、おそらくは火を使用した作業の痕と思われる。住居の南側には幅60cm、深さ20cm程の外周溝が巡っており、内側には外堤、外周平坦面が伴っているのが土層図(A-B)に認められる。

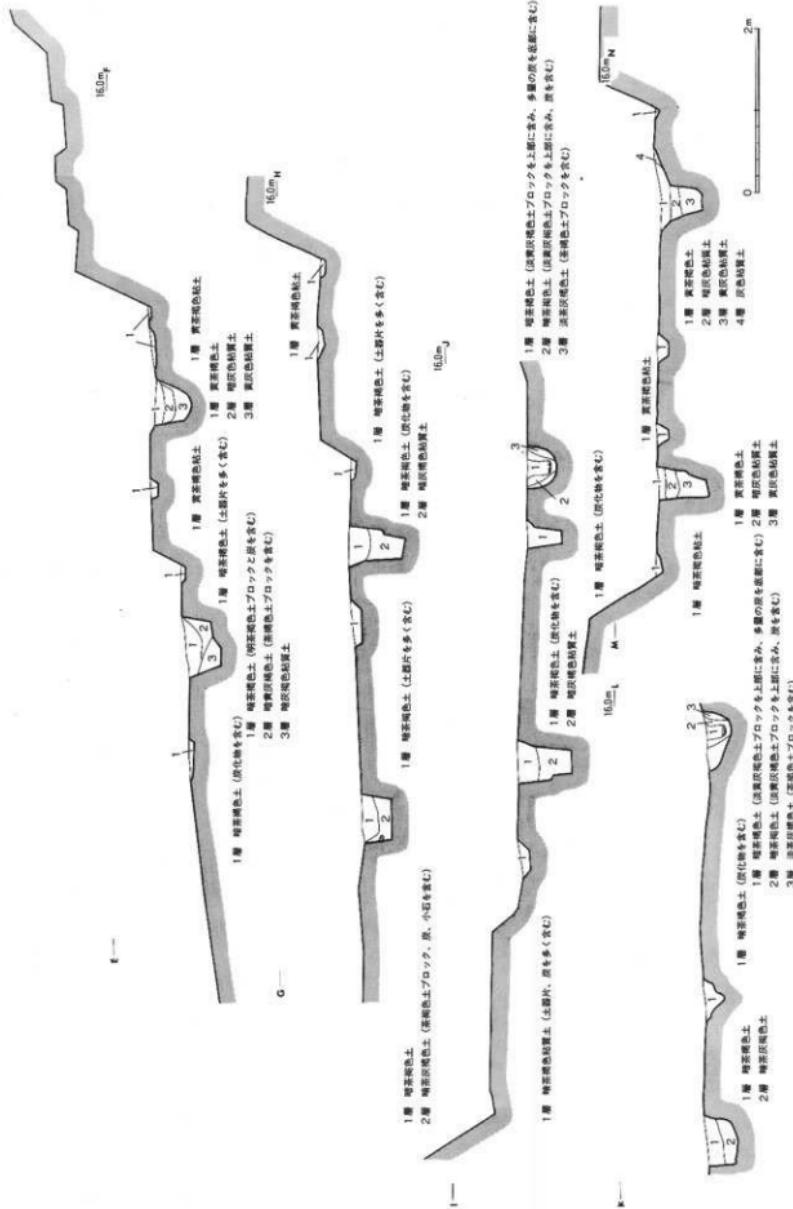
S I 24遺物出土状況(第174図) 中央ビットの近くと壁際から遺物が出土している。

S I 24出土遺物(第175図～176図) 壺649は薄作りの複合口縁がその中ほどより屈曲しており、端部は先細りして丸く収まる。複合口縁部の稜は強く水平方向を意識して観く突出している。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。壺650はやや厚めの複合口縁が緩くカーブしながら開い

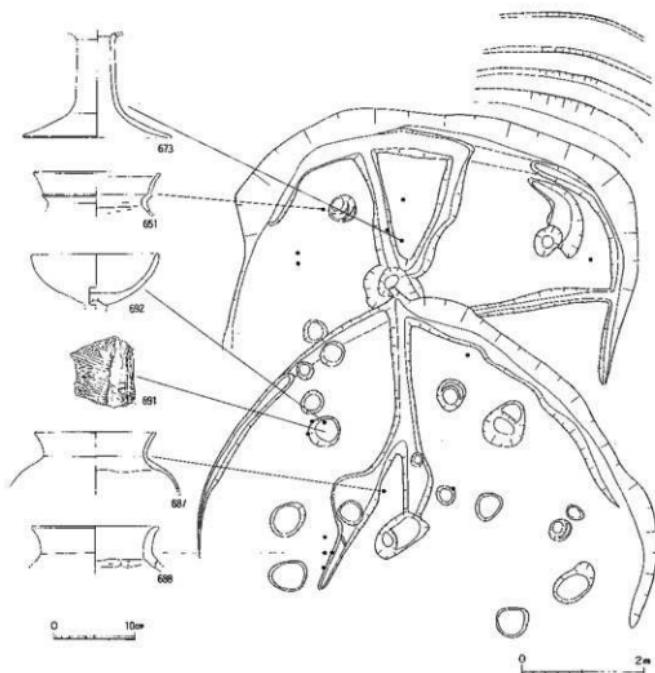
ており、その端部は先細りしている。複合口縁部の稜は水平方向に突出している。淡黄白色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕651はやや厚めの複合口縁が直立気味に立ち上がり、その端部は丸く収まる。複合口縁部の稜はその上部に強めのナデが施されており、稜の形成時のものと思われる。明橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕652は直立気味に立ち上がる複合口縁を持ち、その端部は先細りしながら面を造る。複合口縁部の稜は水平方向を意識して突出している。淡茶色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。小型の甕653はやや厚めの複合口縁が短く立ち上がっており、その端部は丸く収まる。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕654はやや厚い複合口縁が直立気味に立ち上がり、その端部は面を持っている。複合口縁部の稜は水平方向を意識して突出している。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕655は肉厚の複合口縁が直立気味に真っ直ぐ伸びておりその端部には明瞭な面を持つ。端部の内側には強いナデが施されている。外面淡黄白色、内面淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。大型の甕656は肉厚の複合口縁が直立気味に伸びており、その端部には面を持つ。淡黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。甕の口縁657は厚い複合口縁が短く立ち上がっており、その端部には広い面を持つ。複合口縁部の稜はその上部を鋭い工具によりナデ残すことにより表現されている。端部内側は2周のナデで調整されており、暗茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。甕、若しくは壺の口縁658は直立気味に立ち上がる複合口縁の端部に面を持つ。複合口縁部の稜はその上部を大きくナデられており稜の突出は鈍い。淡茶橙色の胎土には1mmほどの長石、石英、赤色土粹などを含む。小型の甕659はやや厚めの単純口縁が大きく開いており、その端部は丸く収まる。内側は、頸部以下を右方向のヘラケズリで調整している。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。単純口縁の甕660はやや厚めの口縁が内湾気味に開いており、その端部に若干の面を持つ。内側の調整には頸部より若干下がったところからヘラケズリが右方向に施されている。淡灰白色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。他地域の影響を強く受けていると思われる。甕、または壺の底部661は径5cm程の平底を持ち、体部は丸く立ち上がる。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英、金雲母などを含む。注口662は全長9cm程あり淡黄白色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。大型の壺の頸部663は内傾する口縁を持ち、淡灰色の胎土に1mm程の長石、石英等を含む。コシキ形土器の取っ手664は高さ5cm、幅4cm程の大きさで、断面形は扁平を呈しており、厚みは1.5cm程である。淡茶褐色の胎土には1mmの長石、石英等を含む。横向きに取り付けられるものと思われる。コシキ形土器の取っ手665は取っ手664に比べ、幅が狭く3cm程である。淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。幅は違うが、その他の点で類似しております。おそらくは取っ手664と対を成すものと思われる。鼓形器台666は筒部が発達しており、黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。鼓形器台667は受け部の端部内側に強いナデによる窪みを持つ。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台668は直立気味に開く受け部を持っており、その端部は緩やかに外反した後に丸く収まる。筒部内側は稜を持つ。淡橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台669は受け部の端部が短く外反し、その端部は丸く収まる。暗茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台670は、短く伸びる受け部の端部がやや外反しながら立ち上がるもので、筒部の内側には面を持つ。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。鼓形器台671は短く立ち上がる受け部の端部が肥厚しており、若干外につまみ出されている。大型高杯の杯部672はやや深く作られており、緩やかなS字を描いて端部まで至る。端部は面を持っている。暗茶褐色の胎土には2mm以下



第172図 竹ヶ崎跡跡 S124・S125実測図 S = 1/60

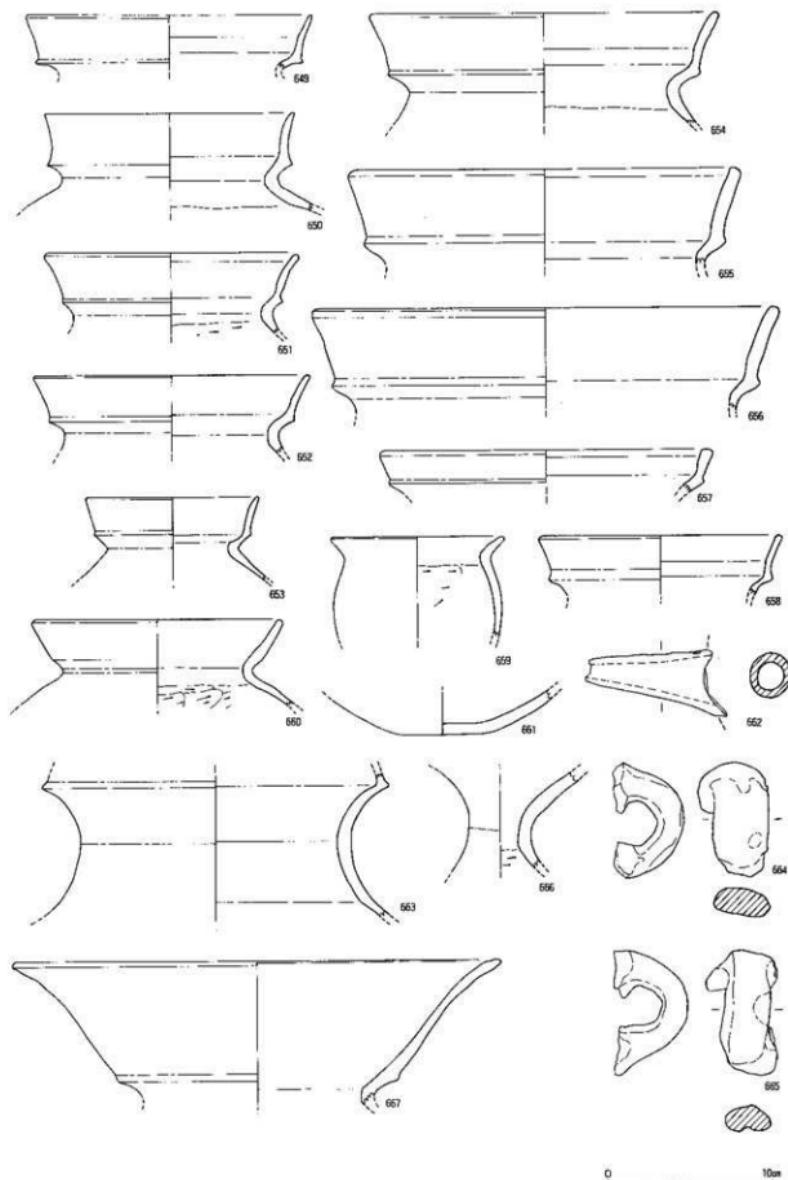


第173図 竹ヶ崎遺跡 S 124・S 125土層断面図 S = 1/60

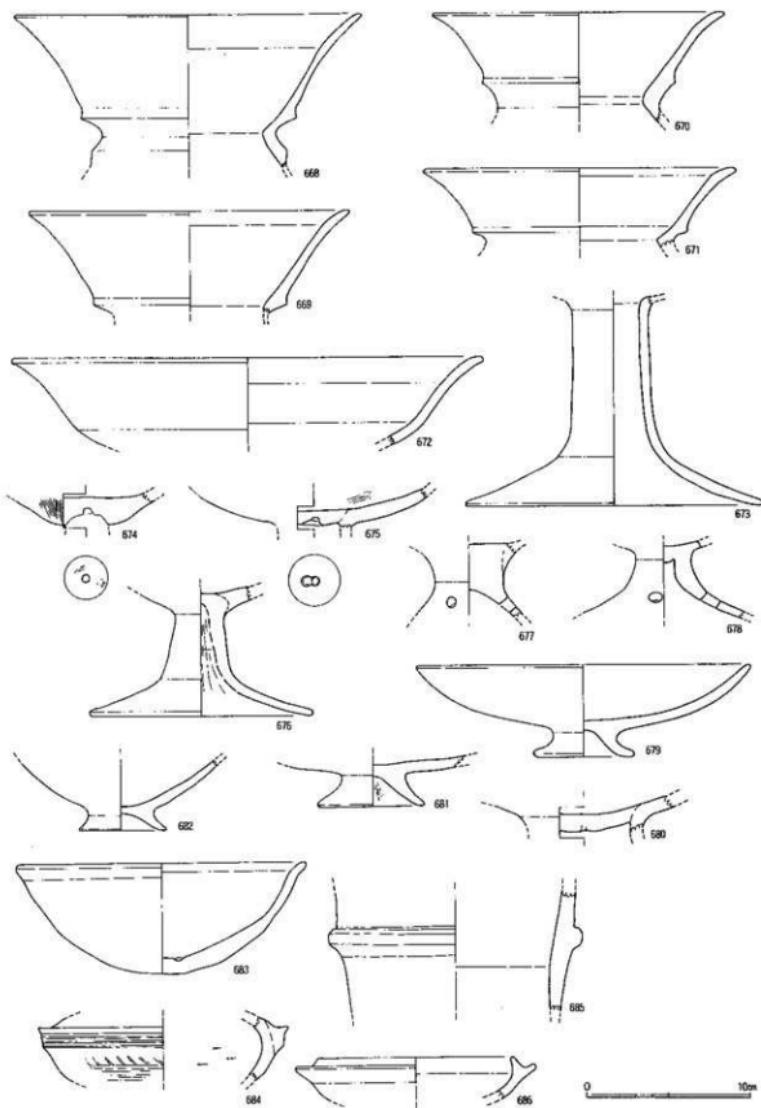


第174図 竹ヶ峰遺跡 S 1 24・S 1 25遺物出土状況 S = 1 / 80

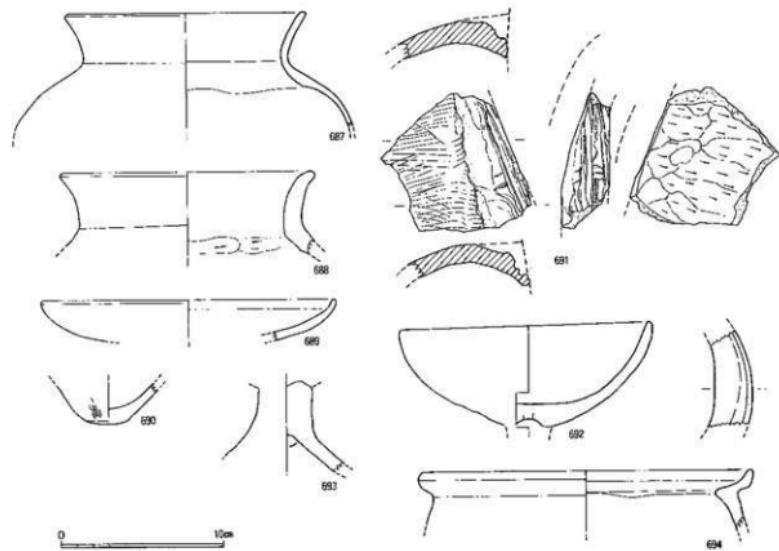
の長石、石英等を含む。大型高杯の脚673は高い脚高と広く開く裾部を持ち、筒部径は5cm程ある。淡茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。高杯674脚部の剥離面に軸孔の痕跡が2つ認められており、暗橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯675は径3cm程の円盤充填部の中央に軸孔を持ち、少しずれたところにも、軸孔の痕跡が認められる。高杯の脚676は低い脚高を持ち、裾部は潰れて広がっている。暗橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英、白色土粒等を含む。高杯677は脚差込方式で接合されており、脚部の内側は丁寧に撫でられている。脚部には3カ所の透かし穴が開く。暗橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯678は低く開いた脚部を持ち、裾部には3カ所の透かし穴が穿孔されている。脚接合部内側には径1.2cm程の棒状工具を差込んだ痕跡が見られる。淡黄白色のきめの細かい胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。低脚杯679は口径21cm、底径6cm、器高5.5cm程あり、やや厚めの杯部は端部が丸く収まる。脚部は低く、裾が広がらない。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。脚部680は径5cm以上ある円盤により充填されており、充填部中央には軸孔の穿孔が見られる。淡橙褐色の胎土には1mm以上の長石、石英等を含む。低脚杯681はやや高い脚を持つ。外面淡赤褐色、内面淡黄色の胎土には1mmほどの長石、石英、赤色土粒などを含む。低脚杯682は深い杯部を持ち、低い脚部は、裾部が余り開かない。淡黄褐色の胎土には1mmほどの長石、石英等を含む。鉢683は口径18cm、器高7cmほどあり、厚い底部から徐々に薄く立ち上がっており、口縁端部は外側につまみ出されており、丸く収まる。底部に



第175図 竹ヶ崎遺跡 S I 24出土遺物実測図 (1) S = 1 / 3



第176図 竹ヶ崎遺跡 S-24出土遺物実測図(2) S=1/3



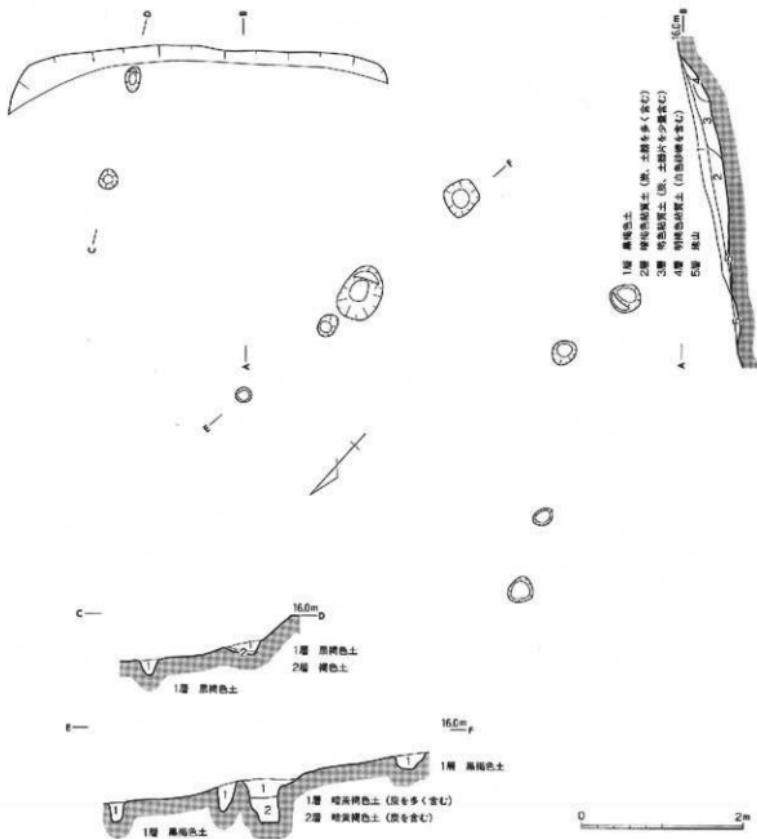
第177図 竹ヶ崎遺跡 S I 25出土遺物実測図 S = 1 / 3

は若干の平底が残っている。底部内側には径2.5cmの円形の窪みがあり、あたかも棒状の工具で押さえられたかのようである。淡茶褐色の胎土には一部赤彩痕が残っている。1mm程の長石、石英等を含む。壺の体部684は副部最大径に上端の発達した台形を呈す突帯を巡らせており、3条の平行線文を施している。突帯の下には二枚貝によると思われる左上がりの刺突と、その下に平行線文を施す。暗茶褐色の荒い胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。円筒埴輪685は台形の突帯を巡っており、淡黄褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。須恵器杯686は受け部端部径15cm、立ち上がり径12cm程で、立ち上がりは短く若干内傾する。以上の遺物を見たところ、後世の遺物も混じっているが、S I 24の遺構廃棄時期は塩津5期と思われる。

#### S I 25 (第172図~173図)

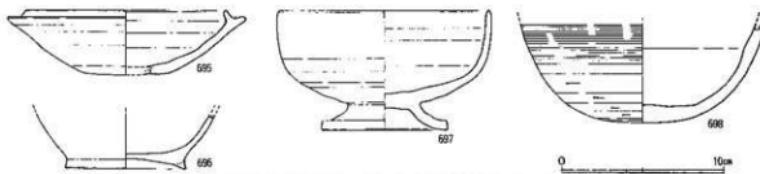
西側調査区の北側に位置し、前述したS I 24とは切り合い関係にある。北側の一部が流れているが、形態は隅丸方形の豊穴住居跡で、一辺6m程あり、壁際には壁体溝様な溝が巡る。壁際から1.5m程内側に寄った床面に径50cm、深さ20cm程の主柱穴と思われるピットが浅く掘り込まれている。床面中央から北側に寄ったところには、いわゆる中央ピットが楕円形を呈して浅く二段に掘り込まれている。この中央ピットには壁の南東隅から幅30cm程の浅い溝が伸びている。

**S I 25遺物出土状況 (第174図)** 遺物の出土量は少なく、遺物は主にピット内と溝際に集まっている。ピットから出土した高杯692は古墳時代中期のものと思われ、このピットは後の掘り込みと思われる。



第178図 竹ヶ崎遺跡加工段22実測図 S = 1/60

S 125出土遺物(第177図) 単純口縁の甕687は薄い器壁を持ち、直立気味に開く口縁の端部は丸く収まる。内側は頸部の少し下方からヘラケズリが施されている。暗橙褐色の荒い胎土には1mm程の長石を多く含む。肩部には広い範囲で黒斑が現れる。単純口縁の甕688は直立気味に立ち上がる厚い口縁を持ち、その端部は外側につまみ出されている。内側は、頸部以下にヘラケズリが施される。暗橙褐色のきめ細かな胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。甕689は浅い作りをしており、その端部は丸く収まる。淡黄色の胎土には1mmほどの長石、石英、金雲母等を含む。甕、または壺の底部690は径2cm程の平底を呈しており、外面に粗いハケメが施され、ハケメは底部にまで及ぶ。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英、茶褐色砂粒、赤色土粒などを含む。691はカマド、若しくは手



第179図 竹ヶ崎遺跡加工段22出土遺物実測図 S = 1/3

焙り形土器の一部と考えられ、剥離面には数状の溝が切られており、接合時の工夫の跡と思われる。体部外面には粗いハケ調整が施されており、内面にはヘラケズリが施される。茶褐色の緻密な胎土は堅く焼き締まっており、1mm程の長石、石英等を含む。高杯692は深く厚い杯部を持ち、その端部は丸く収まる。脚部との接合面は径2cm程になる。暗橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英等を含む。高杯の脚693は柱状脚の上端部剥離面に窪みを持ち、脚内側にはヘラケズリが施されており、その中心に8mm程の窪みを持つ。淡黄白色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。694は口縁部の幅が手前と奥とで違うことから、手焙り形土器の体部口縁と考えられる。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英、橙色土粒等砂粒を多く含む。

図化できた遺物はおそらくS I 25の床面に不規則に開いたビットに伴うものと思われ、弥生時代後期と、概ね古墳時代中期～後期のものと思われる。S I 25の遺物はコンテナ一箱程出土したがその内の大半を占める弥生上器は遺物の残りが悪く、図化に至らなかった。しかし、観察の結果、淡黄白色の胎土に1mm程の長石、石英等を含むものが多く、形態も、塩津5期の内に収まるものと思われ、S I 25の遺構廃棄時期は塩津5期として差し支えないものと思われる。

#### 加工段22（第178図）

S I 24・25に隣接する加工段で、南東に長辺5m程の壁が立ち、その北西床面には建物の配置が認められないビットが閉く。

#### 加工段22出土遺物（第179図）

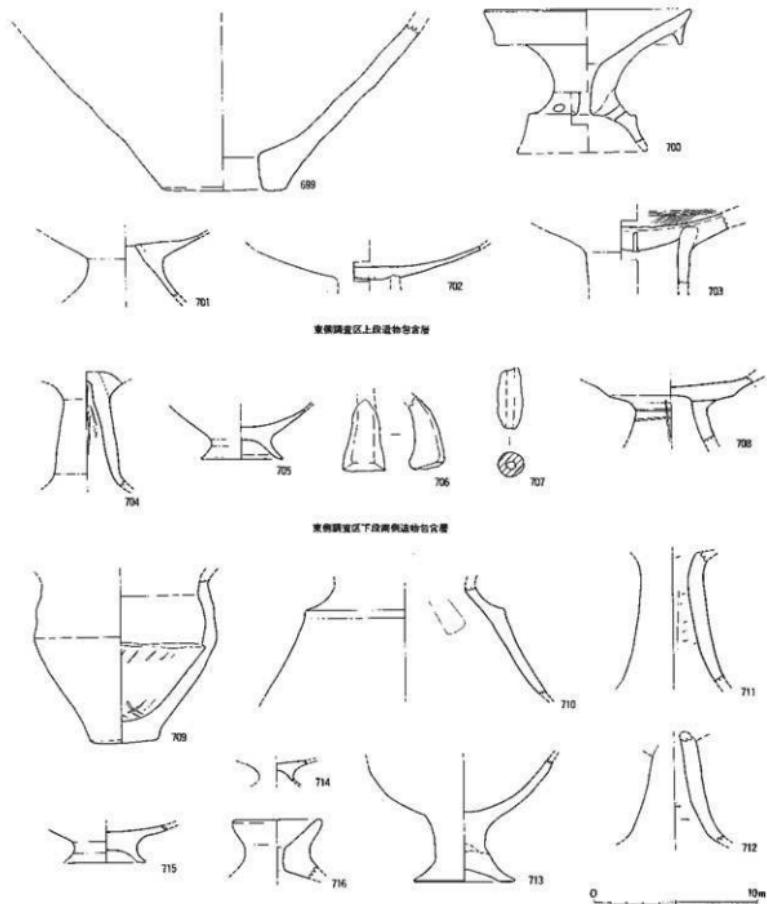
須恵器杯695の立ち上がりは内傾して短い。底部はヘラキリ後ナデ調整を施す。暗灰褐色の胎土を持つ。高台付き杯696は先細りして短い高台が開き気味に付き、暗橙褐色の胎土を持つ。須恵器低脚付き杯697は口径13cm底径7.8cm器高7cm程あり、深い杯部はその端部を丸く收める。脚端部は外側に向かう面を持ちその稜は鋭い。壺底部698は底部から3cm程あがった所までヘラケズリが施されており、体部にはカキメが入る。以上の遺物を見たところ、加工段22の遺構廃棄時期は古墳時代後期～末期のことと思われる。

以上竹ヶ崎遺跡における弥生時代後期を中心とした遺構及び遺物の説明を終わる。引き続いて同時期の遺構に伴わない遺物をかいづまんで述べることとする。

## 遺構に伴わない遺物

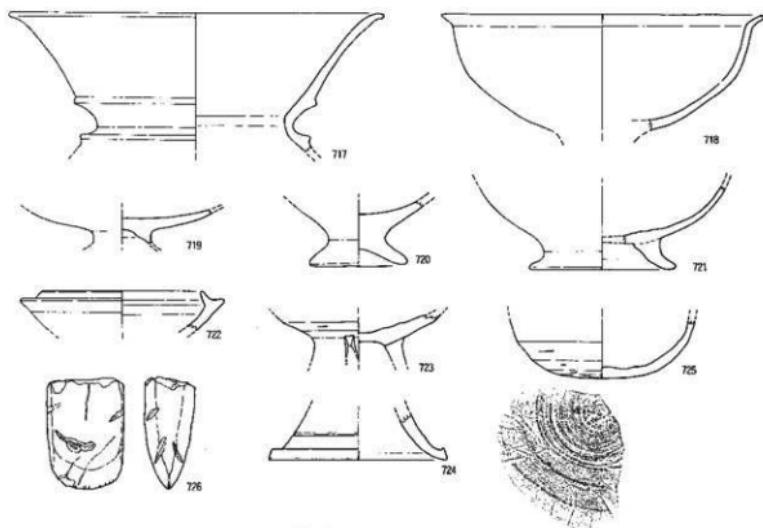
竹ヶ崎遺跡の調査中には遺構外からも大量の遺物が出土している。ここではそれらの遺物の中から何点か選んで掲載することとした。遺構外の遺物の割合などを見るとやはり大半は塩津5期のものであった。谷筋の遺物包含層は近世削平段1の北側に位置し、S I 09とS I 17に挟まれるようにして加工段15の西側に下る谷筋に堆積していた。ここではそれらの遺物を任意に三等分して、それぞれ、南、中央、北としている。また、碧玉の未製品や剝片などが出土しており、玉作関連の遺構を持っていた可能性も多い。その他にも平安時代の突帯の廻る平瓶などが出土している。なお、近世の遺物は写真掲載のみに留めたのであからず。

鼓形器台700は口径13cm底径約7cm器高約9cmの小型品で脚部に径5mmの円形透かしが一対入る。淡茶褐色の胎土には2mm程の長石、石英等をよく含む。大型の高杯703は径5.5cmの大きな円盤で充填されており、その中央には3mmの軸孔が穿孔貫通しており、杯部内側から1mm程の粘土を張って荒いハケで調整されているが、中央部は3.5cm程の指頭圧痕が残る。淡茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。706は断面台形を呈す突帯状の土製品で、淡黄褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。管状土錐707はやや欠けているが長軸4cm、重量6.14gを測り、樽形を呈す。淡黄色の胎土には1mm以下の長石、石英、赤色土粒などを含む。須恵高杯708は脚に二カ所の透かしが細く開き、脚上部に浅い沈線が2周する。淡灰色の緻密な胎土を持つ。甕または壺の体部709は径4cm程の発達した平底を持ち、底部内側にはヘラ状工具に寄る調整の跡が見られる。体部中程には接合痕がハッキリと残り、その内側にはヘラ状工具か、若しくは爪の跡が1.5cm間隔で右上がりに残っている。淡茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯713は脚の接合が剥離しており淡黄褐色から淡赤色の胎土に1mm以下の長石、石英等を含む。蓋716は外に聞くつまみ端部を丸く収めており、中央には径8mmの穿孔が為される。明橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。薄作りの高杯718は深い杯部の端部が外側につまみ出されており、暗黄褐色の胎土に1mm程の長石、石英、黒色及び赤色砂粒、灰色土粒等を含む。低脚杯720は深い杯部と柱状の脚を持ち、脚裾は余り開かない。淡茶褐色の胎土には1mm程の砂粒を含む。低脚付き碗721は深い杯部に径7.5cm程の低い脚を持ち、暗橙褐色の胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。722~724は須恵器である。726のハマグリ刃磨製石斧は所々傷が付いており、二次的な使用によって付いた可能性が考えられる。甕730は口縁外面から頸部まで同じ工具による擬凹線が施される。暗黄褐色の胎土には2mm程の長石、石英等を含む。甕733は複合口縁が外反しており、端部は先細りして収まる。口縁外面にはナテ調整が施されており下半分に擬凹線が二周巡っている。暗茶褐色から黒色を呈す胎土には2mm以下の長石、石英等を含む。743・744は内傾する複合口縁を持つ壺で、743は口縁端部を外側につまみ出しており、複合口縁部の稜はやや突出している。744は口縁端部を上方につまみ上げており、複合口縁部の稜は突出しない。745は壺の頸部と思われ、幅1cmほどの突帯には竹管文が密に巡る。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を少量含む。749・750は単純口縁甕で、749は厚い口縁の端部を丸く収めており、暗茶褐色の粗い胎土には1mm程の長石、石英等を含む。750は、薄い口縁の端部を丸く収めるものの、橙褐色のきめ細かい胎土には1mm以下の砂粒を含む。鼓形器台751は発達した筒部を持ち、暗茶褐色の胎土には2mm程の長石、石英等を含む。小甕752は口径9cmの肥厚した口縁を持ち、器高は8.4cmにな

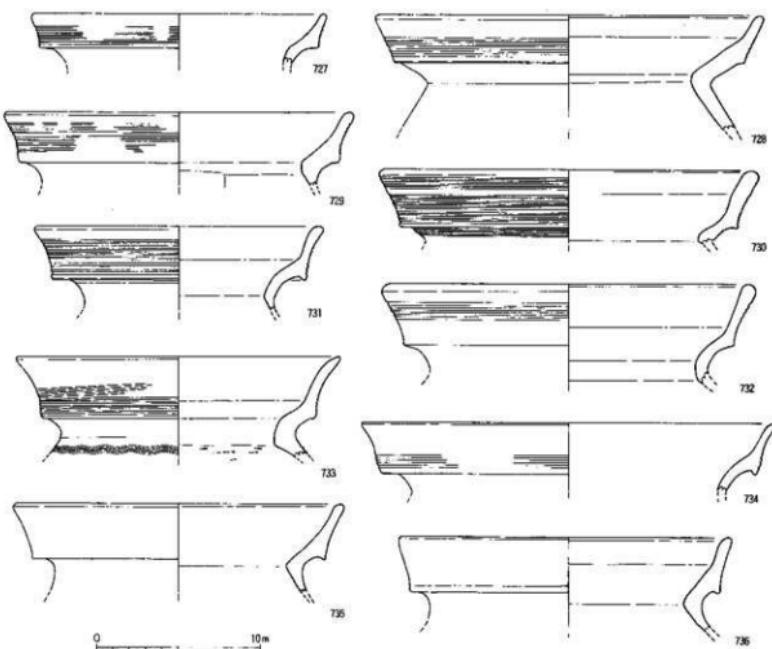


第180図 竹ヶ崎遺跡遺構に伴わない遺物実測図 (1) S = 1/3

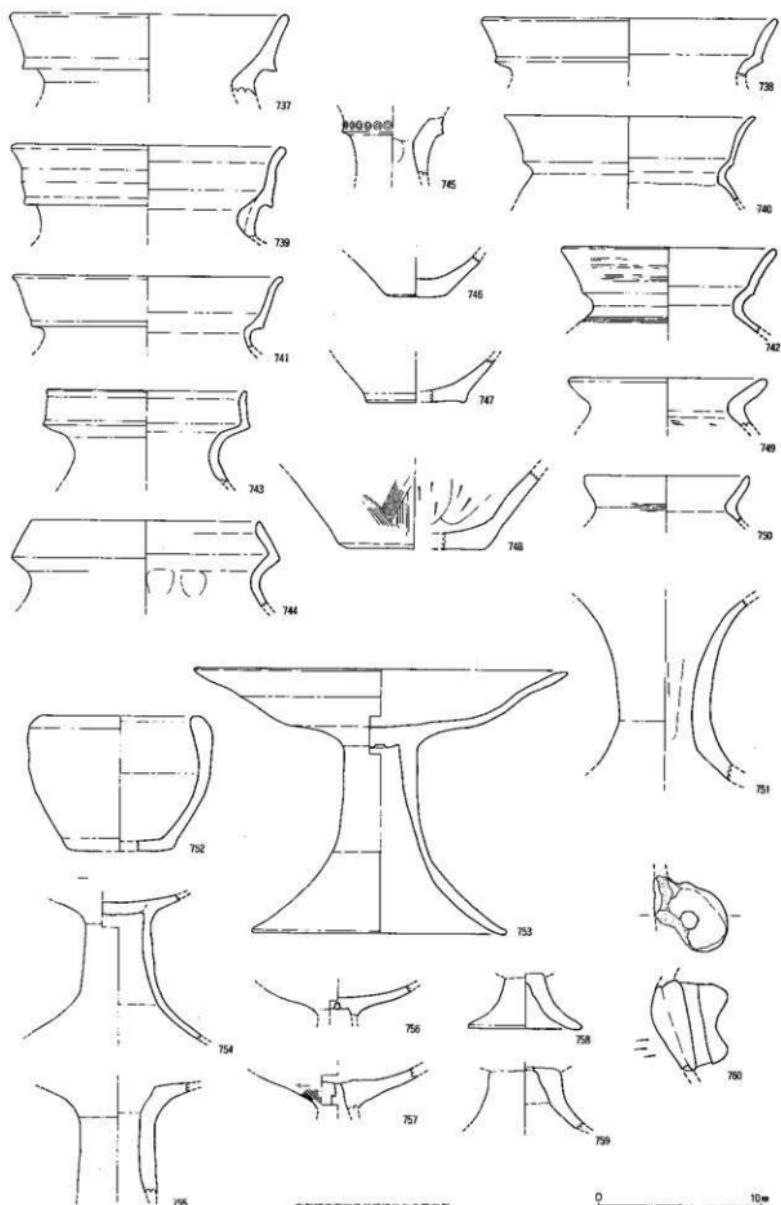
る。茶褐色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。高杯753は口径23cm底径16cm器高16cmを測る。杯部は浅く軽いS字を描いて外反し、その端部は丸く収まる。760は取っ手と思われ、上が大きく、下が小さく作られており、径1cm程の穿孔が成される。取っ手の中程は絞られている。淡黄白色の胎土には1mm程の長石、石英等を含む。小型の壺762は直する短い複合口縁の端部を丸く収めており、口縁外面には4条の回線文が施される。頸部には三日月状の刺突が巡っている。高环781は他地域の影響を色濃く受けしており淡茶白色のきめ細かい胎土には1mm程の長石、石英等を含む。783はいわゆる上東式の長頸壺の模倣品と思われ、口縁端部は上下に拡張されており、薄く立ち上がる。下方拡張



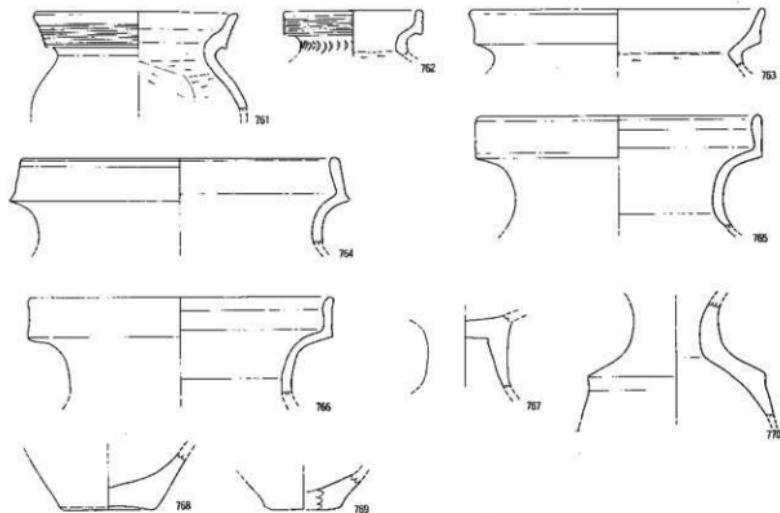
第181図 竹ヶ崎遺跡遺構に伴わない遺物実測図 (2) S=1/3



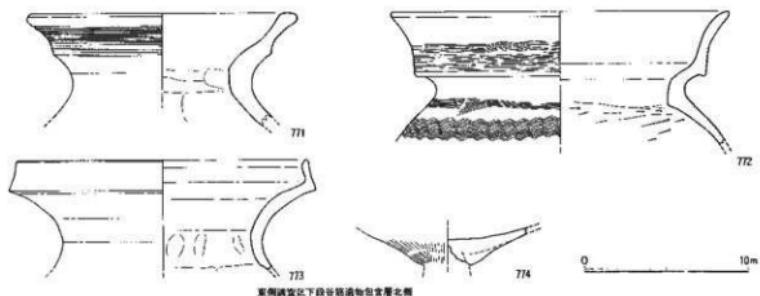
第181図 竹ヶ崎遺跡遺構に伴わない遺物実測図 (2) S=1/3



第182図 竹ヶ崎遺跡遺構に併わぬ遺物実測図 (3) S = 1 / 3

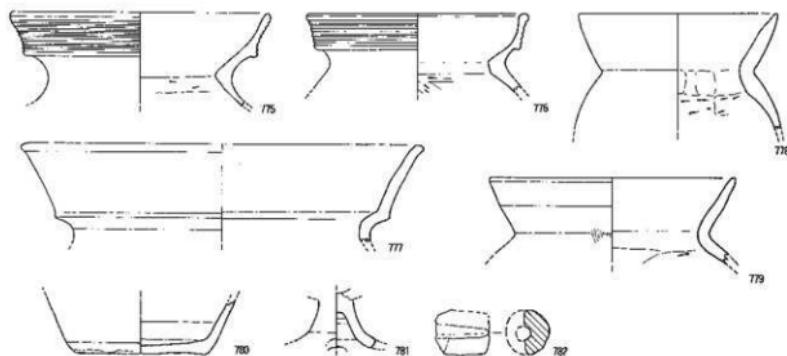


東側調査区下段谷底遺物組成中央

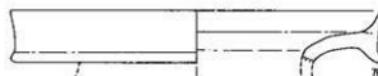


第183図 竹ヶ崎遺跡遺構に伴わない遺物実測図 (4) S=1/3

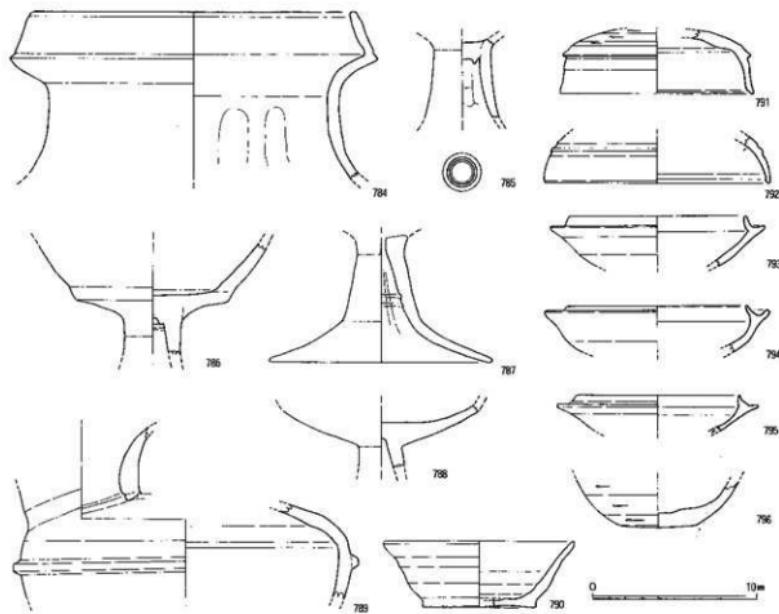
部はやや外側につまみ出されている。暗黄褐色の胎土には2mm程の長石、石英等を含む。高杯785は円盤充填されているが充填部には径1.3cmの棒状工具による押さえが為されている。淡茶褐色のきめ細かな胎土には、1mm程の長石、石英等を含む。須恵平瓶789は体部に断面台形の突帯を巡らせており、青灰色の胎土には余り砂粒を含まない。797は安山岩製と思われる石鎚で全長1.5cm程あるが、先端部は欠損している。798は黒曜石製の剥片で全長2cm程ある。799は緑色凝灰岩製と思われる未製品で打撃痕が残る。



東側調查区下段西側遺物包含層

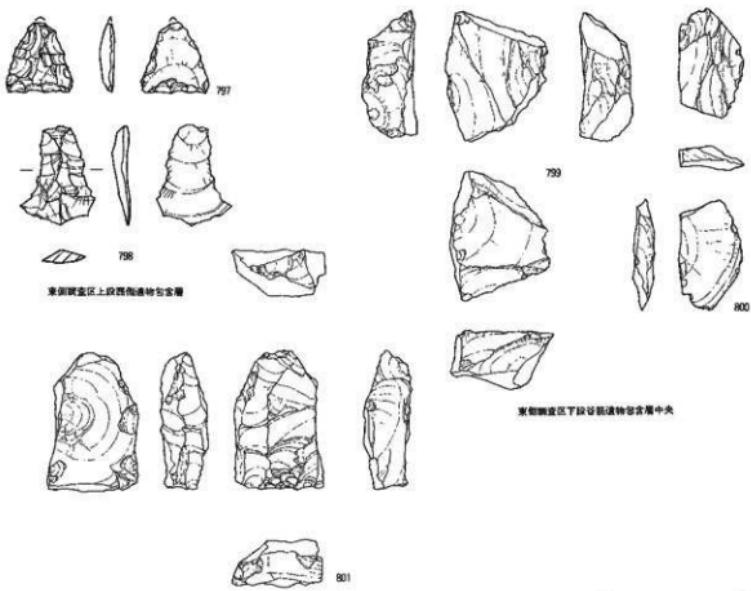


西側調查区南側遺物包含層



西側調查区北側遺物包含層

第184図 竹ヶ崎遺跡構に伴わない遺物実測図 (5) S = 1 / 3



第185図 竹ヶ崎遺跡遺構に伴わない石器実測図 S=1/1 (799~801はS=2/3)

800は同じく緑色凝灰岩製と思われる淡緑色の剥片である。長軸は3.5cmある。801は碧玉製玉未製品で、光沢のある暗緑色と淡緑色の入り交じった色調を呈す。長軸4cmを測る。

竹ヶ崎遺跡では塩津5期のものと思われる玉作関連遺物出土遺構が、加工段07・S I 13・S I 15と検出されており、塩津1期と思われる玉作関連遺物出土遺構のS I 11も検出されている。これらの遺構では數種類の玉素材を使用しており、弥生後期における玉素材の転換期(緑色凝灰岩→碧玉)の内に含まれていると思われるが、出雲地方におけるこの時期の緑色凝灰岩製玉素材の出自、流通等に不明な点が多く、今後の研究に待たれる所である。

S I 13・15では碧玉製及び緑色凝灰岩製の玉未製品や、剥片等が出土しており、竹ヶ崎遺跡の玉作中心地ではないかと推察されるが、遺構外の遺物を合わせて見ても、未製品及び剥片の出土量が、通常の玉作遺構と比べて明らかに少なく、この地で專業的な玉作が行われてきたとは考えにくい。おそらくここでの玉作は小規模に行われ、一時的なものだったと思われる。それは季節労働的なものだったか、或いは必要に応じて工人を他所から喚んで玉作を行ったものであろうか。また、ここでは塩津5期の内に建て替えが行われており、新しい竪穴住居S I 12・14では玉作が行われた痕跡が見あたらない。このことから言えることとして、玉作の場所を移動したか、若しくは塩津5期の玉作はここでうち切られたのではないかと言うことが挙げられ、後者の理由としては、何らかの事情によりこの時期花仙山からの玉素材の供給が途絶えたのではないかと考えることも出来うる。

(梅木 茂雄)



第186図 竹ヶ崎遺跡近世造構配図 S = 1 / 600

## 第4節 近世の遺構

### 近世の遺構の概要

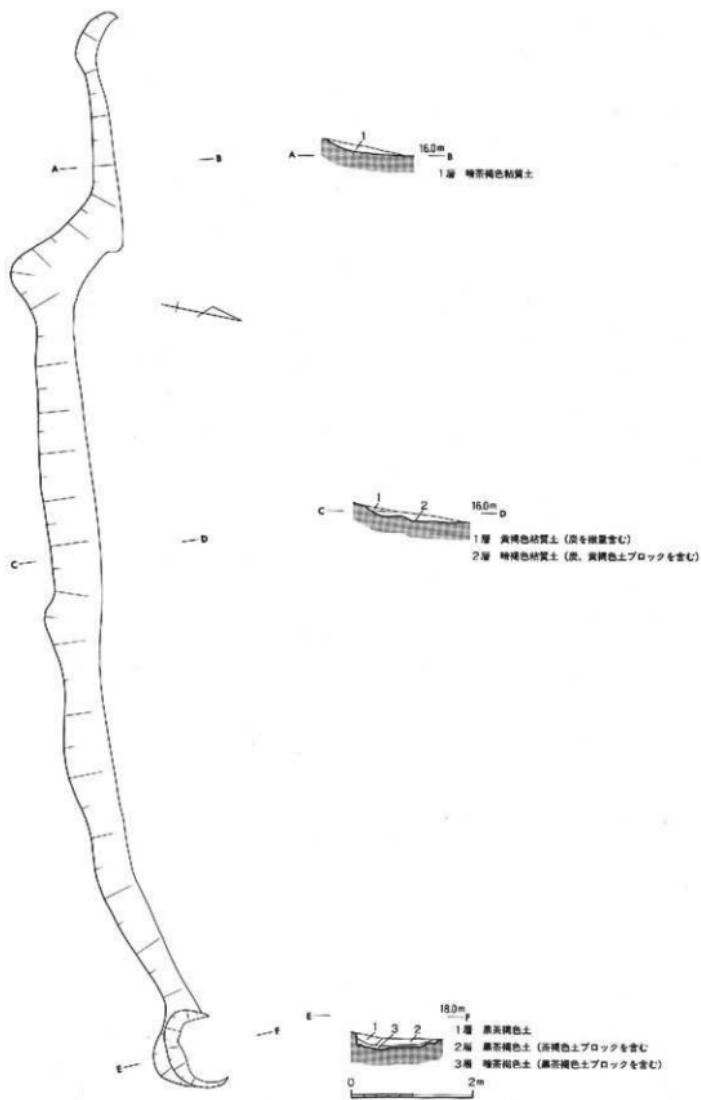
竹ヶ崎遺跡は近世の段階で大きな地形の改変を受け、微妙な自然地形の凹凸がほとんど均されてしまっていた。この大規模な近世の改変部分は大きく3つのブロックに分けることができる。ひとつは上半部に大きく広がる削平地で、その西側には溝によって2つの小区画が設けられている。この削平地の上半は緩やかな勾配があり、中央下付近には平坦地があって遺構が集中して検出された。「上方削平地」と呼ぶ。この上方削平地の下方、調査区中央部の下付近には溝で細かく区画された削平地があり、南西端の区画には石垣状の石列も見られる。「下方削平地」と呼ぶ。もうひとつは調査区の西端付近に広がる削平地で、東寄りを溝で二つに区画されている。「西側削平地」と呼ぶ。

**下方削平地の遺構** 下方削平地は、溝や段で細かく区画が分けられているのが特徴で、各面はほぼ水平である。この削平地の西端には、レベルの違う3つの段を通してスロープが設けられており、道ではないかと思われる。このスロープの最上段は約11.5m×5.5mの範囲が溝で囲まれ、壁に石が詰められていることから居住用の建物があったのではないかと推測している。この区画のすぐ上に大きな穴(S K18)が掘られ、拳大の石とともに大量の陶磁器や土師質の土製品などが投棄されていたこともその根拠である。この前面が前庭状に張り出しているのもそれを思わせる。その周囲の区画も上面が水平に加工されており、付随する建物があった可能性がある。

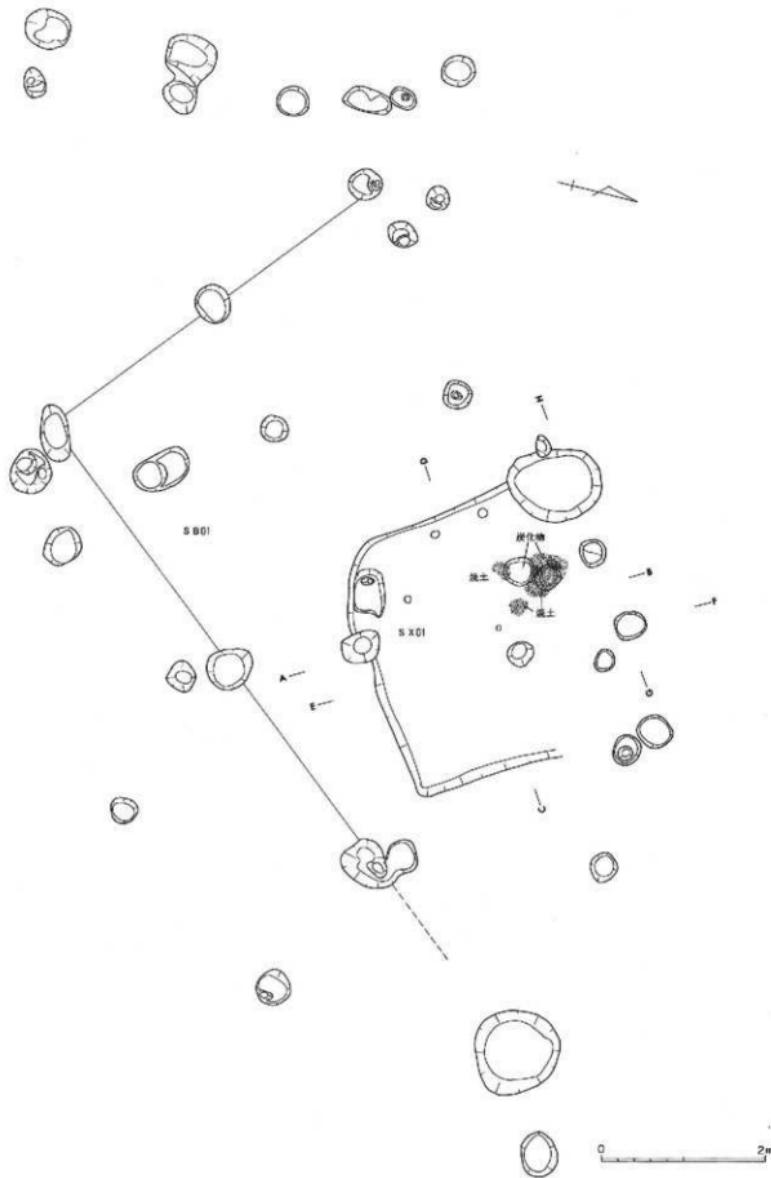
石垣の区画の背後に検出された陶磁器等を廃棄したと考えられる穴(S K18)は、3m×2m程度の楕円形の大型のものである。拳大の石とともに、食器等の不燃物を一気に投棄した状態が想定できる。出土した遺物は、肥前系の陶磁器が最も多く、磁器染付、白磁壺、青磁、陶胎染付、仏具と思われる小型磁器などがあり、そのほかにも鉄軸のかかった灯火具<sup>(1)</sup>や薄い褐色釉のかかる擂り鉢もかなり出土している(巻頭カラー図版8)。土師質の焼物では火鉢と推測されるものや、長さが36cm



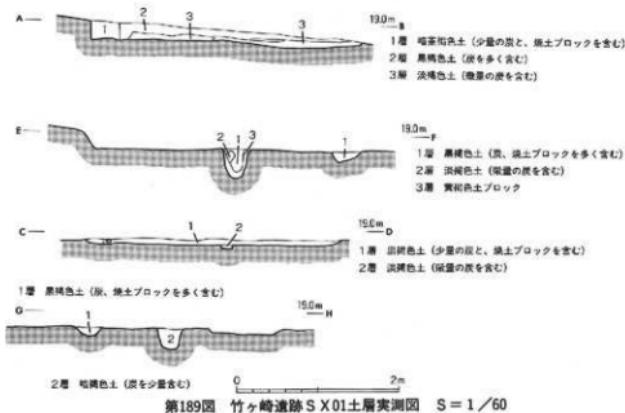
竹ヶ崎遺跡下方削平地の石垣 奥の集石はSK18検出時の状況



第187図 竹ヶ崎遺跡近世削平段02・SK15実測図 S = 1 / 80



第188図 竹ヶ崎遺跡 S X01周辺造構配置図 S = 1 / 60



第189図 竹ヶ崎跡 S X01土層実測図 S = 1/60

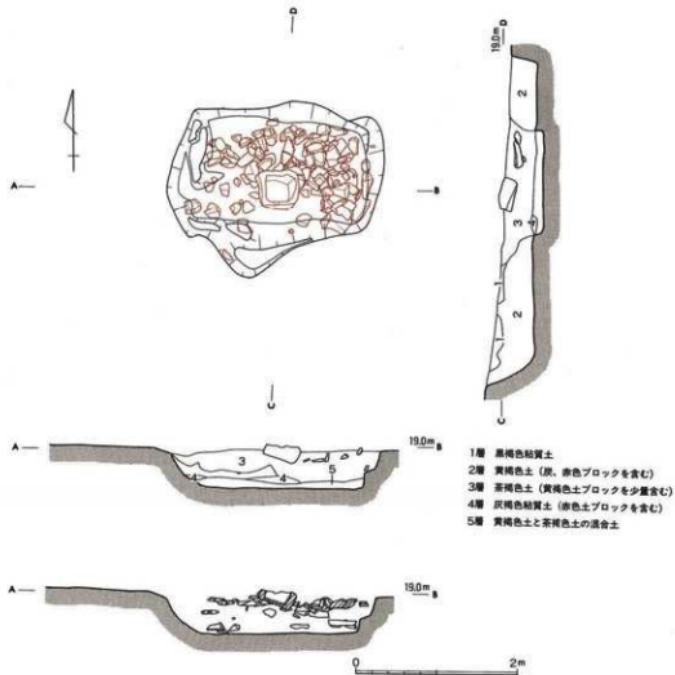
前後で幅に大中小のバリエーションのある薄い磚状のものも出土した。この磚状の遺物は片側に強く火を受けた痕跡があり、何らかの火処を構成する部材であったかも知れない。瓦も含まれており、瓦葺き建物があったかも知れない。これらの遺物はおよそ17世紀末～18世紀の特徴を有しており<sup>44</sup>、この削平地が使用された時期もこの遺物を根拠としている。

上方削平地の遺構 下方削平地のすぐ上方には広い平坦面が削り出されて多くの遺構が検出された。長さが16m以上の削平段2が平坦面の北端に設けられ、その上方に多くの土坑や柱穴、方形の落ち込み（S X01）などが検出されている。

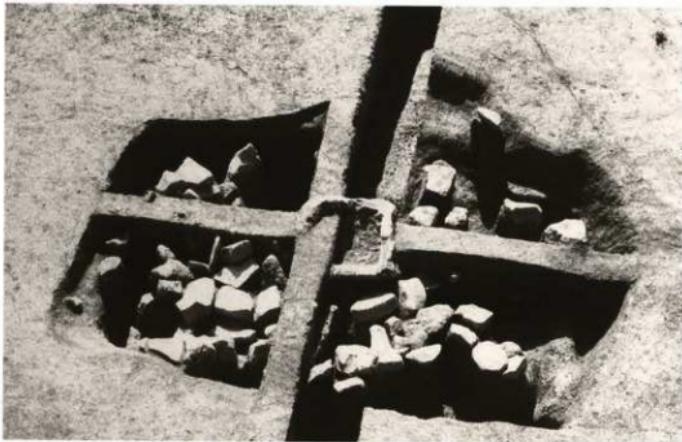
S X01(第188図、第189図) 上方削平地の土坑や遺構が集中する部分のほぼ中央で検出された、一辺3m前後の方形の落ち込みである。深さは20cm前後と浅く、内部の床面は水平である。床面の一部は焼けており、覆土内には大量の炭が含まれていた。床には杭状の小穴が認められ、北側には柱穴状のピットが短い間隔で並んでいることから、何らかの施設が作られていたのだろう。

またこの落ち込みの周囲を取り囲むように、掘立柱建物（S B01）が建つようである。全体規模は不明だが桁行3間程度、梁間が2～3間程度であったろう。この遺構の性格は、周りを建物で囲まれた、火を使用する何らかの作業場のようなものを想定できるのではないだろうか。

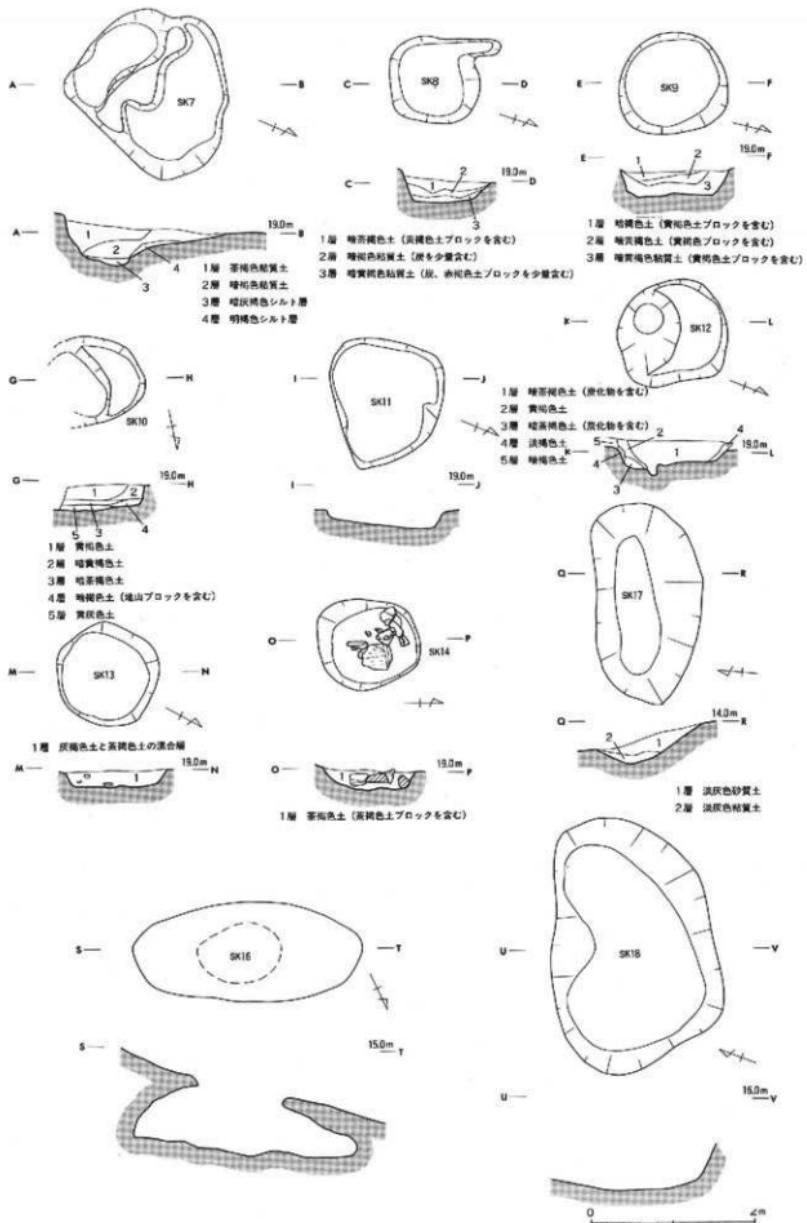
S X02 (第190図) S X01の東側で検出された長方形の土坑である。長さ2.5m前後、幅1.7m前後の長方形の土坑で、内部には大量の礫が詰まっていた。検出面からの深さは50cm前後、底面からおよそ30cm程浮いた状態で、浮石凝灰岩（荒島石）製の枠状製品が検出された。この枠状石製品は外法が45cm四方、内法が30cm四方の平面正方形で、高さが20cm弱を測る。全体的に丁寧に加工されており、底のコーナー部分に水抜きかと思われる穴が貫通している。この石製品の性格は不明だが、骨蔵器の可能性もある。



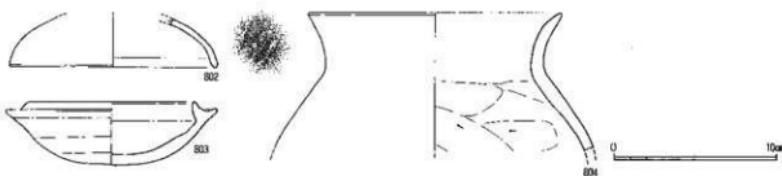
第190図 竹ヶ崎遺跡 S X 02実測図 S = 1 / 60



竹ヶ崎遺跡 S X 02



第191図 竹ヶ崎遺跡 SK07~SK18 (SK15を除く) 実測図 S=1/60



第192図 竹ヶ崎遺跡 SK12遺物実測図 S=1/3

土坑群(第186図、第191図) S X01、S X02や柱穴群の周辺からは、11穴の土坑が検出された。土坑の分布を見ると、2～3穴が近接して4群に分かれているようである。大部分が径1.2～1.5m程の円形を呈し、底面は概して平坦である。深さは浅いものは20cm程度、深いものでも50cm程度だが、上面は削れてしまっているかも知れない。注目すべきは、SK14からSK02から出土した荒島石製の舟状石製品と同様のものが出土していることで、その大きさから見てこれらの土坑は墓と見るのが妥当であろうか。

S K12出土遺物(第192図) これらの土坑群のうち、SK12から須恵器と土師器が出土している。この土坑は明らかに上位の面から切り込んでいるので、この須恵器と土師器は混入品と考えられる。土坑を掘り込んだ際に下方から出土したものだろう。

802と803は蓋環でセットとなるだろう。蓋の復元口径は12.0cm、大部と天井部の境には段や沈線などは認められない。杯身は立ち上がりが内傾してあまり伸びないタイプで、底部にヘラケズリは見られない。いずれも大谷編年出雲5期に併行するものである。804は土師器の甕である。胴部から口頃部にかけて、緩やかに湾曲しながら開き、口縁は単純口縁で端部を丸くおさめる。前述の須恵器と同時器と見て矛盾ない個体だろう。

近世遺構群の性格 前述したように、近世の削平地は大きく3つのブロックに分かれれる。それぞれの性格を推測してみると、下方削平地は上面が水平に加工されていることや、道が各区画を繋いでいること、近辺の穴から生活用具が大量に出土したことなどから居住域と考えられる。

上方削平地は、その北側部分(下方削平地のすぐ上方)は平坦で様々な遺構が検出されている。ひとつは作業場的な建物と推測され、ひとつは墓地と推測される。双方が並存したとは考えにくいため、時期差があるのだろう。いずれにしても居住域の背後の施設にあたる。上方削平地の上半は溝で囲まれているが傾斜があるため、建物が建っていたとは考えにくい。畠地等であった可能性がある。西側削平地も同様である。

以上のようなことから、この近世の遺構群は18世紀前後の富裕な農民層の屋敷地の可能性を考えておきたい。

(丹羽野)

#### 注

- (1) 小林克「近世照明具研究へのアプローチ」
- (2) 西尾克己、湯村功氏から多くのご教示を受けた。
- (3) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

塩津丘陵遺跡群  
(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附 亀ノ尾古墳)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅸ

(第1分冊)

1998年3月

発行 建設省松江国道工事事務所

島根県教育委員会

印刷 佛島根県農協印刷